
『Dragon Sword Saga 3』 砂漠の謎

かがみ透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『Dragon Sword Saga3』砂漠の謎

【Nコード】

N3151Y

【作者名】

かがみ透

【あらすじ】

普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ青年傭兵ケイン。穏やかで、無欲な彼を、伝説の戦士と信じて付いていく妖精ミュミユ。

異次元から、雷獣神を呼び出すという、最強の召喚魔法を操る、美少女戦士マリスと、美青年魔道士ヴァルドリューズのコンビと、次元の穴を塞ぐ旅に同行するケイン、魔法剣の傭兵カイル、魔道士見習いに転向した巫女のクレアで、旅の仲間が結成される。

アストーレ王国の魔物と次元の穴を塞いだ一行は、魔道士参謀ダミアス、フェルディナンド皇国に住む木の魔道士バヤジッドと親しくなる。

辺境に出現する、魔界と通じる『次元の穴』。

それを塞ぐため、アストーレから近い砂漠に向かう一行『白い騎士団』。

だが、どこか違う？

マリスを狙うベアトリクスからの刺客と対決。

ケイン懐かし（？）の敵も現れ、大昔に起きた帝国の謎にも触れる。時空を越えたマリス、最大のピンチ！？

分離した守護神『獣神サンダガー』が暴走！？ 世界も大ピンチに??!?

マリス、ヴァルドリユーズとはぐれたケインは、サンダガーを止めることが出来るのか!？

自作サイト『Mystic Rhapsody』 ミステイク・ラブソディー』、投稿サイト『20代から中高年のための小説投稿&レビューコミュニティ』にも、掲載しています。

これまでのあらすじ・登場人物

十 これまでのあらすじ 十

普段はよろず屋、実は二つの伝説の剣を持つ、旅の傭兵ケイン・ランドールは、

妖精のミュミュを連れ、さびれた村を訪れた。

そこで、魔法剣を持つ傭兵カイル、巫女で今は魔道士を目指すクレアと出会い、

不思議な魅力を放つ男装の美少女戦士マリスと、

相棒の謎めいた魔道士ヴァルドリユーズの旅に同行する。

大国ベアトリクス王国の出身であるマリスは、大魔道士ゴールドナスの命で、

東方の魔道士ヴァルドリユーズと共に、獣神『サンダガー』を呼び出し、

魔物の吹き出す次元の穴を潰してまわる旅をしていた。

マリスとヴァルドリユーズの目的は、

最終的には、復活する魔王との対決も考えられるのか ！？

マリスは、伝説のゴールド・メタル・ビーストの化身『獣神サンダガー』を、

守護神に持つという稀な人材であるのが災いし、追われる身となる。現に、ゴールドナスと敵対する蒼い大魔道士ビシヤム・アジズは、マリスを手に入れようと現れ、ケインの持つ伝説の剣のをも警戒する。

アジズの能力は、上級魔道士ヴァルドリユーズをも凌ぐという。
ヴァルドリユーズの考えでは、ケインの持つ伝説の剣でなら、
彼のかなわない魔の手からも、マリスを守ってやれるのではないか、
と。

ケインは、伝説の剣を、彼女を守ることに
役立てようと決心したのだった。

果たして、ケインは、

伝説の剣の力を發揮することが出来るのか ！？

十 登場人物 十

ケイン（18）……二つの伝説の剣を持つ戦士。

本職は傭兵で、普段はよろ

ず屋。

マリス（16）……失踪中のベアトリクス王国王女。

剣と武ぶ浮う遊ゆう術じゆつを操る少女戦

士。

ヴァルドリユーズ（24）……マリスの相棒。上級魔道士。

ミュミュ【妖精】……ケインと旅をしてきた、子供のニンフ。

カイル（20）……チャランポランで女好き。軟派な傭兵。

クレア（18）……元巫女で魔道士見習いの少女。

バヤジッド(623)……フェルディナンド皇国に住む、木の魔道士。

サンダガー【神】……マリスとヴァルドリユーズによって、

召喚される雷獣神。

ライバル！？（１）

嘆き、悲しみ、空しさ、絶望

旅人よ、気を付けなさい

迷えば、永遠に彷徨^{さまよ}うであろう

百年、五百年、千年と

人だけでなく、

すべての生き物だけでなく、

時には、大国さえも、抜け出せず

もがき、苦しみ、埋もれていく
！

魔神の痕跡

忘れ去られ

愚かな過ち、繰り返すは、

悲劇を、またも繰り返す

眠られよ

今は、ただ、静かに

『砂漠地方言い伝え』より 吟遊詩人の唄

プロローグ

「うう、疲れたよ」

「もう少し行けばなんとかなるわよ」

「だけど、もうずっと歩いてるのに見付からないなんて、やっぱり、道間違えたんじゃないかなあ？」

「……かしらね」

「え〜っ！ もう、魔力も大分減っちゃったし、疲れたし、眠いし、町まで戻る気力

もないよ〜！」

「あ〜、もう、うるさいわね！ だったら、その辺で寝るわよっ！」

「は〜い、おやすみなさ〜い」

第 ？ 話 『ライバル！？』 1 1

『白い騎士団』を名乗る一行は、中原のアストーレ王国の首都であるアトレ・

シティーでウマを購入し、地図にもない未開の地を進む。

確かな情報もなく、魔道士ヴァルドリューズの言う大魔道士ゴールダヌスの予言

を、頼りにするほかない。

『未開の地には、次元の穴が出現している可能性が最も高い』という、ただそれだけを。

『アストーレで集められた情報だと、『向こう岸』から来た人達は、みんな南下し

て、遠回りしてアストーレに入ったって聞くぜ』

傭兵のカイルが、長くストレートな金髪を、かき上げながら、そう言った。

「でも、それだと日数はかかるし、みんな魔物を避けて通りたかったからでしょう？」

それじゃあ、意味が無いじゃない」

白い甲冑に身を包んだ、少女戦士マリスが答える。

「だけどさあ、どこまで続いているかわかんない荒地を、ただひたすら突き進んで

いくなんて、無謀過ぎないか？ ヴァルが、魔法で魔物の居場所を

突き止めればいい

じゃないか」

カイルが再びそう言つと、

「まあ、なんてこと言つもの！？ 広範囲に渡る『透視』は、魔力の消耗がずつと激しいのよ」

すぐさま、巫女であり、魔道士見習いでもあるクレアが、目を吊り上げた。

「じゃあ、ちょっと行ってみて、迷ったらヴァルに『視^みて』もらおうかしら」

マリスの発言に、それこそ無謀だと皆で言いかけた時、

「私は、それでも構わない」

というヴァルドリユーズの一言で、決まってしまった。返す者はいなかった。

そこは、アストーレから西へ向かった未開の地だった。

周りには何も無く、ごつごつした岩ばかりの荒れた土地だ。

アストーレの魔道士参謀ダミアスの言った通り、町らしいものは、どこにも見当たらない。

一行は、岩に腰掛け、赤い飴玉をマリスから受け取り、なめていた。

知り合いになったフェルディナンド皇国に住む、木の魔道士バヤジッドが作った、

一日に必要な栄養分の詰まった飴玉で、なんとか飢えを凌いできているが、ほのかに

果実のような味がするだけで、美味しいと感じたり、満腹感が得られたり、ということもなく、どこか満たされない。

「ちよつと偵察に行つてくるわ」

マリスはウマに飛び乗った。

「俺も行く」

もう一人の傭兵であるケインが、ウマに跨がろうとすると、カイルが冷やかすような声を上げた。

「おいおい、ケインは、もうマリスに雇われてるわけじゃないんだろ？ マリス

は、俺たちよりも強いんだから、何も、そう護衛して回らなくてもいいんじゃない？」

マリスは、ちらつとケインを見て、ウマを走らせた。カイルの言うことには、少々

引っかかったが、ケインは後を追った。

「ほんとに、どこもかしこも荒れ地だなあ」

馬上で、きよろきよろしながら、ケインが呟く。

「ケイン」

皆のところからかなり離れたところで、マリスがウマを寄せる。

マリスは、年齢よりも幼く見えるケインの顔立ちの、さらに、青い、ネコのように

目尻の上がつた大きな瞳を、睨むとまではいかないまでも、見つめて続けた。

「あなたねえ、あたしが王女だからって、何も、特別扱いすることはないのよ」

アストーレを出る頃、マリスが西洋の大国ベアトリクスの王女であり、現在の

女王、王太子に次ぐ第二王位継承権者であることを知ったケインは、亡命したベアト

リクスからの追手や、彼女の高い魔力に目を付けた大魔道士から守ろうとするあま

り、彼女の後をくつついて回っていた。

「……さすがに、鬱陶うつとうしかったか？」

ケインが苦笑いする。

マリスは、その紫水晶のような瞳を、じつと彼に向けていた。

「そんなことしてると、そのうち、みんなに、あたしに気があるんじゃないかって、

思われちゃうわよ」

ドキン！ と、ケインは心臓が大きく音を立てた気がした。

凶星を突かれた思いだった。

確かに、マリスには興味を持ち、惹かれていく自分もいるのは否定できなかった。

だが、その反面、彼女の予想外の行動には常に圧倒され、そのペースに付いていく

のは楽なことではないとも思う。

ましてや、亡命中とはいえ、王女の身。ベアトリクス王太子の許い嫁なすけ、

すなわち婚約者でもあるのだ。

どう考えても、普通の恋愛に発展しようのない相手だった。

（そんなヤツにホレでもしたら、きつと心労で身も心もズタズタになり、人生を棒に

振るのは間違いない！）

そう懸命に、ケインが自分に言い聞かせている間も、そんなこととは知る由もない

マリスは、構わず続ける。

「だから、王女だなんて知られたくなかったのよ。あたしはね、王位継承権なんて放

棄してるのよ。それを、公の場で示すヒマがなかったただけでね。二度とあの国には、

戻る気はないんだから」

うつむき加減に少し唇を尖らせる。

その様子は、どこか可愛らしさがあり、やはりセルフィス王子に未練があるのだ

と、彼は確信した。

「だからね、王女だってことは、意識しなくていいの。あたしはね、みんなとは普通

に仲間でいたい」

怒っているような目をケインに向けるが、セルフィスのことを知ったケインには弱

みを握られてしまったように思っている彼女が、取り繕っているのだろうと、ケイン

は解釈し、あえてそれによって、たじろいだ様子を装った。

「俺は、ただ……、どこで、あの蒼い大魔道士が、お前を狙っているかわからないん

だし……」

「ふん、そう」

マリスは、面白くなさそうに、打ち切った。

「つまり、あたしのことを、守ってやるうってわけ？ 少なくとも、あたしは、その

辺の王女殿下よりも頑丈なつもりだけど？」

「確かに、それもそうだな」

ケインは、わざと考えているポーズを作る。

マリスは、面白くなさそうに、それを横目で見ている。

「わかったよ、マリス。だったら、俺は、今まで通りに、お前と接するようにする

よ」

何か言いた気な目を向けていたマリスは、「よろしくね」と、横目でいうと、無言

のまま、ウマを元の方向に戻し、進ませた。

「しばらくは、このまま荒れ地が続いているわ。遠くで砂埃（はなはし）が見えたか

ら、もしかしたら、その辺りから砂漠に入るのかも知れないわ」

マリスが説明する。

「いよいよ砂漠か……。ああ、マジに通らなきゃいけないのかよお〜!?」

カイルが、思いつ切り嫌そうな顔をした。

「何よ、砂漠くらいで、そんな声出すなんて」

クレアは、情けないと言わんばかりに、呆れた表情でカイルを見る。

「クレアは、モルデラから出たことなかったんだろ？ だから、砂漠の辛さを知らないんだよ」

普段はヘラヘラしているカイルだったが、こればかりは、ぶーぶー言い返す。

「砂漠なんてさ、水がなくなったら終わりなんだぜ？ 日差しは容

赦なく、ガンガン

照りつけてくるしさー、食料になりそうな実のなった木なんか、どこにも生えてないしさー。

それに、何よりも、目印になるモンが何もないんだぜ？ 砂丘は

風向きでどんどん

形を変えてくし、砂に足を取られて、前に進むのさえままならないつてのに。ぐるぐる

と同じところを永遠にさまよいつづけるか、そのうち砂地獄にはまっちゃうかが

いいところだぜ」

あえて悲惨なことばかり言って、クレアを怖がらせて楽しんでるのは、ケインに

はわかっていた。

案の定、クレアは真に受けて聞いていて、顔から血の気が引きかけていた。

「でも、砂漠には、綺麗な水の湧き出るオアシスがあるっていうし、バヤジッド

さんからもらった飴もあるから、食べ物心配もないし……」

「いやあ、わかんねえぞ。オアシスに辿り着く前に、逝っちゃう人はいっぱいいる

ぜ。そのせいか、夜になると、砂漠には死霊が出るっていうし、そんなヤツら相手にして

たら、夜が明けちまって寝不足にはなるわ、そのうち、バヤジッドのアメもなくなっ

ちまうかも知れないしな」

カイルのいうことをまします真に受けたクレアは、今にも悲鳴を上げそうだった。

「さ、じゃあ、そろそろ出発しましょうか」

何事もなかったかのように、マリスがウマに跨がる。

不安気な面持ちで、マリスが手を引っ張り上げられ、前にクレアが乗る。ウマに

乗ったことのないクレアと、マリスが一緒に乗り、後は、一人ずつウマに跨がっている。

「ふえーっ、あれでも女とはねえ。あいつ、怖いモンねえのかな？」

カイルが、ケインにだけ聞こえるように言った。

「だけど、俺、実は強い女も好きなんだ」

カイルは、そう続け、にやっと笑ってみせた。

ケインにとっては、人生を棒に振っても痛くも痒く感じない男の、
勇気ある発言で

あつた。

「ねえ、この『正義の白い騎士団』って、誰がリーダーなの？」
辺りは相変わらず荒れ地にこつこつした岩が転がっているだけである。

小さなニンフのミュミュが、バタバタ飛びながら、代わり映えのない景色に飽きてきたのか、誰にもなく聞いていた。

その前に、『騎士団』とありながらも、そこに『騎士』はいなかった。

唯一、騎士の経験のあるマリスが、アストーレでは、流浪の騎士マリユス・ミラー

を名乗っていた時に適当につけた一行の名称であつたが、誰も気に留めず、そのままにしてあるのだった。

「そんなの決まってるじゃん」と、カイルが言った。

「マリスだろ？」と、横からケイン。

「俺だよ」カイルは、けろつと答えていた。

ケイン、クレア、マリスは、ウマから落ちそうになった。

「カイルだったの？」

「当つたり前だろ？ 騎士団一セクシーなイケメン男子であるこの俺の魅力で、このチームはもってるようなもんなんだぜ」

「へー、そうなんだー……??」

意味のわからないことを得意そうな顔で言うカイルに、ミュミュは目を白黒させていた。

「なーに言ってるんだか。マリスと一、二を争うトラブルメーカーのくせして」

ケインの呆れたセリフに、カイルは、ぼんと手を打ち鳴らし、き

らきら瞳を輝かせた。

「おお、それ、いいな！ もらったぜ！ 俺にはリーダーなんてのより、ふさわしい

呼び方があったじゃないか！ 騎士団一のムードメーカー、カイル様かあ！」

「そうは言っていないつつうのに、相変わらず人の話聞かないんだから」

呆れているケインを始め、クレア、ミュミュ、そして、マリスまでが口をぽかんと

開けていた。

次の偵察は、ケインとカイルで行う。

夜になる頃だが、岩場が続いているので、どこかせめて草の生えている

場所を探しに出かけたのだった。

随分先に行ったところに、木や草のあるところが見られる。

そこでなら、野宿が出来そうだと、二人が引き上げようとするので、カイルがウマを

止めた。

「どうした、カイル。何かあるのか？」

ケインがウマを寄せる。

「人が倒れてる。二人。……あれは、女だ」

そう言い終わるか終わらないうちに、カイルはウマを走らせる。ケインも後を追った。

カイルの言った通り、そこには、二人の女が倒れていた。

彼が抱き起こしたのは、黒髪で二〇歳くらい、女にしては、かなりの長身で、底の

厚いロングブーツを履いているため、立てば、ケインたちに追いつ

きそつなほどで
ある。

部分的に甲冑を着けていて、腰に剣を差していることから、一見して剣士であるこ

とがわかった。ただし、剣士にしては、かなり露出度の高い黒い衣装に、押し付けが

ましいほどの色気をまとっている。

もうひとり、小柄で、セミロングの金髪がふんわりしたカーリーヘアの、十四、

五歳の少女だった。

こちらは剣士ではなく、ひらひらしたピンクの服の上にマントをはおり、更に、

いろいろなアクセサリーを身に着けているところを見ると、どうも魔道士らしかった。

「息はあるぜ」

カイルが言う。そのままにしておくわけにもいかず、ケインたちは、彼女たちを運ぶことにした。

カイルは、小柄な少女の方を抱いて、ウマの鞍に乗せた。

彼の好みからすれば、当然色っぽい方なのだろうが、重さで選んだのだろうと、

ケインは踏んだ。

『色男、金も力もなかりけり』
アトレ・シティーでそう言った彼の笑顔を思い出す。

「どうしたの？ その人たち」

マリスが、偵察から戻った二人に近寄る。

ケインは目のやり場に困りながらも、黒髪の女剣士をウマから抱

きかかえて、降ろした。

「お二人とも、気を失っているだけだわ。こういう時は、水を飲ませてあげた方がいいわね」

クレアが、二人の額に手を当てたりなど、軽く診察して言った。
「この先、砂漠に入ろうっていうんだから、水がもつたいいわ」
ごきつ！

クレアが水筒を取りに行きかけたが、マリスが、ケインの抱えている女剣士の背に活を入れた。

クレアもケインもびっくりして、目を見開く。
女剣士も、跳ね起きた。

「大丈夫？ しつかりして！」
次にマリスは、カイルがウマから降ろしたばかりの少女の頬に、しれっとした顔

で、往復ビンタをくらわせていた。

（なんてひどいことを……！！）
（こ、この乱暴者……）

クレアとケインは、なす術すべ無く、目を見開いてそれを見ているだけだった。

「いったあゝい……」
ふわふわした金髪の少女が、赤紫色マゼンダの目尻に涙を浮かべながら、
ゆっく

り起き上がると同時に、ケインの抱いている女剣士も完全に目を開いていた。

「大丈夫か？」
女剣士の目と、ケインの目が合った。

切れ長の綺麗な青い瞳の、かなりの美人だったのだが
びたん！

！

いきなり左頬を平手で叩かれたケインは固まっていた。クレア、カイルも、停止している。

「この私に許可無く触わるなんて、いい度胸してるじゃないの！」
美しいアルトで、彼女は言い放った。

「いやあ〜ん、イケメンさんだ〜！ マリリン、ラッキー？」
巻き毛の少女は、少し鼻にかかった甘えた声を出し、ぴとっとマリリスにくっついた。

すると、突然、マリリスが立ち上がったので、少女は地面に尻餅をついてしまう。

「いったあ〜い！ ああ〜ん、スーちゃん！ このお兄さんたら、ひどいのよお〜！」

少女は、両手で目をこするようにして、わあわあ泣き出した。
スーちゃんと呼ばれた女剣士は、すっくと立ち上がると、威圧的にマリリスを見下した。

予想通り、一八〇センチ以上あるケインやカイルに追いつくほどのかなりの長身で、迫力もあり、並ぶと、マリリスが小柄な女の子に見えてしまうほどである。

「ちよつと、ぼうや、マリリンちゃんに、何するのよ！」
腕を組み、見下したまま、スーは言った。

「そつちこそ、それが助けてもらった人に対する態度かしら？ しかも、ひっぱたくなんて、あんまりなんじゃないの？」

マリリスも負けてはいなかった。ふんと小馬鹿にしたような笑いを浮かべている。

それを受けて、スーは、驚いて一歩下がり、再びマリリスを見る。

「あんだ……女だったの!?」

女剣士スーは、マリリンと名乗る少女を振り返る。

「ちよつと、マリリンちゃん、この人、女だわ!」

「ええ〜っ!? うっそお〜! マジで〜!?」

マリリンは、両手をグーにし、顔の側にもつていき、思いっきりブリッコポーズで

リアクションしていた。

マリスは、不気味なものでも見るように、マリリンを見る。

「へー、あんたも、女剣士だったの。ふうん」

スーは、落ち着きを取り戻し、マリスを上から下までじろじろと眺めてから、ふふんと笑った。

「この私の他に、女の身で剣士だなんてものには初めて出会っただ、まだガキじゃないの」

(ひっ!!)

固まっているケインたちをよそに、スーの口攻撃は続く。

「ほんとにそれでも女なの? かわいげもなければ、色気もない。

ま、女剣士なん

て、所詮はそんなものなのかも知れないけどね、私以外は。ほーっ

ほほほ!」

片方の手は腰に、もう片方の手は口元に添え、スーは、耳につく高笑いをしてみせた。

ケインたちは、ヒヤヒヤしながら、マリスを見る。

マリスは目を見開き、呆気に取られていたが、ふっと冷静な笑いを漏らす。

ライバル！？（2）

「あんたが女剣士だなんて、わらっちゃうわね。そんなフザケた格好で剣士が勤まってる？

剣の腕よりも、せいぜいその下品なお色気を磨くくらいしかしないでしようけど。

ほーっほほほ！」

マリスは、スーと同じポーズで高笑いを返していた。

（売られたケンカを、しっかり買ってる！）

ケイン、クレアは、ますます固まった。

「バカにして！ 私はね、剣の腕だって、結構立つんだからね！

それに、色気だっ

て、私ならではの立派な武器じゃないの！ 磨いてどこが悪いのよ？ あんたみたい

な小娘には、逆立ちしたって無理でしょうけどね！」

多少の色仕掛け技を使えるマリスを知るケインとしては、その挑発に簡単にマリス

が乗るとは思わなかったのだが

「ムネがデカすぎる女は、頭が悪いって相場なのよ！」

「なんですって！？ この男女！^{おとしめんな}」

「露出狂！」

二人の女戦士たちは、妙なことでケンカになっていた。

それを、傍観していたケインたちの間に、いつの間にか、マリリンが割り込んでき
ていた。

「このおにいさんも、このおにいさんも、ス・テ・キ？」

マリリンは、身体をくねらせながら、ケインとカイルに、ぼくつとした視線を送っ

てくる。彼ら二人は、二、三步後退る。

「ねえねえ、スーちゃん、この人とこの人と、どっちがいいと思う？」

マリリンは、ケインとカイルの腕の間に、勝手にぶら下がっている。

「うるさいわね！ 今取り込み中！」

振り向きざまに、スーは、はっとしたように口を噤んだ。

彼女の視線は、ケインたちを通り越し、その後ろにいたヴァルドリューズに、釘付けになっていた。

スーは、うつとりした目でヴァルドリューズを見つめ、思わず溜め息と言葉を漏らした。

「……ス・テ・キ？」

(ひえっ！)

マリスたち一行は、ヴァルドリューズ以外、皆、固まってしまっていた。

その場では、マリリンのきゃっきや笑う、楽しそうな声だけが聞こえる。

「なんて知的で美しい男……！ 見たところ、どうやら魔道士のようね」

スーが、ケインたちを押しつけてヴァルドリューズに近付き、片手を腰に当て、その豊かな胸を突き出すようにしながら、流し目を送る。

ところが、ヴァルドリューズの方は、眉一つ動かさず、いつもの冷たい視線を注いでいるのみであった。

「だめーっ！ ヴァルのおにいちゃんは、ミュミュのなんだからーっ！」

ミュミュが、ヴァルドリューズとスーの間に、パツと現れた。

ピンク色の髪に、ピンク色の瞳をつり上げている。

「ひゃっ！ 何よ、これ！？ よ、妖精！？」スーが、驚いて、後退った。

「きゃあっ！ コワイー！」マリリンも、ケインとカイルの腕に夢中でしがみつ
く。

「コワイだー！？ 何で妖精をこわがるのさーっ！？ かわいがれー！」

ミュミュが両手をぶんぶん振り回し、二人の間を飛び回る。

「いやあ〜！ 来ないでえー！」

「シツシツ！ あっちへお行き！」

「なんだとー！」

マリリンは泣き叫び、スーはミュミュを追い払おうとするので、

ミュミュは一層

怒って飛び回った。

「ちよつと、あなたたち！」

それまで圧倒されていたクレアが我に返る。

「出会い頭に人は殴るわ、ケンカはするわ、馴れ馴れしく甘えるわ
非常識も甚だ

しいわ！ まずは、助けてもらったお礼を言うのが、人としての礼儀ではなくて！？」

「そうだ、そうだ！ クレア、もっと言ってやれーっ！」

ミュミュがヴァルドリユーズの盾になっているつもりなのか、彼の前から離れず
に、クレアにエールを送る。

「『親しき仲にも礼儀あり』と言うのでしょうか？ ましてや、初対面なら当然のことです！

いいですか？ そもそも、挨拶というものは、昔々」

クレアが語り始めたばかりであったが、

「ふえ〜ん、おにいさん、助けて〜」

ケインに、マリリンが泣きながら抱きつく。ケインがよく見ると、嘘泣きのようで

あつたが……。

「ちよつと、あんた、いちいち泣かないっ！」

マリスが、マリリンの首根っこを引つ掴んだ。

「うきやーっ！ スーちゃん、助けてー！」

マリリンが手足をバタバタさせて、余計に泣き声を立てた。

「乱暴はよしなさいよ！ 男女っ！」

「露出狂！」

事態は、また振り出しに戻っていた。

わけのわからない女どものケンカに、ケイン、クレアがうんざりしてきた時、

「あのさあ、お取り込み中、悪いんだけど……」

カイルが初めて口を開いた。

「きみたち、誰？」

「私は見ての通り、美人女剣士のスー」

長身の彼女は、手を腰に当て、長い黒髪を、色っぽい仕草でかきあげて言った。

「はあくい、美少女魔道士のマリリンでえ〜す」

金髪巻き毛少女は、手をグーにして、ブリブリ腰を振りながら、にっこり笑う。

「実はあ、マリリンたちい、町の人に頼まれてえ、魔物退治してるんです。

ただどあ、道に迷っちゃってえ、しょうがないから眠ってたんです。」

マリリンは、両手を組み合わせる。

道に迷うというと、ケインは、ある人物を思い出さずにはいられないのだが。

「ね、眠ってた！？ どう見ても、あれは、行き倒れだったぞ！？」

「驚いているケインに向かって、マリリンはきゅと笑った。

「よく言うわよ。あんたたち、寝ている間に、私に変なことしようとしたくせに！」

スーが、じろつとケインを睨む。

(だから、ぶたれたのか。ひどい誤解だ……)

ケインの左頬には、スーの手の跡が、まだうつすらと残っていた。「よく寝たからあ、何だかあ、体力も復活しちゃったみたいですよ。うふっ、ラッ

キー？」

マリリンが、小さい手でピースをしてみせる。

「どうでもいいけどね、あんた、そのたるい喋り方、なんとかかないの？」

マリリスに睨まれて、マリリンは、「きゅっ！」と、しゃがみこんで大袈裟に耳を

塞いだ。それには余計にマリリスが何か言いた気であったが。

「その、魔物退治を頼んだ人たちの町ってというのは？」

「トアフ・シティーよ」

ケインの質問には、スーが威圧的態度で答えた。

「結構大きい都市だよな。だけど、ここまで遠いんじゃないか？
ウマでも数日かか

るだろ？　なんで、こんなところまで？」

「トアフ・シティーでは、魔物を倒した者には、その魔物の死体と交換に賞金が配ら

れるのよ。もうあの周辺には魔物がいなくなったから、賞金稼ぎたちは、皆遠出をす
るようになったの」

「早い話があ、マリリンたちも賞金稼ぎなのでえ、魔物の出る噂の
ところを捜してい

るうちにい、こんな辺鄙へんびなところに来てちゃったんです」

ケインたちは、顔を見合わせた。

「おい、どう思う？ あいつら、魔物を倒せるほどの腕があるってことか？」

ケインは、隣にいたカイルに、小声で言った。

「さあな、魔物を斬るには、それ専用の剣がいるだろ？ っていうと、あのおねえ

ちゃんの持つてるロング・サーベルは、対魔物用ってことか」

「あつちのマリリンって子の方も、魔道士だって言ってたけど、あんなんで本当に

魔法が使えるのかな？」

「魔法に関しては、俺も全然わかんねえからな。ただ、俺が思うに、あんな風にひけ

らかしているのよりは、ほのかに漂う色気の方に、ずっと魅力を感じるってことだな」

ケインは、カイルを不審な目で見つめる。

「……おい、何の話だ？」

「だから、あの色っぽいけど高飛車なおねーちゃんよりは、もうちょよっと露出は抑え

ててもいいから、やさしくて、しとやかなオトナの女の方がいいってことだよ。あの

『コドモ』は問題外だな」

「誰が、お前の好みの話なんかしてるんだ？」

カイルは、目をパチクリさせた。

「俺は、自分のわかることだけ答えたんだよ」

(……こいつに聞いた俺がいけなかったらしい)

カイルとケインのやり取りには気付かないクレアは、笑顔になっていた。

「あなたたちの目的が、魔物退治ということなら、私たちと一緒にだわ！ お互いに

情報交換したり、協力して、頑張りましょうよ！」

「なんですって？ あなたたちも魔物退治をしてるっていうの？」

スーは、嫌そうな顔で、じろじろと一行を見回した。

「人数が多かったら、それだけ賞金の分け前が減るじゃないの。冗談じゃないわ！」

ぷいっと、スーは横を向いた。

「それなら安心して。私たちは、賞金のためにやってるのではないんだから」

クレアは、にこやかに答えた。

「じゃあ、何のためにやってるっていうのよ？」

訝し^{いぶか}そうに、スーがクレアを見る。

「もちろん、正義のためです！」

クレアは、きっぱりと言い切っていた。クレアのきらめく瞳を、スーとマリリン

は、怪訝そうな顔で見る。

「世の中、金を越えるものがあると思ってる？ 正義なんて金にもならないじゃ食えも

らないじゃない。そんなもののために魔物退治してるなんて、おかしいんじゃないの？」

スーの言葉に、クレアはショックを受け、その場に硬直して動かなくなった。

「そうだよ、世の中、お金よお！ お金を貯めて、素敵なおドレスやアクセサリーを

いっぱい買うの！ そうして、お金持ちの王子様に見初められて、マリリン、結婚

してお姫様になるのお〜！」

マリリンは、きやつきはしゃいでいた。

ケインもカイルも、青ざめた顔で、引いていた。

「……てことで、私たちは、あなたたちとは手を組まないわ。今回

は見逃してあげる

けど、今度会った時は、商売敵として容赦しないから、覚悟なさいよ」

スーは、威圧的に、一行を見下した。

「そお〜よお〜、マリリンたちい、すつごく強いんだからあ、あんまりナメないことね〜」

マリリンもブリブリしながら続く。

「覚悟するのは、そっちだわ」

腕組みをしたマリスは、いつもの不適な笑いを浮かべる。

「そうよ、正義をバカにするなんて、人として許せないわ！」
クレアも、キツと二人を睨む。

四人の女たちの間では、今や火花が飛び散っていた。

ミュミュも、ヴァルドリューズに、ぴとつと、くつつきながら、例の二人を睨んで

いるが、男達にとっては、実に、どうでもよかった。

「マリリンちゃん、引き上げるわよ」

「うん、スーちゃん」

マントを翻し、ひるがえふいっと、彼らとは反対方向に歩き出した二人であつた

が、すぐに戻ってくる。

「ウマー頭くらい、譲ってくれてもいいんじゃない？」

スーは、両手を腰に当て、威張って言った。

この荒れ地を歩いて行くこうなどは、自殺行為に等しいと言えた。自分たちの命に

かかわることでもあるというそんな時でも、やはりスーは高飛車なのだった。

またケンカにならないうちに、ケインは乗っていたウマを下りて、譲った。

「お礼は言わないわよ」

スーとマリリンは、さっさとウマに跨がると、土煙を上げて、ものすごい勢いで行ってしまった。

「まったく、なんて人たちなの？ あれが人にものを頼む時の態度かしら？ お礼も言わないし」

「そつだよ、ケインも、なんであんなヤツらに、すんなりウマを引き渡しちゃったのさ！？ あんなの、ほっとけばいいのにさー！」

クレアとミュミュは、目を吊り上げて、ぷりぷり怒る。

ケインは、カイルのウマに乗せてもらおうと向かうと、マリリスが言った。

「あたしがそつちに移るわ。男二人の体重は、ウマにはキツイわ。

ケインは、あたしのウマにクレアと乗ってあげて」

あれほどのケンカ（？）の後ではあったが、彼女は、もういつもの表情に戻っていた。

ウマの綱をケインに預け、カイルのウマに乗る。

ケインも、クレアの後ろに乗り、偵察の時に見つけた、草の生えた場所目指して進んだ。

口にこそ出さなかったが、出来れば、この先、あの妙な二人組とは、会わずに済ませたいものだ、誰もが思っていた。

「……なんているのよ」

カイルと同じウマの上で、マリリスが呆れた声を出した。

「だあって、マリリンの水晶も、こっちだって言ってるんだもん」
例の女剣士と少女魔道士が、一行とウマを並べていた。

ケインの譲った一頭に、マリリンと、その後ろにはスーが乗っている。

マリリンは、首から下げた、てのひらサイズの水晶球のネックレスを、自慢気に揺らせてみせた。

「そつちがマネしてるんじゃないの？」

長身の美人剣士が言う。

「じょーだんじゃないわよ！ あんたたち、淋しいんなら、素直にそう言ったら？」

「淋しいだなんて、見損なわないでちょうだい！ 私たちは、そんなことで、会いた

くもないあんたたちに、我慢してまでも、こうして追いかけてきたわけじゃないんだ

からね！」

スーが、つんけんしながら、マリスに言い返す。

「まっ、やっぱり、私たちの後をつけて来たんだわ！」

馬上で、ケインの前に乗っているクレアが、嫌そうな顔を向け、小声でケインに

言った。

「あんたたち、不思議な飴を持つてるでしょう？ ちょっとくらいくれたっていい

んじゃないくて？」

馬上で、スーが手に腰を当てた。

（ああ、おなか空いてたんだな……）

ケインは、目を丸くしていた。

「マリリンのクリスタルが言ってたよお。体力回復出来る飴なんだからってねえ？ どん

な味なのお？」

マリリンが人差し指を、物欲しそうにくわえている。

「……腹が減ったんなら、そう言いなさいよ……」

呆れて怒る気力もおこらなかつたマリスが、いくらかうなだれて言った。

「それよりも、きみたち、この先には、何があるか知らないか？
砂漠で魔物が出た

とか、そういう噂とか聞かないか？」

ケインが尋ねると、スーが手を腰に当て直し、踏ん返り返った。

「ほーっほほほ！ そんなこと、この私を知るわけないでしょう！

」

「えへっ、マリリン、知ってるよお。だけど、賞金取られちゃうから、教えてあげ

なあ〜い！」

マリリンは、にっこり笑った。

賞金目当てでないことは知らせてあるにもかかわらず、同業者でライバルだと思っ

ている一行に対して、すんなり情報を提供する彼女たちではなかつた。

「ほら」

諦めたように、飴玉を別の小袋にいくつか移し、マリスがそれを渡そうと手を伸ばす。

「ほーっほほほ！ 礼は言わないわよ！」

スーは、ひったくるようにして小袋を奪うと、二人の乗ったウマは、土煙を上げ

て、素早く遠ざかっていった。

「ああ〜ん、スーちゃんあ〜ん、マリリンにも早くちようだあ〜い！

」

「うるさいわね！ 今開けてるんでしょ！」

二人の会話は、微かに、それだけ、一行に聞き取れた。

ライバル！？(2) (後書き)

今後ちよこちよこ登場する二人組です。

刺客（1）

それから、しばらく進み、一行は休憩を取る。

周りは、相変わらずの荒野で、前方にはひどい砂埃が見える。

マリスが予告した通り、そのあたりから砂漠に入るようになる。

「やっぱり、砂漠を通らなくちゃいけないのかしら」

クレアが、不安そうな表情で、ケインに尋ねた。

「どうかな。ヴァル、次元の穴は、どの辺か、もうわかるか？」

ケインはウマから下りて、木陰で座っているヴァルを見るが、彼はピクリとも動かない。

「瞑想に入っているようだ。」

邪魔をしてはいけないと思ったミュミュが飛んできて、ケインの肩に止まり、一行を見回した。

「ミュミュも魔物のいるところくらい、わかるよ。今のところは何もないみたい。」

それに、妖精の力は、人間の魔力と違って減ることはないんだよ」

「だったら、ミュミュ、見てこいよ」

ケインが言うと、彼女は目を見開いた。

「やだっ！ 何かあっても、ヴァルのお兄ちゃんも瞑想中だし、誰もミュミュのこと

助けられないじゃないの！ だから、やだよー」

「……あ、そう……」

ケインは、仕方のなさそうに横目でミュミュを見る。

ふと、別の木陰では、カイルが地面に倒れ込んで、呻き声を上げていた。

「どうした、カイル？ へばったのか？」

ケインは、彼に近寄っていく。クレアも、後に続いた。

「……な……んな……おんな……」

彼の呻き声が聞き取れると、クリアは呆れた顔になって、戻って行った。

「……おい……」

ケインも呆れて、カイルの肩を揺さぶるが、俯せたまま、カイルがぶつぶつ言い出す。

「アストーレを出て、何日経ったっけ？」

「何日って……、まだ一週間くらいじゃないのか？」

「一週間!? まだそんなもんだったのか!? 俺はまた一ヶ月以上も経っちまった

かと思っただぜ」

「だって、何晩寝たか、思い出してみろよ。そんなに経ってないはずだろ？」

「そんなもん、思い出したくもねえよ! ごつごつした岩場か、マシなところで

さえ、草むらの上だ。

柔らかいベッドの代わりに、寝袋なんかでスマキになって……それに、もうずっと

女の子とデートしてない。喋ったり、お茶もすらも。こんなことはいくさ以来だ!」

ケインは、呆れてカイルを見下ろしていた。

「砂漠になんか行ったら、ますます女が遠のいていく。ああ! いったい、いつに

なったら、町やら村やらに着くんだ!？」

「あのなあ、俺たちは、次元の穴を探してるんだぞ。町や村を観光しに行ってるわけ

じゃないんだから」

ケインは、無理矢理カイルを抱き起こして、座らせた。

「お前もヴァルみたいに瞑想して、煩惱を追い払ったらどうだ？」

そうすれば、女が

いなくても、辛くないだろ？」

「冗談混じりにケインが言うが、彼の耳には全く入っていない様子だった。」

「ああ、スーちゃんみたいな刺激的なカツコ見せられると、余計にひと女恋しくなっちゃうよなー。一ヶ月も、この俺が女の子と遊んでないなんて

……！」

「だから、一週間だってば。お前、スーちゃんのこと、あんまりよく言っただけだった」

「じゃないか。露出は抑えてでも、しとやかで、ほのかに香る色気の方がいいって。」

「まーったく、言うことがコロコロ変わるんだから」

思わず呆れた言葉が、ケインの口について出ていた。

「お前さあ、スーちゃんと初めて会った時、なんでマリスがあんなに怒ったのか、

わかるか？」

「すわった目をしたまま、カイルが言った。」

「突然何を言い出すんだよ」

「アストーレで、マリスは、マリユス・ミラーって名乗って、少年騎士を装ってただ

ろ？ 自分から男装してだし、いろんなヤツに男扱いされても、ずっと平気だったの

に、なんでスーちゃんには珍しく感情をさらけ出して怒ってたのか」

「それは、スーちゃんが、あからさまに挑発したからじゃないのか？」

「カイルは首を振って、人差し指を立ててみせた。」

「俺が思うには、マリスは、自分の女としての自信があんまりないんだよ。だから、

スーちゃんとかマリリンみたいに『女らしい』やつらを見ると、羨ましくて嫉妬し

「ちやうんだろう」

「……ひどいこと言うな」

「あいつだって、スタイルはいいし、色気が全然ないわけじゃないんだけど、どうし

ても、女性的っていうよりは、中性的じゃん？ 年の割には大人びてるけど、スー

ちゃんの色気は、あれは年の功だ。いくらマリスが頑張っても、すぐに身に付くもん

じゃない。コンプレックスを刺激されたから、あんなに怒ってたんだよ」

カイルは、いつの間にか元気を取り戻していて、生き生きと喋っていた。

（なるほど、ヤツの原動力は、やはり『女』なのか。女の話をしてるだけで、こんなに元気が湧いてくるとは）

ケインは、妙なことに感心した。

「それで、お前、マリスとはどうなんだ？」

「は！？」

唐突なカイルの質問に、ケインは面食らった。

「トボケるなよ。アストーレでお姫さんと結婚しなかったのは、マリスに惚れてた

からだろう？ だから、一緒に旅することにしたんだろう？」

カイルは、ふざけてケインの首に巻き付き、締め上げた。

「ち、違っつてば！」

「ウソつけ！ でなきゃ、なんでアストーレを出て、その上、マリスにくっついて

回ってるんだよ。それって、好きだからだろ？ 白状しちやえよ！

「

カイルは、マリスの素性は知らない。ここで、ベアトリクス王女であることを打ち

明けるのは、彼女の意志ではないのは、ケインもわかっていた。

苦し紛れに、なんとか脱出を試みる。

「カイル、お前こそ、実はマリスが好きなんじゃないのか？ さつきからマリスの話

ばかりだし、俺に、こんなにしつこく彼女のこと聞くのが、その証拠じゃないか」

ぱっと、彼の手がケインから離れた。

「な……なんで、わかったんだ！？」

「なに！？ ホントだったのか！？」

カイルは、ぷつと吹き出し、腹を抱えて笑い出した。

「じょーだんだよ、じょーだん！ ああ、おかしー！ ケインで、からかうとおもしろーな！ また頼むわ！」

彼は、笑い過ぎて目尻に涙を浮かべながら、ケインの肩をぽんぽん叩いた。

ケインは、口をあんぐり開けたまま、怒る気力も湧かなかった。

「ヴァルが瞑想から戻る前に、あたしも身体を動かしておこうかしら」

マリスが腕を回しながら、ケインとカイルのところへやってきた。

「ケイン、特訓するから付き合って。あっちに木陰がちょこちよこあったの。そこで

どう？」

カイルにからかわれた後で、ケインはカイルの視線が気になった。

「わざわざ場所変えるなんて、アヤシいなあ〜。ホントに特訓かねえ」

案の定、カイルが口笛を吹いて冷やかす。

マリスは、焦るでも怒るでもなく、にっこり笑ってみせた。

「なんなら、ここでやってみせてもいいし、カイルも一緒に、ケインと二人がかりで

かかってきてくれてもいいわよ。その代わり、ここがどうなっても知らないし、ケインみたいに武遊^{ぶゆう}浮身^{うきみ}に着けてないと、怪我^{けが}しない保証は出来ないけど、それでもいいんなら」

カイルの表情が、冷やかし顔のまままで固まった。

「なんで、あたしが毎日特訓してるか、教えてあげましようか？

『獣神サンダ

ガー』を召喚するようになってから、やたら食欲が湧くし、一日一回は暴れないと

ストレス貯まるのよ。発散しないと、サンダガーのコントロールも、うまく行かない気がするから。

野盗でも魔物でもいればいいんだけど、ここのところ出くわさないし。ケインが

相手なら、あたしも手加減なしでいいから、一番助かるのよ。でも、カイルも協力

してくれるんなら嬉しいわ！是非、一緒にお相手願うわ！」

マリスが手を合わせて喜ぶと、みるみるカイルの顔が引き攣^こっていく。

「……頼んだぞ、ケイン。俺の分まで」

ぼんとケインの肩に手を置くと、カイルは、ヴァルドリユーズの隣に座り、脚を組んだ。

「ボクは、ここで、煩惱を追い払うため、瞑想してるので、邪魔しないです。どうぞ

他でやってください」

「だそうよ、ケイン。行きましょ」

啞然としているケインの腕を、マリスは引つ張っていった。

以来、カイルは、二人のことは冷やかさなくなった。

ケインの身体が、大きく宙を舞う！ 場所に着いた途端、マリスが一瞬のうちに彼を背負い投げたのだった。

大きく飛ばされたおかげで、咄嗟に体勢を整えて着地することが出来たケインで

あるが、それを待っていたのは、繰り出される突きであった。

それを受け、払いのけ、蹴りも躲かわしていく。

一頻りひとしき暴れたのち、マリスは、実に爽やかな笑顔になった。

「やっぱり、ケインだと安心して攻撃出来るから、助かつちゃうわ

！」

彼の方は、彼女の攻撃を、いくらかヒヤヒヤしながら受けていたのだったが、彼に

とつてもいい特訓であった、と自分に言い聞かせておくことにした。

それにしても、暴れた後で見せる、晴れ晴れとした笑顔を見ると、彼としても、

良い思いをした気分になれた反面、

(やっぱり、マリスって野蛮人だよな。……王女のくせに)

と、思わずにももられないのだった。

「あそこに行商人キャラバンがいるわ。行きましょう」

マリスの指さした方角、砂漠の手前に並ぶキャラバンの群れへと、ウマを進める。

砂漠を渡るには、ダグラという、ウマとは別の動物に乗り換える必要があった。

ウマでは、砂に足を取られてしまい、思う通りには進めず、ウマの疲労も大きい。

ダグラは、ウマと似た外見だが、ウマよりも、首が持ち上がった分、体高が大きい

く、尾はトリのようにふさふさと吹き出し、頭にもふさふさの毛が、トサカのように

立っていた。

足の指もトリののように、三つ、四つに別れ、砂をかき出せる水かきのような、厚みのある砂かきがついていた。

頭から長い白い布を被り、茶色の皮膚をした、西洋とは人種の違う行商人たちは、

ダグラに関しては、リブ金貨よりもウマと交換したがっていたので、一行の乗って来たウマの分しか手に入らなかった。

キャラバンの出店では、他に、水や食料、日除け用の布や雑貨などが、並んでい

る。
日除けの布と食料、大きめの革袋に入った水と、小分け用の水筒などを買い、道案

内人をひとり頼むと、マリスとカイル、クレアとケイン、ヴァルドリユーズで一頭ずつダグラに乗る。

進むごとに、地面は徐々に砂地に近くなっていった。

「お客さん、運が良かったアルよ！ この間まで振っていた大雨も、つい昨日止んだ

アルよ。砂漠、乾くの早いアルから、もう地面は砂に戻ってるアル！

二本のヘビのような、変わった形の口髭を生やした、背の低い、太った茶褐色の肌

の男は、頭から垂らした白い布を環で止め、膨らんだ白いパンツを履いていた。

東方の地域によくある格好であった。

「チヨウさんは、東方の出身か？」

案内人ガイドに、親し気な少年口調で、白い甲冑のマリスが尋ねた。

「おお、いかにもそうアルよ！ 坊ちゃん、なんでわかったアルか！？」

太ったガイドの男は、自分のダグラの上で、うれしそうに、ちょっとだけ跳ねた。

「その衣装は、東方特有のものだろう？ 出身は？」

「タイラ国アルよ。東洋の大国ラータン・マオの近くの国、そのコウガ・リヨン・シティーアルよ」

ラータン・マオとは、ヴァルドリューズが宮廷魔道士を勤めていた国である。

「ふん、東方の国の名前までは、よく知らないや」

ヴァルドリューズは訳ありでラータンを出て来ているのは、一行の皆知って

いた。マリスが、念のため、あえてとぼけたのは、皆にも通じている。

「お客さんたち、どこへ行くネ？」

チヨウは、人のいい笑顔で尋ねる。

「魔物を退治しにきたのさ。この辺で魔物が出たっていう噂を聞かなかったか？」

「お客さんたち、魔物を退治して回ってルか？ なんで、そんなことしてるアルか？」

チヨウが、眉間に皺を刻んでいる。

「賞金稼ぎだよ。オレたちは、魔物を倒して賞金を頂くために、諸国を旅して、こんなところにまで来ているのさ」

マリスは、にっこり笑い、スーたちの情報から、この辺りでは最も無難な賞金稼ぎを咄嗟に繕った。

「アイヤー！ 賞金稼ぎの人たちだったアルか！？ それで、魔物を探してたアル

か！？ ああ、納得いったアル！」

チヨウは、ぽんと手を打った。

「諸国を旅して来られたなら、ちょっと聞きたいアルが、……実は、これ、内緒アル

けど……」

チヨウは、何か重大な秘密を打ち明けるような、深刻な表情になった。

「キャラバンに通達されたアルよ。なんでも、ある国からの要請で、二人組の男女を

探しているらしいアルよ」

「へえ、なんなんだい？ それって」

カイルが相槌を打つ。

「その二人っていうのは、ひとりはまだ若い少女の兵士で、もうひとりも若い男の

魔道士だというアルよ」

一行の背筋に、緊張が走った。

「へえ、その二人は、魔物を倒してまわってるのかい？ てことは、

オレたちと同業

の奴等ってわけか」

カイルが、うんうん頷く。マリスに話を合わせていることがわかる。

「賞金稼ぎとは違うらしいアルよ。二人は、ある野望を達成しようとしているらしい

アル。なんだか、とても恐ろしい邪神を呼び出して操り、この世を征服しようとしているらしいアル！」

（『サンダガー』のことだろうか……？）

ケインは、ちらつとマリスの横顔を見る。

「ええっ！？ 邪神を呼び出して、世界征服だって！？」

カイルが驚き、ダグラから落ちそうになった。

その反応に、チヨウは、満足そうに話を続けた。

「その国の政府は、二人を生かして捕えるのだと、あらゆる国々にお触れを出した

そうアル。だけど、二人の足取りは、どういうわけか、ある小さな村で、ぱったりと

途切れてしまったようアルよ」

そこで、チヨウは、一行の顔を見回す。

「お客さんたち、そんな噂を聞いたことはないかね？」

「さあな。俺たち、魔物の情報なら気にしてたけど、そんな話は聞かなかつたし

な」。マリユス、お前どうだ？」

カイルが、マリユスに振った。打ち合わせなどはしていなかったが、咄嗟に少年騎士

の偽名を使う。

「さあ、……オレも聞かなかつたな」マリユスも、首を傾げてみせてから、答える。

「悪いな、おっちゃん。力になれなくて。それよりも、魔物はこの辺りには出ないの

か？ この砂漠を越えた辺りはどうだ？」

カイルが何気なく、ガイドに尋ねた。

「そうアルな、魔物というか、この辺りには、夜になると、砂漠で命を落として

いった者の死霊が出ると言われているアルよ。この先にオアシスあるが、そこで新し

いガイドさんいるアルから、その人に聞いてみるよろし」

チヨウはがっかりしたように、肩を落とした。

「あんたが、背格好もその少女兵に似とるアルが、聞いていた甲冑とは違うし、男で

は、全然違うアルな」

マリユスを見ながら、ぶつぶつと、チヨウが言う。

「オレもたまに、女に間違われるけどさ、これでも正真正銘の男なんだ。オレたちは、魔物退治の『白い騎士団』だ。ずっとこのメンバーで旅を続けてるけど、そんな

二人組は見たことなかったよ。悪いな、チョウさん」

マリスは、悪そうに笑いかけた。

「あのガイドの言うことは、おかしいわ」

辺りは、夜になりかけていた。

マリスとケインは、皆が休んでいるところから少し離れた場所で、特訓していた。

昼間の時とは違い、ケインもたまに攻撃する。その特訓の最中に、マリスが、彼にだけ聞こえるように、言っていた。

「あたしは、情報収集の時に、必ず、あたしとヴァルのことが噂になっていないかどうかも、確かめてきたわ」

彼女が祖国の追手を警戒していることは、聞かされている。

マリスの右拳がケインの頬を掠めたが、ケインもそれを避けながら、拳を繰り出す。

彼の蹴りを、軽く飛んで躲かわすと、彼女は再び口を開いた。

「邪神がどうのって言ってたけど、それが一番引つかかったわ。だって、あたし達

は、人前で『サンダガー』を呼び出したことは、ほとんどないのよ。

それに、『あの国』は、『サンダガー』どころか、あたしとヴァルが出会ったこと

すら、知るわけないんだから！」

シュツと向かって来たマリスの拳を、ケインが手の甲で受け止める。

「『あの人たち』は、あくまでも、あたしだけが目的のはず。二人を、雁首揃えて
生け捕れ、なんて言うはずないわ！ 各国に触れを出したとも言っ
てたけど、アト

レ・シティーでだって、そんな話耳にしなかったし。だから、あの
ガイドは、ウソの

情報を掴まされたか、もしくは……」

マリスは、最後まで言うことはできなかつた。
クレアとチヨウの悲鳴が、打ち切つたのだ！

刺客(1) (後書き)

今時いないアルアルキャラ……

刺客(2)

「ひえーっ！ 死霊アルよー！」

ガイドの男子ヨウが、頭を抱えて伏せている。

空には、無数の白いふわふわしたものが浮かんでいた。

よく見ると、それは、生気のない人間の顔であったり、ウマやダグラ、その他には、

大型動物から小動物まで、いろいろな姿形があった。

噂通り、砂漠で死んでいったものたちの死霊なのだろう。

ケインの手が、マスターソードに伸びるが、マリスもロングブレードに手をかけた

まま、まだ抜こうとはしない。

『彼ら』が襲ってくるような気配は、今のところなく、ふわふわと揺れながら、ただ空中を漂っているのであった。

「『この人たち』は、成仏できなかった人たちなんだわ！」

顔を伏せていたクレアは立ち上がり、空を見上げて、語りかけた。

「どうしたのです？ あなたたちは、何を訴えたいのです？ 良かったら、私に話してごらん下さい」

クレアが片方の手を差し延べて、霊たちに問いかける。

「……ええ、……ええ、……まあ！ そんなことが！」

ケインたちには、何が起きているのか、よくわからなかったが、

クレアは親身になって、頷いている。巫女だった経験を生かして、幽霊たちと交信を試みているらしかった。

「大昔、ここで起こった大洪水によって、亡くなったという方が大半だわ。後は、や

はり、砂漠の厳しさに付いていけずに……ああ！　なんて可哀相！

「
クレアは、両手で顔を覆い、泣き出した。カイルがその横に並び、肩を抱いたが、

それには気が付かないまま、スツと彼女は顔を上げた。

「わかりました。私に任せてください。白魔法の究極奥義で、あなた方を救って差し

上げるわ！」

祈るように両手を組み合わせ、目を閉じ、呪文を唱え始める。

途端に、白い幽霊たちは、ざわめき、一斉にクレアに襲いかかっていったのだっ

た！

「クレア！」

駆け出そうとするケインとマリスを、ヴァルドリューズが手で制止した。

「究極奥義の魔法の時は、呪文を唱えると同時に、術者は結界で守られる」

その言葉通り、クレアの周りには、薄く白い膜のようなものが出ていて、霊たち

は、それ以上、彼女に近寄ることは出来なかった。

が

「おーい！　俺はどうなるんだよー！」

クレアの隣にいたカイルが、魔法剣を抜いて、襲いかかる死霊たちを、ばさばさ切

り裂いていくが、霊たちは、切られても、切られても、すぐに切り口同士がくっつき、

復活していた。

カイルを援護しに、ケインとマリスが向かう。

マスターソードで死霊たちを切り裂くが、やはりすぐにつながってしまおう上に、ケ

インは、なんとなく、『キレが悪い』気がした。

いつもの魔物とは勝手が違うようで、剣の中のダーク・ドラゴンも食わないように

感じる。

「クレア、まだかよ!?」

カイルが振り返るが、まだ呪文は唱え終わらない。

「えーい、面倒だ! サイバー・ウェイブ!」

久々に、カイルが魔法剣の魔法を発した。

剣から吹き出す銀色の霊気が、死霊たちを両断する!

その霊気が通った後だけ、白い霊たちは、きれいに消えていた。

「そうか! カイルの技も『浄化』だから、死霊に効いたんだ!」

マスターソードで霊たちを切り裂きながら、ケインは言った。

「そっか! じゃあ、もういっちょいくぜ! サイバー・ウェイブ

!」

銀色のうねりは、ぎゅるぎゅると死霊たちを消していく。

それにまかせて、ケインとマリスは、離れて見ていた。

その時、クレアの瞳が、パチツと開いた。

「長らくさまよい、たゆたいしものたちよ。今こそ、永遠の安らぎに、その身を委ね

よ!」

彼女の大きく開かれた両手からは、白い炎が発射された!

ぐおおおおおおお!

ごわあああああああ!

勢いよく天に伸びていく白い炎に巻かれた霊たちは、恐ろしい、まるで断末魔の

叫び声のような音を発して、消滅していく。

「良かった! ちゃんと成仏していつてるわ!」

クレアは、涙にぬれた頬も乾き切らずに、微笑む。

「さあ、あなたたちも成仏よ！」
また別の方向に向かって両手を翳す。

ぐぎゃああああああおおおおお！

やはり、悲鳴のような、叫び声のような音が発せられている。

「はい、成仏！」

がああああああああ！

ごほおおおおおおお！

「ああ、皆さん、喜んでらっしゃる！ 良かった！」

クレアが、美しい笑顔で空を見上げる。

霊たちは苦しそうな声を上げ、『成仏』というより、『消滅』して
いってるように、

クレア以外には思えた。

死霊は、続々と消えていった。

カイルも、いつの間にか引き下がり、ケインたちと並び、ぼかんと口を開けて、

その様子に見入っている。

シャーツ！ と数匹の霊たちが、クレアの後ろに回った！

「はいはい、慌てないで。順番よ」

彼女の放った白い炎が、その霊たちを包み込む というより、
当てられた。

そして、やはり、『彼ら』は、悲惨な絶叫を残して消えてゆく。
今や、死霊たちは、残すところ、僅かになってしまった。

「アイヤー！ お嬢さん、巫女さんだったアルか！」

すべての霊がやらね もとい、成仏した後、案内人チヨウが、
ビツクリして目を

パチクリしていた。

「これで、砂漠に現れる死霊はいなくなりましたわ。これからは、皆さん、ご安心してここを通られると思います」

クレアが、にこやかに笑顔で言った。

「これなら、安心して眠れるアルな！ いやあ、良かったアル！」
チヨウは、何度もクレアに頭を下げた後、寝袋を取り出し、砂地に敷いて、さっそく中に包まった。

一行も、いつもの寝袋に、それぞれ入り込んだ。

「ケイン」

強くゆさぶられ、ケインがうつすら目を開くと、カイルであった。

「どうした？」

「シッ。妙な感じがする。ここから離れた方がいい……！」
押し殺した声でカイルが言い、魔法剣を見せた。

彼の魔法剣には、災いを予知する能力がある。その魔法剣の知らせによるものであった。

「みんなは？ マリスたちは……」

もそもそと、寝袋の中で、簡単に身支度をしながら、ケインが小声で聞く。

「ヴァルとミュミュはいない。あのガイドのおっちゃんもいなくなってる。俺は、

マリスとクレアを起こしてくる」

カイルは、すぐ後ろで寝ている二人の方へ行く。

ケインは身体を起こし、真っ暗な周りの様子に気を配る。
なんとなく、空気が生暖かいような、変な感じがした。

その時、闇の中には、いくつもの光るもの 目のようなものが

一斉に浮かび

上がったのだった。

「魔物だ！」

後ろにいるカイルたちに向かい、ケインが叫んだ。

飛んで来たカイル、クレア、マリスとケインは、背中合わせに固まった。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ！」

声のする方を見上げると、黒いフード付きマントを被った、茶褐色の肌の太った男

が、空から舞い降りてきた！

「……やっぱり、てめえだったか！」

カイルが舌打ちした。

下りて来たのは、案内人のチヨウだった！

「ワタシ、タイラ国の魔道士チヨウだったアルよ！」

チヨウは、ふわふわ飛びながら言った。

「ラータン・マオのあの魔道士、偵察に行ったネ。彼は手強い。ラータンでも有名な

宮廷魔道士だったアルよ。ワタシ、ベアトリクスから聞いた。お前の首、賞金かかっ

てる。だから、彼のいない間、お前、捕えて、ベアトリクスに引き渡すアルよ！」

ふおつふおつと、チヨウが笑う。

「ふん、バレてちゃあ、しょうがないわね。わざわざ下手な芝居なんか、するんじや

なかったわ」

マリスが、不適な笑いを向ける。

「できるもんなら、やってみなさい！」

マリスが、ずいっと進み出て、ロングブレードを引き抜いた。

チヨウは、空中から、一本の杖ロッドを取り出すと、それを彼らの方へ

傾けると

同時に、そこにいた光る眼のモンスターたちが、一斉に姿を現し、彼らに向かつて、飛びかかって来たのだった。

それらは、既に見慣れた獣人タイプのモンスターだ。

剣を持った三人は、ばさばさと切り裂いて行き、クレアも得意の炎の術を発射させ

ようと、両手を翳すが

ポッ

彼女のでのひらからは、小さな炎しか出ず、すぐに消えてしまった。

「ひゃひゃひゃひゃ！ そのお嬢ちゃんは、さっきの究極奥義で、魔力を使い果たし

てしまったアルよ！」

クレアは、はっとして魔道士を見上げた。

「もしかして、あの死霊は、あなたが集めてきたものでは……!!？」

「その通りアル！ 本当は、あのラータンの魔道士の魔力を削り取るうと思つたアル

が、巫女のお嬢ちゃんが一緒だったとは、ワタシも計算違いだったアルよ！

「だけど、こうやって、いかにも計算通りのように、コトが運んでいるアル！」

「良かったアルよ！」

チヨウは、手を叩いて、おどけてみせた。

「尊い霊たちを思いのままに操り、踏み躪にじるなんて、許せないわ！あなた、

覚悟なさい！」

クレアが怒りを露に、人差し指をチヨウに差し向けた。

「魔力のほとんどないあんたが、どうやってワタシと戦うね？ ひよひよひよひよ！」

チヨウが片手で腹を押さえて、笑う。

クレアは、実戦ではあまり抜いたことのない、マリスにもらった剣を、ゆっくりと鞘から引き抜き、構えた。

「ベアトリクスの名前が出たからには、あんたの好きにはさせないわ！」

マリスが、ダッシュし、チヨウに剣を振り下ろす。チヨウの杖が、それを受け止めた。

「ケイン、カイル！ クレアを援護して！」

マリスが剣を魔道士に打ち下ろし、振り返らずに叫ぶ。

ケインは、クレアの盾代わりにと、バスターブレードを地面に突き刺した。クレア

は、なんとか戦う。その両脇を、ケインとカイルで固め、モンスターたちに応戦していった。

「いい長剣ロングブレイドアルね。ラータンの魔道士が魔力を吹き込んだアルか？」

チヨウは、ひゃっひゃつと笑い声を上げる。

「ベアトリクスでは、今、血眼になってお前を探しているそうアルよ。他にも、お前

を捜しているものは多いと聞くアル。一体、何をしでかしたアルか？」

チヨウは、てのひらから電光を、マリスに向かい発射した！

それを、彼女のロングブレードが防ぐ。

チヨウの電光術は素早く、威力もあるようで、マリスの剣に弾き返された後も、

勢いよく飛び散って行ったのだった。

その様子からは、チヨウは、意外にも、腕が立つらしいことが伺える。

ふいに、マリスが、飛び退き、キツと睨んだ。

「あんだ、わざと、あたしの剣狙ってるでしょう？」

チヨウは笑った。

「ふおっふおっ、わかってしまったアルか！ だが、もう一息ネ！」

そう言って彼が放ったのは、両手で抱えるほどの大きな岩の塊だった。

はっと、マリスが剣で防御したが、剣に接触したところから緑色の電光が走り、

マリスの剣は軋みを立てて、割れたのだった！

その衝撃で、彼女の身体が吹き飛ぶ。

「マリス！」

ケインたちが、一斉に、マリスを振り返る。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ！」

ゆっくりと、太った魔道士の姿が、地面に降り立った。それを、片膝をついた

マリスが、睨みつけた。

「あんだ、『メテオ』の術を　！」

それは、彼らも今まで目にしたことのない技であった。

「いかにもアル。そこらへんの魔道士たちには、ちよっとできない技アルよ」

チヨウは得意そうに笑い、マリスに近付いていく。

「あれは、この地上の、どの石とも違う物質でできてる石アル。それを、別次元から

取り出したアル。多少の魔力は効かないアルよ！」

ケインは、ちらつと思った。

（別次元の石というと、……マスターソードの魔石と同じように、魔力を封じ込める

ような……？）

チヨウは、両手を上に向け、呪文を唱え始めた。

すると、先程の『メテオ』と同じような、だが透明の岩が現れたのだった。

「お嬢さんは、魔力が強過ぎるアルからな。この中に入れて運ぶアル。これなら、

あんたの発する魔力を辿って、あの魔道士がワタシ追ってくるの、ちよつと難しく

なるアルよ。さあ、くるアル！」

チヨウが、マリスの腕を掴む前に、ケインが駆け出していたが、それを待つまでも

なく、マリスがチヨウをぶん投げ、素早く馬乗りになった。

「このあたしを捕まえようなんて、百年早いだよ！」

マリスは、チヨウの腕を背中に回し、締め付け、後ろから首を脚で固めて、押さえ

つけていた。

「アイヤー！ 痛いアルよ！」

苦しそうに、チヨウは悲鳴を上げる。

駆け出したケインは、すべて転んでいた。それを、カイルが目を点にして見えた。

「よくも、あたしの大事な剣を折ってくれたわね！？ このちびブタ！ 覚悟しなさい！ 首をへし折ってやるから！」

（ひゃーっ！）ケイン、カイル、クレアが、心の悲鳴を上げた。

「痛い、痛い！ やめるアルよー！」チヨウが泣きそうな声を上げた。

「なによ、こんな岩！」

マリスは、宙に浮かんでいる透明の岩に、右拳をくらわせ、ぶち壊した。

岩は、ガラス玉のように、こなごなに砕け散ってしまった。

それを間近で見たチヨウは、驚きと恐怖の悲鳴を上げていた。

「どうやら、あたしの魔力は、あんな岩ごときじゃあ吸収出来ないみたいね。お生憎

(あいにく)さま！」

「アイヤーツ！」

マリスの高らかな笑い声に、チヨウは再び悲鳴を上げる。

「あんだ、ベアトリクスのなんなの？ タイラとあの国は国交なんてなかったはずよ。」

ああ、その前に、あそこの獣人モンスターたち、引っ込めてちょうだい！」

マリスに首と腕を押さえつけられ、苦しそうな呻き声を上げながら、チヨウは短い

呪文を唱える。すると、今までカイルたちが切っていた獣人モンスターたちは、忽然

(こつぜん)といなくなった。

「それでいいわ。さあ、吐いてもらうわよ。あんだが、なんでベアトリクスと関係

あんのか」

首を押さえつけていた脚を余計に絡み付けて、マリスは言った。

「アイヤツ、アイヤーツ！ ワタシ、ベアトリクスの宮廷魔道士のひとりとトモダチ

アルよー！」

チヨウは、ほとんど泣き叫んでいた。

「ベアトリクスは魔道士団と騎士団に分けて、本格的にお前を捜すことにしたアルよ！」

ワタシ、トモダチに頼まれただけアル！」

ぎりぎりともリスに腕を締め付けられ、なおも悲鳴を上げる。

「それだけじゃあ、納得のいかないことがあるのよ。あんだ、あたしとヴアルが、

邪神を呼び出してどうのこうのって、言ってたわね？ ベアトリク

スが、そんなこと

言うわけけないのは、わかってるんだからね！ あれは、どういこうとなのよ！」

「ひゃあつ！ 痛いアル！ あ、あれは、ある時、ワタシのトモダチに妙な触れ込み

があつたと聞いたアルよ！ お前が、あの魔道士と組んで、邪神を召喚してるって！

ワタシ、それをそのまま言っただけよ！ ほんとは、よく知らなかったアルよ！」

マリスの目が、ぎらつと光る。

「その、タレ込んだヤツって、誰？」

「知らないアル！ そこまでは、知らないアルよ！ ほんとアルよー！」

マリスが、チヨウを突き放して転がした。チヨウは、呻き声を上げながら、腕をさすり、上半身を起こした。

「情報を流したのは、多分、『蒼い大魔道士』の一派だわ。あたしを追っているベア

トリクスの魔道士団の中には、ヤツの息のかかった者も、紛れ込んでいるでしょうね」

マリスが、冷静な表情で呟く。

「『蒼い大魔道士』！ またあいつか！？」

マリスは、そう言ったケインに頷いてみせた。

「あいつは、ベアトリクスを付け狙っている。あの国に、協力するよう見せかけて、

いずれ自分のものにしてようと企んでるに違いないわ。なんとなく、以前、じいちゃん

から聞いた気がする」

「じゃあ、ベアトリクスの魔道士団で……結構、手強いんじゃない？ あそこは、

騎士たちだつて、凄腕が集まつてゐるって聞くし……」

ケインの言ったことに、クレアが心配そうに、両手を組み合わせる。カイルも、

いつになく真面目な顔になっている。

チヨウが、こそこそと逃げ出す体勢になっていたが、

「アイヤーツ！」

マリスが彼の胸ぐらを引つ掴んだ。

彼女の面は、いつもの自信に満ちた、あの不適な笑顔だつた！

「ベアトリクス of 騎士団に魔道士団 上等じゃないの！ あのク

ソ女王陛下に伝え

るがいいわ！ 『捕まえられるもんなら、捕まえてみる！』って。

あたしは、いつ

でも、受けて立つてやるってね！」

そう言つてチヨウを放り出すと、マリスは、両手を腰に当てて、高笑いした。

その様子は、出会つたばかりの女剣士スーというよりも、それこそマリスの操る

『獣神サンダガー』に、そっくりであつた。

「アホかーっ！ 宣戦布告してどうする！？ なんで、お前は、わざわざ自分から厄

介事を招き寄せるんだ！？」

喚いているケインに、彼女は、けろつとした視線を向ける。

「あら、敵が多ければ、それだけ暴れられるじゃない？ 敵なら手加減することもな

く、やつつけられるもの。それなら、あたしの暴りたい衝動も解決するし、ケインに

ばかり負担かけないで済むじゃない？」

「こ、この減らず口……！」と、呆れるケイン。

いつの間にか、魔道士チヨウが消えていたが、一行にはそれどころではなかつた。

「ヴァルドリユーズさん！」

そのクレアの声で、カイル、ケイン、マリスは振り向いた。

そこには、ミュミュを肩に乗せて、いつの間にか、ヴァルドリユーズが静かに立っていた。

皆を見回してから、ヴァルドリユーズが口を開く。

「次元の穴の場所は、だいたいわかった。そして、この砂漠を越えたところに、村があった」

「村だつて！？ やったー！ これで、やっと人間らしい生活ができるぜーっ！」

カイルが大喜びして、小躍りする。

辺りは、もう明け方に近く、薄明るい。

一行は、このまま出発することになった。

「お前、チヨウの正体に気付いてたんじゃないのか？」

ウマに乗る前に、ケインはヴァルドリユーズに、こっそり尋ねる。

「私が姿を消せば、奴は本性を現すと思っていた」

普段通りの、抑揚のない口調で、ヴァルドリユーズは答えた。

「俺たちが戦っていたのも、見てたのか？」

ヴァルドリユーズは、頷いた。

「マリスが危なくなったら、出ていこうと思っていた。私にも、彼女の『素の力』

『サンダガー』を召喚していない時の普段の力を知る必要

があるのだ。だが、

彼女は、以前よりも力を増しているような気がする」

「そうなのか……」

ケインは、少し考えてから、彼を見上げた。

「……あのさあ、マリス見てて、ちょっと気になったんだけど、…

…『サンダガー』

を召喚するようになってから、伝説のゴールド・メタル・ビースト
みたいに、食欲が

旺盛にはなるし、暴れてないと気が済まなくなっただって聞いたけど、
サンダガーは別

次元から呼び出して、彼女に乗り移らせてるだけなんだろう？ だっ
たら、普段の彼女

は、なんともないはずじゃないのかな？」

ヴァルドリユーズの瞳が僅かに光った。

確認するように、ケインは、もう一度、見つめ直した。

しばらくしてから、ヴァルドリユーズが、重々しく口を開く。

「お前もそう思ったか……。私も、以前から、そのことは、不審に
思っていたのだが、

『サンダガー』の召喚に関することを探ろつとすると、なぜか、魔
神『グルーヌ・

ルー』が拒んでしまうのだ。だが、いずれ調べてみるつもりだ。も
しかすると……。」

ヴァルドリユーズは、その続きを口にするのさえも、躊躇ためらってい
るようだ

った。

その代わりに、彼が口にした言葉は

「お前は、彼女の教育係に向いているのかも知れんな」

彼は珍しく、ちよつとだけ微笑むと、ケインの肩に、ぽんと手を
置いたのだった。

「これからも頼む」とでもいうように。

「……ヴァル、お前も、きつと、マリスには手を焼いてきたんだろ
うな。同情するよ」

ヴァルドリユーズに同情しながらも、なんだか、厄介事を押し付
けられたような気

もしたケインであった。

刺客(2) (後書き)

アルアルキャラ、忘れた頃にまた出て来るかも???

砂漠の生き物(1)

「なあ、今日で何日経つ？」

カイルが誰にともなく尋ねた。

ベアトリクスは追手のひとり、タイラ国の魔道士が消えてから、

三日が経つ。荒野

の次は砂漠かと、代わり映えのしない景色の中を進むのに、ほとほとうんざりしているのは、皆も同じだった。

「本当に、こつちでいいんだろうな？」

カイルは、今度はヴァルドリューズを振り返り、疑い深気な目を向ける。ヴァルド

リューズは、ダグラの上で、ゆっくり頷いた。

「けっ！ あの変な魔道士野郎のおかげで、とんだ道草食っちゃまったぜ！」

カイルはぶつぶつ言うが、例のガイドの振りをした魔道士チヨウは、実際は、半日

ほどしか同行しなかったので、遠回りさせられたとしても、その分は、もう取り返していた。

「大分、日が高くなってきたな」

「そうね」

真つ青な広がる空を、眩しそうに見上げて言ったケインに、マリスが相槌を打つ。

このところ、早朝のまだ薄暗いうちに出発するようになっていた。白い、大きな布を被り、金色の環で頭に固定したスタイルも、定着してきている。

ミュミュが、ぱたぱた飛んで、マリスに近寄るが、話しかけるでもなく、ただマリ

スの目につくところを、ずっとぐるぐる飛び回っている。

「ミュミュ、おなか空いたの？」

マリスが言うと、ミュミュは、さっとケインの影に隠れ、彼の肩越しから、そうつと顔を覗かせた。

「いいわ、ゴハンにしましょう」

マリスが合図し、ダグラから降りた一行は、敷物用の絨毯を敷き、その上に座る。

砂漠に入る前に購入した食料も、いよいよ底をついてきていた。

それは、一行の誰もが経験したのこのない気温であった。これから、真昼になれば、息も付けないほどの暑さにまで上昇する。衣服等は、脱ぎ捨てたくなるが、砂漠

での日を、長時間、直接肌に浴びれば、皮膚が焦げ、そこから病気が発生することもあるというので、日除けの布で全身を覆うようになるのだった。

「食い物らしいもんは、これで終わりか。あゝあ」

嘆きながら、カイルは、干した肉や果実を名残惜しそうに、いつまでもしゃぶっていった。

マリスも、ちょっと残念そうな顔をしている。

そこには、今まで進んで来た砂漠と違い、奇妙なものたちがいた。刺々しい葉を持つ、木全体が緑色そして、その先に毒々しい真っ赤な大輪の花をつ

けたものが、てんてんと砂地から突き出ている。町中で見かけるより大きめのムシが、花の前を通り過ぎようとすると、その赤い花卉がパクつき、瞬時に

くしゅつと窄つぼまった。

もごもごとまるで咀嚼そしゃくしているのようになり、しばらく動いていたかと思う

と、そのうち、ゆっくりと、また花卉がひらいていく。

ムシは、跡形もなくなっている。

(どうやら、食虫植物らしいな)

ケインが、ふと見ると、少し離れたところの岩の上を、指ほどの太さの、長いムシ

が、身体を縮めたり、伸ばしたりして、這って行くのが見えた。枯れた木のように茶

色く、ぼしょぼしょと毛を生やしている。

ミュミュが、ぱたぱたと、それに寄って行く。

「トーガだわ。ミュミュ、そいつに、あんまり近付かない方がいいわよ」

マリスが、首だけミュミュを振り返って、言った。

「放っておけば危害は加えないわ。敵だと思われると、攻撃されちゃうわよ」

マリスの声に、ミュミュがそこからパツと飛び退く。

「お前って、変なことに詳しいな」

マリスは、ケインを振り返り、微笑した。

「じいちゃんのところでも見たことがあるの。現地で実物を見たのは初めてよ」

大魔道士ゴルダヌスを、マリスはそう呼ぶ。魔道士連中を警戒するため、結界を

張っていないところでは、マリスもヴァルドリユーズも、その名をあまり口にしない。

ミュミュは好奇心に目を輝かせ、先程の食虫植物の葉のトゲのない部分を持つと、

ぶつと引っこ抜いた。

それを、そうつと運び、トーガというムシの上に、ぼたつと落としたのだった。

途端に、茶色く曲がった紐のようなそのムシは跳ね上がって、反
つくり返ると、身
体を覆っている毛を逆立てて、硬質化させ、落ちて来た葉に向かっ
て、それらを発射
させたのだった！

針のように鋭く尖った毛は、ぶずぶすと葉に刺さった。

その様子を見届けると、ミュミュは満足して、ヴァルドリューズ
のところへと戻っ

て行った。ムシが攻撃するところを、どうしても見たかったようだ。

「うわあつ！　なんだ、ありゃあ！？」

「きゃああー！」

カイルとクレアの叫び声だった。大きな、黒い半透明の物が、ぶ
よぶよによと、

ゆっくり地面を這っているのが、マリスとケインにも見えた。

「ああ、それはイグウィナだね。おとなしい生き物だから、大丈夫
よ」

マリスが立ち上がって近付き、両手で持ち上げるようにして抱え
てみせた。

丸いのか、四角いのか　イグウィナは、軟体動物で、マリスに
抱えられると、

ぐにゃぐにゃと、地面に伸びて、垂れた。黒くても、半透明の身体を
通して、向こう側

のマリスの脚が透けて見えている。

「きゃああー！　やめてー！」

クレアが、両手を顔に当て、悲鳴を上げた。

「大丈夫よ、何もしないから」

「いやあー！」

マリスがイグウィナを持って近付くと、クレアは一層怖がり、カ
イルの方へよろめ
いた。

カイルが目一杯優し気な表情で、両手を開き、彼女を受け入れる体勢になっていたのだが、クレアは、カイルを突き飛ばして、その場から逃げた。そこに、彼がいたことすら、気付いていなかった。

「こつちにもいたよー」
別のところから、ミュミュが小さめのイグウィナを抱えて、飛んでくる。

「きゃーっ！」
クレアはその場にへなへなと崩れて座り込み、顔を覆ってしまった。

「わーい！ おもしろーい！」
ミュミュは、マリスの持っていたイグウィナの上でぼんぼんバウンドし、大喜びだった。ミュミュの持って来た小さい方のイグウィナは、マリスがてのひらの上で、弾ませて遊んでいる。

ダグラに乗り、出発すると、透明の花弁のようなものが、ひらひらと飛んできていた。よく見ると、それは一定の形に留まらず、常に変形しながら、飛び続けていた！
イグウィナと同じく基本形はないようだ。

「これは？」
「ジェイド。夜になると、綺麗な翡翠色ひすいに光るの。害はないけど、触るとべ

タバタするから、気を付けた方がいいかも」
ケインにマリスが答える。

「ああくん！」
言われた側から、ミュミュが悲鳴を上げる。ミュミュは、顔にへ

ばりついたジェイドを取っ払おうと、必死にもがく。クレアも、彼女の美しい黒髪の上に引っ付かれ、やはり悲鳴を上げながら追い払っている。

ミュミュが、やっとのことで剥がしたジェイドを、丸めて放り投げた。それが、カイルとクレアの乗っているダグラの尾にペトツとくつつき、ダグラが驚き、勢いよく尾を振って暴れたため、クレアが悲鳴を上げてダグラの首に捕まり、危うくカイルが振り落とされそうになった。

ダグラたちにも、ジェイドは鬱陶うつとうしいらしく、なんとなく、しかもっ面をしてるように見える。「ジェイドは火を恐れるのよ。松明たいまつでも掲げてれば大丈夫」

「……早く言ってくれよ」と、マリスに言うカイル。さっそくクレアが炎の術を唱えた。てのひらほどの炎を、掬すくうように浮かび

上がらせた途端に、周りから、その透明な生き物は消え去った。ケインとマリス、ヴァルドリューズのダグラの周りにも、彼が小さな炎を飛ばし、それが飛びながらついてくるので、ジェイドは寄り付かなかった。まだ昼間ではあったが、火を焚いて砂漠を進むことになったのだ。

「今までは、こんな生き物には遭わなかったわ。それなのに、どうして急に現れるようになったのかしら？」

クレアが不安そうに呟く。「生き物があるってことは……そうか！」カイルの瞳が輝き出す。

「そう。大分、砂漠の内部に入って来たってことと、『水が近い』ってことよ」

マリスが皆を見回して、微笑みかけた。

「そうか、オアシスがあるのか！」

一行は、急に元気が漲みなぎってきた。

気の遠くなるような暑い日差しを受け、三日間歩み続けてきたが、とうとう目印で

あるオアシスが、もう目の前に迫っているのだ！ オアシスに付けば水を追加でき、

浴びることも出来るだろう。

「よし、みんな、後もうちょっとだ！ 頑張ろーぜー！」

カイルが、元気よく拳を掲げた。皆も、その気になり、笑顔になった。

「なあ、まだオアシスは見えて来ないのか？」

辺りは日が沈みかけ、夕方であった。カイルがうなだれてマリスに尋ねた。

「……そうねえ」

マリスも、珍しく自信がなさそうだ。

ミュミュが疲れて、だらだらと飛んできた。マリスの周りを、またうろろろし始める。

「どうしたの、ミュミュ？ おなか空いたの？」

そう言いながらマリスが休憩の合図を送り、一行はダグラの足を止める。大分、

日が陰っていて、敷物がなくても砂の上は、それほど熱くはなくなっていた。

だが、砂だらけになるのを避けるため、皆は敷物の上に座る。

仕入れた食料は、昼間のうちになくなっていたので、再びバヤジツドの飴の袋を、

マリスは取り出した。

「……………」

珍しく、マリスが固まっていた。

「どうした？」

ケインが、袋を覗き込もうとすると、マリスは茫然として呟いた。

「…………… 飴が溶けてる……………」

「へっ！？」

ヴァルドリューズ以外、彼らは皆一斉に皮の小袋の中を覗く。

飴は、袋の中で、どろどろの違う個体になっていた！

食料を購入してからは、一度も袋を開けなかったので、一体いつ溶けたのかはわからなかったが、尋常でない暑さの中では、当然であった。

「うわ〜ん！」

ミュミュは、火がついたように泣き出した！ それに触発されたように、カイルも

クレアも取り乱していた。

「食料もなく、どうやって、この先進んで行くんだよー！ ここに巣くってる変な物を食べて生き延びろっていうのか！？ そんなこと、このデリケー

トな俺に、できる

わけないだろー！」

カイルが頭を抱えて、誰にともなく叫ぶ。

「ああ！ 私たちは、こんなところで尽き果てなくちゃならないのかしら！ 何とい

う運命のいたずらかしら！ おお、神様！」

クレアも、膝を付き、祈るように、天に向かっている。マリスも、放心したように、

ぺたんと座り込んだ。

「そ、そうだ！ みんな、安心しろ！ なくなったら、いつでもくれるって、バヤジ

ツドさんが言ってたじゃないか！」

ケインが立ち上がって、バヤジッドと交信出来る木のペンダントをポケットから取り出した。

皆の顔は、一瞬で輝く。

ケインが、さっそくロケットを開けると、そこには、茶色い木の幹に、赤く光る

小さな二つの目の付いた、黒いフードを被った、見覚えのある懐かしい姿が描かれていた。

以前、開けた時と同じく、中の肖像画が、みるみるうちに、実写のバヤジッドへと移り変わっていった！

「皆さん、どうもこんにちは！ 結構、頻繁に開けて下さって、私は嬉しいですよ！」

彼の、何重にも一緒に喋っている、ヒト離れた声が、懐かしく響く。

「ああ、バヤジッド！ 助けてくれよお！」

カイルが泣きそうな、甘えた声を出した。

「はいはい、どうなさいました？」

ペンダントの中から、弾んだ声が返ってくる。

「あなたが作った、栄養分の詰まった飴ですけど、よかつたら、あれをまた頂けないでしょうか？」

ケインは、丁寧に切り出してみた。満腹感が得られないなどとはとても言っては
いられない。

「……ああ！ あの赤い飴のことですね！？ 気に入って頂けましたか！？ そうですか、そうですか！」

表情は読み取れないが、声の感じから、彼は、喜んでいるようだった。

「あの飴は、製造に、ちょっと時間がかかるんですが、たまたま余ってるのが倉庫にあると思うんですよ。それでもよろしいですか？」

ヴァルドリユーズ以外は一斉に身を乗り出してペンダントを見つめ、こくこく頷いた。

「わかりました。ちょっと探してみますね……」

肖像画を見ている限りでは、ジーツとしているだけにしか、皆には思えないのだが、それでも、どうやら、彼は、倉庫の中を探しているようだった。

「ああ……！」

突然、歓喜に近い声が、ペンダントから起こった。

「どうした！？ 見付かったか！？」

カイルが、ペンダントを持つケインの手に飛びつき、覗き込み、皆も、またしても身を乗り出す。

「いいえ、まだなんですけど、ちょっと思い出したことがあるんで、教えて差し上げ

ようかと。この間、紅通りのドウグにばったり遭っちゃったんですよ！ あのカエル

魔道士の！ ヤツは、私の後をずっとついてきて、それはもう、鬱陶しい

ったら、ありやあしなかったものですから、オオネズミを召喚してやりましたらね、

これが、喜んで追っかけていったんですよ！ ほほほほ！ ああ、おかしい！」

ケインたちは、へなへなと地面に崩れ落ち、ペンダントの中から聞こえる笑い声だ

けが、そのまま続いていた。

「……あのさあ、そんなことはいいから、……まだ飴は見付からないのか？」

力の入らない声で、ケインが尋ねると、

「ああ、ありました」呆気ないほどの平然とした声が、即座に返る。

「なにっ！？ 本当か！？」

皆、一斉に顔を見合わせた。

「二〇粒くらいあるようですが、いいですか？」

木の魔道士の声に、皆の瞳は期待に輝く。

「助かったぜ！ じゃあ、それをこっちに送ってくれないか？」

「よろしいですよ。皆さん、今どちらにいらっしゃるのですか？」

「アストーレから西方面にある砂漠なんだ」

ケインの言葉を聞いた彼の表情が、一瞬曇ったように映った。

「具体的な位置がわからないと、転送は難しいですねえ……伝書バトでもいいですか？」

「」

ハトというトリを召喚して、それに飴を届けさせようというのだった。

（おいおい、そんなんで大丈夫なのか？）

いやな予感が、ケインの脳裏をよぎる。

「……他に方法がないのなら、しょうがないけど……それだと、どれくらいで着くん
だ？」

ケインの質問で、彼は、斜め上を見る。首を捻っているつもりなのだろうが、首が

真っ直ぐなため、そのようになってしまふのだろう。

「そうですねえ……ここフェルディナンドから計算しますと……ざつと一週間くらい
ですかねえ……」

……パチッ

ケインの手は、ペンダントを閉じていた。

一行が、シーンと静まりかえっている中、

「あらら？ どうしました？ もしもしー？ もしもしー？ ……
変ですねえ。急に ……

通信が途絶えて……」

バヤジッドの声だけが、フェイドアウトしていったのだった。

「うわあああ〜ん！！」

ミュミュが、天を仰いで泣き叫ぶ。

それをきっかけに、カイルとクレアも再び取り乱す。

一行は、空腹と、心が折れて、この日はそれ以上進むことは出来
なかつた。

砂漠の生き物(2)

昼間は眠って体力を温存していた『白い騎士団』一行は、その日、よく眠ることが出来なかった。

暑い上に、遮るものの何もない地面で、寝袋に包まるのみである。そして、いくら頭からすっぽり包まろうと、風で砂が当たる音がうるさかったり、細かい

い砂の侵入もあり、そして、突風が吹いた時には転がることすらあった。

気温差の激しい砂漠では、同じ一日とは思えないほどである。

日中は気温も上昇し、日差しも強過ぎるため、夕方から夜のうちに移動することにした

のだが、夜は一変し、一段と冷える。

強風が収まってきた時は、夜中であったが、一行は、のろのろと進み出した。

辺りは、相変わらずの砂地であったにもかかわらず、砂に出来た模様が、今まで見た

ものとは違い、波打ったような、筋のような模様が刻まれていた。

「なんだか、きれいだな……」

ケインが思わずぼそっと呟く。

「さっきまで風が強かったからね。そういう時には、こういう模様が出来るみたい」

ダグラの上で、マリスが答えた。

「なあ、今日で何日経つ？」

夢うつつのカイルの呼びかけだった。彼は、このところ、そればかりであった。

食料が、まったく尽きてしまっただけから、丸二日が続いていた。

多めに買っておいたつもりの水も、残すところ、あと僅かだ。

ダグラの背でゆられているのでさえも辛くなり、彼らは、かろうじて、砂漠のような

過酷な環境でも生える、トゲのある、太い高い木々を見付け、背の低い草木を多少伐採

し、なんとかスペースを作ると、敷物も敷かず、砂の中に、どっぷりとつかって休む。

「……まさか、このまま行き倒れ、なんてことには……」

茫然と座り込んでいるクレアが、ぼうつと呟いた。

「『白い騎士団』結成後、生死にかかわる初の大ピンチだぜ」

倒れ込んでいるカイルも、ぼそぼそと、悲しそうな声を出す。

「眠ろう。眠って飢えを凌ぐんだ」

ケインも、うつろな目で、皆を見回す。

クレアの隣では、普段通りに見えるヴァルドリューズが、瞑想の時のように足を組んで

座っており、彼の掌の上では、ミュミュが、へたっていた。飛ぶ力

さえ、もう残っては

いないようだった。

ケインは、ふと隣で砂に埋もれているマリスに目をやった。空腹では、暴れることすら

出来ないらしく、さすがの彼女もおとなしい。

そのマリスが、突然、むっくりと身体を起こした。

すわった目のまま、遠くを見つめている。ケインが、同じ方向を、何気なく見てみる

と、砂の中で、何かが動いたのだった。

二人は、目を見張った。

砂の中のものは、その正体を露にした。

全長が、ヒトの子供くらいもある、黒やオレンジの混ざった皮の、オオトカゲであっ

た！

マリスは、それから目を離さずに、静かに、来ている白い鎧を脱ぎ始めた。俯せになっ

ていたカイルが、ピクツと起き上がるが、彼女の鎧の下から現れた少年の服装を認める

と、すぐにまた俯せた。

オオトカゲが、身体の両脇に生えた四本の足と、太い尾を使い、そこから遠ざかろうと

したその時、マリスが飛びかかった！

トカゲは驚き、急いで逃げ出す。マリスは、後を追いかけていった。動きの敏捷なトカ

ゲを捕まえるのに、甲冑のままでは重いため、脱いでいたのかと、ケインには今わかった。

他の皆は、そんな彼女の行動にまでは気が回らないらしく、そのままの体勢で過ごしていた。

しばらくすると、トカゲの尻尾を片手で掴んだマリスが、生気を取り戻した笑顔で、

砂だらけになつて、戻ってきた。

「みんなっ！ 食い物よ！」

「なっ！ なによ、それ！？」

何歩か引き下がったクレアの顔は、青ざめている。

「ガラガラオオトカゲよ。よく焼けば食べられるわ！」

マリスの瞳は、きらきらと輝いている。

「いやーっ！」

「ひえーっ！」

クレアとカイルがマリスから離れた時、

ボツ！

突然、ヴァルドリューズが、自分と皆との間に、火の術を放った。

何事かと、カイルと

クレアは、更に跳んで、その場から遠ざかった。

人の頭ほどもあるその炎は、地面に着くことなく、少し浮かんで燃えている。

「さすが！ 話が早いじゃない？」

マリスがヴァルドリューズに片目を瞑ってみせた。

彼の用意した火の上で、内蔵を抜き取ったトカゲの両端を、マリ
スとケインとで持ち、
ぐるぐる回しながら焼く。

火が通ったところで、ケインがバスターブレードでぶつ切りにし
ていく。

(うう、伝説の剣を、包丁代わりに使うことになるとは……！)

よく中まで焼けていることを確かめてから、マリスは大きな塊を
取り上げ、かぶりつい
た！

皆は、恐ろしいものでも見るように、目を見張る。

「なかなかいけるわ。みんなも食べたなら？ 魔物じゃないんだから、
大丈夫よ」

につこりと、マリスが言った。カイルもクレアも、まだ信じられ
ないようで、トカゲに
手を伸ばそうとはしない。

だが、生きるためには、このまま何も口にしないわけにもいかず、
このような得体の

知れないものでも、食べなくては そう思ったケインは、勇気を
出して、自分で切った
肉の塊に手を伸ばす。

「ここらへんが、おいしいんじゃないかしら」

マリスが、彼女の食べているのと近い部分の肉 トカゲの腹の
あたりを指差した。

おそるおそる手に取り、かじってみる。オレンジと黒の混ざった

模様は、もう跡形もなく黒く焦げていたが、細かいぶつぶつした皮膚の表面は、変わらずである。

気持ちの悪い食感を想像していたケインだったが、よく焼けていたため、皮の部分は

パリッとしていて香ばしく、意外にも、美味しく思えたのだった。

飢えていた彼は、肉の部分にも、がぶつと噛み付いた。

中身は柔らかく、味はなかったが、食べれたものであった。

ケインは、夢中で、がっがっ食べていた。

「ちよつと固めのトリ肉みたいでしょ？」

マリスが微笑んだ。

「確かに、そんな感じだな。味をつけてよく煮込めば、もっと美味しくなるような気がする」

頬張りながら、ケインもコメントする。

彼らのがっがっ食べている様を見て、少しは食べる気になったのか、クレアもカイル

も、おそろおそろ手を伸ばしていた。

一口かじれば、後は、二人とも口も利かずに一心不乱で食べていた。

マリスは、トカゲの頭までもたべようというのか、バスターブレードの先に刺して、

また焼き始めた。

(俺のバスターブレードが……)

一瞬手を止めたケインであったが、仕方ないと諦めたのか、食べ続けた。

ヴァルドリューズは膝の上で横たわっているミュミュに、食べ易く、トカゲの肉を細か

く裂いてから、彼女の口元へ運んでやっていた。その合間に、彼も、がつつくほどではな

かったが、少しずつ食べている。

ミュミュは、彼が差し出す肉の切れ端を、目を閉じたまま、小さな口をもごもごいわせて食べている。

何切れか食べると、弱っていたはずの彼女は、目をぱっちり開き、跳ね起きた。

彼の手から肉を受け取ると、両手で掴み、夢中で食べ始めた。「もっと、もっと！」

というように、食べては、すぐに両手を伸ばす。彼も、肉の塊を次々引き裂いていき、

ミュミュに渡していく。

雛ドリが親ドリから餌をもらっているように、彼らはまるで親子のような、微笑ましい

光景として、皆の目には映っていた。

「なあ、あの二人、仲良くないか？」

腹は満たされ、人のことにも気がいくようになったカイルが、ケインに囁く。

クレアも頷いている。

「俺たちの知らない間に、やつら、すっかり愛を芽生えさせちゃったらしいな」

顎に手を添えて、真面目くさった口調でカイルが呟くと、ケインの横で、クレアも真面目な表情で頷いている。

言われてみれば……と、ケインもヴァルドリューズたちに注目すると、ばくばくと肉を頬張っているミュミュを見つめているヴァルドリューズの瞳は、普段よりも優しくなっているようだ。

普段は冷たい雰囲気の彼が、そのような表情をするのは、珍しいことであった。

「ヴァルドリユーズさんは、本当はお優しい方なのよ。私に魔法を教えてくれる時も、

言葉は少ないけど、優しさは感じられるもの」

クレアは、師匠を尊敬の眼差しで見ている。

「へえー、あいつがねえ。実は、俺と同じくフェミニストだったのかあ」

そう言ったカイルには、クレアとケインの横目が集まる。

(お前はただの女好き)二人の目は、そう言わんばかりだ。

「それにしても、ミュミュとは意外なシュミだなー。あいつ、博愛主義だったのか？」

カイルは眉をへの字に曲げて、首を傾げた。

「いや、それとも……おい、マリス、ヴァルって、ロリコンだったのか？」

後ろにいるマリスに、カイルが問いかける。

僅かな時間の間に、ヴァルドリユーズはフェミニストから、ロリコンにされてしまった。

マリスは、バスターブレードの先に突き刺したトカゲの頭を持ち、カイルたちの輪の中に入る。

「なあ、あれ、どう思う？」

カイルが、ヴァルドリユーズたちを顎で指す。

二人の様子を、マリスは、トカゲの頭にかじりつきながら見る。

「お前、ヴァルと一年以上も一緒にいるんだろ？ あいつの女の好みって、ミュミュみた

いなヤツだったのか？」

カイルのセリフには、ケインもクレアも眉をひそめた。

「別に、女としてミュミュのこと見てるわけじゃないんじゃないか？ ミュミュは妖精

なんだし、人間のコードモみたいなのがあるから、微笑ましく思

「つてるだけじゃないかなあ」

ケインが口を挟むと、カイルは、ふんと、小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「まったく、ケインは、『そういうこと』には疎といからなー。マリスはどう思う？」

「なっ、なんだよ、悪かったな！俺は、お前みたいに色恋沙汰ばかり考えてないんだよ」

「……確かに、意外よね」

マリスが、もごもごと口を動かしながら、ヴァルドリューズたちから視線を反らさずに言った。

「だって、ヴァルは、もうちょっと……」

「もうちょっと……なんだ!？」

カイルと、クレアまでもが身を乗り出す。

「ど、どうしたの？みんな？」

マリスは面食らって、二人を交互に見ている。

「人間離れしてると思ったヴァルも、女には、まったく興味がな
いわけじゃなかったのか!？」

カイルの目は輝き始めた。

「ヴァルドリューズさんの好みって？」

この手の話には、普段はあまり興味を示さないクレアであったが、その二人の迫力に、

ケインは圧倒され、黙っていた。

「い、いえ……、本人から聞いたわけじゃないから、確かじゃないんだけど、……単に、

あたしのカンだけ……なんだけど……」

「けど……!？」

妙に歯切れの悪いマリスに、声をそろえて、二人は詰め寄る。

「……………だけど、……………ホントは、あーゆーのが好みだったのかも知れないわね」

マリスは、にっこり笑顔を取り繕った。

「お前、何ごまかしてんだよ。らしくねえなあ！ はっきり言えよ」
カイルがじれったそうに言う。

「それより、みんな、肉がまだ残ってるわよ。冷めちゃったから、もう一回、焼きましょ
うか？」

マリスが、へらへらと愛想笑いをして、後退りあとずさりしていく。

「こら、マリス！ 逃げるな！」

「そうよ！ 話は、まだ済んでいないのよ！」
バスターブレードを持ったまま、マリスは炎のところこそそくさと戻っていく。

その後を、二人が責め立てながら、追いかける。

ケインは、その場に残っていた。

カイルたちが、元気を取り戻した証拠でもあると思い、勝手にやらせておくことにしたのだった。

(……………そりゃあ、俺も、ヴァルに好みがあるんだとしたら、どんな女ひとなのか、全然興味がないわけじゃないけどさ……………)

ケインは、彼らにはあまり取り合わずに、微笑ましいヴァルドリユーズとミュミュに視線を戻す。

食べ終わったミュミュは、また元気一杯になって、ヴァルドリユーズとケインの間を、
何度も往復してみせたのだった。

残った肉はよく焼き、非常食用に取っておく。

ダグラに全員乗り、マリスの合図で、いよいよ、この先にあるというオアシス目指して、出発することになった。

「待て！……あれは、……ヒトじゃないか！？」
風に舞った砂煙の中に、何か人影のようなものを、ケインは見つけた。

よろめきながら近付いてきたその人は、ばたつとその場に倒れ込んでしまった。

「大丈夫か！？」

ケインがダグラから飛び降り、駆け寄った。

軽めの防具を身に着けた、ケインたちと同じ年頃の男だ。

おそらく、傭兵だろうと、ケインは思う。

眉毛の濃い、少し面長の顔に、短い逆立った黒髪、背はケインやカイルよりも低そうだ。

「どうした、ケイン？」

カイル、クレアもやってくる。

「おい、しっかりしろ」

軽く、男の頬を叩いて正気付けさせる。男は、うつすら目を開け、ケインに、呻くように呟いた。

「……く、食い物……」

マリスが、ダグラを連れてきたところで、男の顔を覗き込む。

「あつ、この人……」

「マリス、知り合いか！？」

「……っていうか、さっき、トカゲを追いかけてた時に……」

ケインが抱えている男は、完全に目を開き、マリスを見ると、目を血走らせ、口をぱくぱくさせた。

「……お、……お前……！ あの時の、小娘……！」

男は、掠れた声を絞り出した。

「とにかく、この方の体力を回復して差し上げなくては」

魔力の復活したクリアが、砂の上に座り、男に両手を翳した。男の顔色は、みるみる

よくなっていた。

「貴様　！」

元気になった男は、ケインから跳び退って、拳を構える。

「あの……、その節は、どうも」

マリスが、作り笑いをする。男は、そんな彼女を睨みつける。

二人の話から、先程のトカゲを彼も見つけて、取り合いになったというのがわかった。

きつと、マリスが力づくで奪ったのだろう、と皆は解釈する。

ケインは、呆れたように、横目でマリスを見る。マリスは、肩をすくめた。

「俺の見つけたトカゲはどこだ！」男は、警戒した目を向けている。

「悪いけど、もう食べちゃったわ」

「何だと……！？」

男は、茫然と、砂地に膝を付いた。

「非常食用のが、まだ残ってただろ？」

隣で囁くケインに、マリスは人差し指を口に持って行き、「シツ」とやる。

「その代わり、あなたの体力は、今、クリアが回復させてあげたわ。それも、『ただ』

で。よかったじゃない？」

マリスが男に、にっこり微笑んでみせた。

「ふざけるな！　そんなことで、この俺が貴様を許すと思うのか！
？」

男は一層マリスを睨みつける。

「なによー、だから、悪かったって言うてるじゃないのー」

マリスが、ケインの後ろに隠れた。

そこにいる全員の記事では、マリスが彼に謝った場面は、一度もなかったのだが。

「今さら、かわいこぶったって駄目だ！」

男は、拳をシュツと突き出した！

それをケインは片手で受け止めた。

「なんだ、お前、邪魔する気か！？」

男は、ギロツとケインのことも睨む。

「こいつが野蛮なのは、俺も知ってる。きっと、きみは、こいつにひどい目に合わされた

んだろうけど、トカゲを食べなくても、きみの体力は、もう復活したんだし、たかが小娘

のやったことだ。このへんで、すべて水に流してやってはどうだ？

「ケインがそう提案するが、男は、一層ぎらぎらと目を光らせていく。」

「その小娘は許しちやおけねえ！ この俺様を、女の身で、負かしたやがったんだ！」

彼は、もう片方の拳も繰り出す。ケインは、それも受け止めると、その腕を捻ねじつ

て下に向け、男を睨む。

「男のくせに、女に手を上げようつてのか！ マリスが非常識なのは認めるが、お前も

戦士の風上にもおけないヤツだな！」

「いてえっ！ 放せ！」

ケインの手を振り解こうと、もがく男を放してやる。

男は、片腕を押さえて、ケインから離れた。

「てめえ、……なんて名だ！」

「ケイン・ランドール」

憎々し気に、彼を見上げながら、男は地面に、ペツと唾を吐いた。

「俺は、『青い豹ジャガーの異名を持つ、ダイだ！ 覚えておくがいい！」

ダイは、彼らを一睨みすると、砂煙の中へと消えていった。

「マリス、ヤツに何をしたんだ？」

マリスは、後ろめたそうな上目遣いで、ケインを見上げた。

「別に……。トカゲを引つ張り合ってたなら、ちぎれそうになっちゃったから、あいつ

を……。ちよつと、跳んで蹴っただけよ」

「ほほう。あいつに、跳び蹴りをくらわせた……。と？」

「そしたら、しばらく動かなかつたから、トカゲを諦めたのかと思つて……」

「ほう、跳び蹴りして、ヤツを気絶させた……。と？」

（ちよつと目を離れたスキに、一体、何をやらかすんだ、こいつは……！）

ケインは、溜め息をついてから、口を開いた。

「またひとり、敵を作ったな……」

疲れたケインに、ちよつとだけ、さすがに悪そうに微笑んだマリスだった。

オアシス目指して、彼らは今日も行く……。

砂漠の生き物(2) (後書き)

ガラガラオオトカゲ、ワニ肉みたいなんでしょかね。
砂漠の生物、植物、次も出てきます。

「ト」の道

「……何か見えるわ！」

マリスが、前方を見据えた。

彼女の言う通り、地平線の彼方には、白い建物のようなものが、ずらっと横に並ん

でいるのがわかる。日は昇っており、暑さのため、景色は、ゆらゆらとぼやけていた。

「なんだ？ 町でもあるのか！？」

カイルが、ダグラから身を乗り出す。

『白い騎士団』一行は、その先にあるというオアシスを、単に次元の穴への目印と
いうことではなしに、捜していた。

日除けの白い布は砂色に染まり、マリスの甲冑の、金色の凹凸にも、砂が積もっている。

ヴァルドリューズの黒いマントも、砂で灰色になっており、ミュミュも、動物が全

身の毛を振るうようにして、時々身体を振って砂を払っていた。

厄介なことに、風が地面の砂を荒らして行くことは、しよっちゅうであつた。

砂が入らないように、常に目を細めているので、皆の人相も悪く
なっている。

そして、何よりも、水と食料が尽きてしまったのが、身体だけではなく、精神にも

ひどくダメージを与えているのだった。

トカゲの肉で飢えを凌いだのも、ほんの一時的なことに過ぎず、
新たな飢えと乾き

は、直ちにやってきていた。

そんな時であつた。地平線の彼方に浮かぶ町を発見したのは。

「なんだか、全然近付けないような……？」と、カイル。

近いと踏み、日中でも進み続けたが、見つけてからかなりの時間が経つにもかかわ

らず、一向に近付いているという気がしない。

「……もしかして……」

マリスが躊躇ためらいがちに言いかけるが、その続きをなかなか言おうとしない。

「もしかして……なんだ？」

同じダグラに跨がるケインが、後ろから催促してみるが。

「……あれが、噂に聞く　蜃気楼しんきろうってやつなんじゃ……」

蜃気楼　！？

一行のダグラの足は、一遍に止まる。

「……おい、ミュミュ、見て来いよ」

カイルが、後ろのヴァルドリューズを振り返り、その肩に止まっているミュミュに

向かって、目付きの悪い顔のまま言った。

「えーっ！……もう、しょうがないな」

ミュミュは、ぶつぶつ言いながら、その場から姿を消した。

「……『本物』を見たのは初めてだわ。ベアトリクスにも辺境があつて、ちよつとし

た砂丘なんかもあつただけど、ここまでの規模じゃなかつたし、そこまで深入りは

しなかつたから。……やっぱり自然界は、ナメらんないわね」

首だけ後ろに向けて、マリスが言った。

「……そうか、ベアトリクスに辺境が……だから、マリスは、砂漠の生き物に詳しくかつたのか」

「じいちゃんのところで見たものと辺境で見たものが、こんなところでも見られるとは思わなかったけどね」

「ミュミュが戻るまでの間は、たあいもない話でもしていないことには、精神を正常に保つことなど出来そうもなかった。」

すると、そこから、少し離れたところにある岩だと思っていたものが、のっそりと動き出した。

クレアが小さく悲鳴を上げる。

「ガンダルだ……！」と、ケイン。

「へえ、よく知ってるじゃない」マリスが感心した。

ケインが、その動物を知っていたのは、マスターソードを手に入れる時に、見た覚えがあつたからであつた。

ガンダルは、全身が鉱物のように固く、石や岩にそっくりで、砂や石などを食べる生き物だつた。

その横を、てのひらほどの大きさの灰色をした小動物??ネズミが、ちよろちよろつ

と通る。目を凝らすと、その後ろを、長い紐状の物がうねり、砂地に出来ていた波の模様と似た、うねった紐状の跡を残し、密かにおいかけているのわかる。

「砂へびだわ」

再び、マリスが言った。へびは、見た目も砂と同じ色をしていて見分けがつきに

くい。マリスの目が、きらっと光ったように、ケインには思えた。

「……おい、……まさか……？」

クレアが聞けば悲鳴を上げそうなことを思い付いたのではないか、

と心配した彼は、

口には出さずにマリスに確かめようとしたつもりであったが。

「ふっふっふっ、すぐには捕まえないわ。あのへびが、ネズミを食べて、太ったところを　！」

「いやーっ！」

マリスの呟きが聞こえたクレアは、ケインの予想通り、泣きそうな声を上げる。

「あのなあ、へびは歯がないんだぞ？　ネズミを食っても、丸ごと飲み込んでるだけ

なんだから、それを捕まえて食ったりしたら、俺たちも、中のネズミまで、そのまま食うことになるんだぞ」

へびも、前回のオオトカゲのように焼けば食べられそうなことは、皆にも見当は付

いたが、ネズミは、動物はおろか、ヒトの死体まで食べる動物だった。そんなものを

食べるのは、皆、さすがにごめんであった。

「あたしもネズミは初めてだわ。どんな味がするのかしら？」

だが、マリスの答えは、やはり『そんな』だった。

「いやよ！　今度こそ、絶対イヤッ！」

クレアが首を横に振る。カイルも、明らかに嫌そうな表情だ。

それに構わず、マリスはそろそろとダグラから降りていく。へびであれば、トカゲ

と違い、動きがおそいと踏んでか、甲冑は着たままだった。

ガンダルは、いつの間にか、じっと動かず、『岩』になってしま

い、その先をネズミが、ちよろちよると進んでいき、その後を一定の距離を置いてへびが追い、更に

マリスが追う……。

「この際だ。ネズミは、マリスに食ってもらおうとして、へびに、トカゲと同じ期待をしようぜ」

カイルがケイン、クレアに囁く。

そこで、へびがネズミに襲いかかった！ 頭をぐつと持ち上げたかと思うと、一気に

にネズミの首に食いついたのだった！

「チーッ！」

ネズミは一鳴きし、その場で飛び跳ねて抗った。へびも、地面に身体を打ち付けられる。二つの生き物は弾みながら、または、転がりながら、格闘していた。

それを、じつと見守り、タイミングを計っている『ヒト』がいる。

ズザザザザーッ！

突然、二匹の足元が崩れ出した。砂がみるみる沈んで行き、凹んでいく。

「食い物っ！」

二体の生き物目掛けて駆け出したマリスも、ズボツと砂に足を取られ、鎧を着た重

い身体は、砂にめり込んでいった！

「マリス！」

ケインが慌ててダグラを駆り立てた！

砂は、ますます深く沈み、底が無いかのようになり、どこまでも、さらさらと崩れてい

く。砂地に出来た突然の大きな『お椀』の底へと、ネズミに食いついたままのへびと、

その後ろのマリスとが、もがけばもがくほど砂に運ばれていった！

「掴まれ！」

辿り着いたケインが、ダグラの上から手を伸ばす。マリスマも砂まみれになりながら、手を上に伸ばす。その時だった！

ザバアアアアアア……！

砂の椀の底から黒い物が現れた！

体長がヒトひとり分はありそうな、緑色の大きな筒のような形のムシであった。

長い、折れ曲がった足が数本、身体の横から生えていて、先端はラッパ形の丸い輪

のように赤くなつた口が、パクパクと、開いたり閉じたりしている。緑色の蔓か触角のような長いものも数本、うねうねと、まるで手をこまねいているようだ。

それは、巨大な食虫植物ならぬ、食肉植物であった！

ごろごろと転がって行ったネズミとへびを、その口が、今か今かと待ち構えている。

「きゃあっ！」

マリスマが珍しく女の子のような悲鳴を上げて、それから顔を反らし、目をつぶった。

そのせいで、彼女がもがきながら夢中で掴んだのは、ケインの差し出した手ではなく、ダグラの足だった。

「ぐげるるるっ！」

バランスを崩し、悲鳴を上げるダグラごと、ケインは砂の椀に突っ込んだ！

砂からなんとか顔を出すと、目の前では、巨大な赤い口の輪の中へ、ネズミとへび

が転がり込んだところであった。

「うわああああ！」

「きゃああああ！」

巨大ムシの赤い輪は、真一文字に閉じると、首にあたる細くなっていた管の部分が

急激に膨らみ、吟味しているように、もこもこ動いている。そのうち、留まっていた

塊は、管の奥の筒のような身体の中へと送られていき、赤い口からは、ぷつと砂を吐き出した。

空になった口が、次なる獲物を求め、捕えようと、二人に向かい、大きく開かれた時

ぼほわあっ！

突然の風圧が、彼らを砂ごと巻き上げた。

マリスとケイン、ダグラは、一気に砂地獄から抜け、そこからは離れたところへ落下した。

ダグラは、恐怖心からか、狂ったように嘶いななき、今までにないスピードで

駆けていってしまった。

ケインが後を追おうか迷ったが、もし、本当に狂ってしまったのだとしたら、乗る

ことは無理なので、やめた。

「スナジゴクオオクイだ。気を付ける」

ヴァルドリユースがダグラに乗ったままの状態で、片手を降ろしたところだった。

二人を巻き上げた風を起こしたのは、彼であったのは一目瞭然だ。

「噂には聞いてたけど……なんて不気味な……！」
マリスが、ごほごほ噎せながら、起き上がる。

「何！？ お前も、知ってたんなら、気を付けるよ」
砂が目に入ったケインは、涙を流しながら言うが、それは、目が砂を追い出すため
だけではなかっただろう。

そして、偵察に行っていたミュミュが、いつの間にか、ヴァルド
リューズの肩に乗
っている。とうに戻っていたようだ。

「あれは、やつぱり『しんきろう』だったみたい。あっちの方角に
は、なんにもなか
ったよ」

そのミュミュのセリフは、一向にとつて、極めつけだった。

「……なあ、水と食い物がなくなってから、今日で何日経つ？」
繰り返されるカイルの質問には、誰も答えることが出来なくなっ
ていた。

へびを食べ損ねた上、ケインとマリスの乗っていたダグラには去
られ、ヴァルドリ
ユーズのダグラに、無理矢理三人乗って進む。

あれから、ガンダル以外の生き物たちに出会うことなく、相変わ
らず容赦なく照り
つける日差しの中で、彼らは、砂の中に埋もれていた。

砂は表面は熱く、直に触れれば火傷するが、深く掘ってみると、
多少温度は下がる。

ヴァルドリューズがてのひらから風を起こし、削ったところへ、
皆は俯せになり、
火照った身体を癒していた。

「……水……食い物はともかく、水だ……！」
その言葉は、カイルが呻く。

生き物さえいれば、焼いて食べられることは立証されたが、水だけは、どうしようもなかった。こうしている間にも、体中の水分が抜けていくのが感じられる。

もう水を口にしなくなってから大分経つというのに、汗だけは出ている。服の上からでも、じりじり照りつける日差しに、服を素通りして、まだ残っているのかと思われるほど、水滴が身体から逃げていく。

身体に必要な水分であり、このままでは脱水症状で本当に危険な状態になるであろうことは、皆、身体で感じていた。

例えば、今、生き物が現れ、焼くことが出来たととしても、口の中は粘膜のようなもので粘っているだけで、舌も喉もこう乾き切ってしまったら、食べ物飲み込むことさえ困難だっただろう。

一行、二度目の、生死をさまよう大ピンチであった。

「クレア、魔法で水は出せないのか？」

カイルが、力のない声で言った。

「出しても、本物の飲料水というわけではないから。水の特性を生かした、似たような物質の……」

咳くようなクレアの説明は、途中で終わってしまった。

そのまま、砂の中で時間は過ぎていく。

もはや、呼吸でさえも、苦しくなってきた時

ぱたぱたぱた……

ケインは、耳元で、何かが羽ばたくような音がしたのを感じた。

(とうとう、耳までイカレてきたか)

うつすら目を開けてみると、灰色のトリの雛が、すぐそこで飛んでいた。

ケインの目は、カツと見開かれた！

雛は、まだ未発達な、小さな翼で、懸命に飛んでいる。

ケインは、むくつと起き上がり、夢中で雛を掴んだ。

「ピーッ！」

雛が鳴き声を上げてもがくが、ケインの両手は、しっかりと握り締めている。

枯れていたと思っていた唾液が、舌に甦る。

(生でもいい！ 食ってやる！)

と、思ったその時

「たーっ！」

「のわあああつ！」

彼の右肩に、突然、何かが強くぶつかってきて、彼の身体は弾き飛ばされ、砂煙を上げ、転がった！

思わず、雛を手放す。

一体、何が起こったのかわからず、ケインは、衝撃を受けた肩を押さえながら、身

体を起こすと、雛を片手に勝ち誇ったように笑うマリスの姿が、ぼうつと見えた。

「……………うつ、マリス！ ……なんて卑怯な……………！」

どうやら、彼女に飛び蹴りされたらしいと、ケインは理解した。

「俺が見つけたんだぞ！」

よろよると立ち上がり、マリスを睨みつける。

「なによ！ あたしが見つけてきたトカゲを、あんただって食ったじゃないの！」

「いつの話してんだ！？ だったら、そいつをみんなで分けて食おう！ 独り占めな

んかすんなよ！」

ケインがそう言うと、いつの間にか、彼女の後ろにいたカイルが、引つたくるよう

にして、雛を奪う。

「やったあ！ 食いモンだぜーっ！」

カイルは、雛を掴んだまま小躍りしていた。

「こら、カイル！ 今、みんなで分けようって言ったとこなのに……！ 人の話聞

けー！」

「こんな小さいモン、山分けなんかしたら、腹の足しにもなんねえよ！ 俺は、お前

らと違って、か弱いんだから、お先に頂かせてもらっぜー！」

「あたしだって、もう限界なんだからー！」

マリスが、パシツと雛をはたき落とす。それを、ケインがタイミングよくキャッチした。

間髪入れずに、ひゅつとマリスの蹴りが飛んでくるが、彼は、とつさに腕で防御した。

「ちっちっ、同じ手は食わないぜー！」

マリスに向かい、人差し指を振っている間に、雛は、ピーピー鳴きながら、よろよると飛び立った。

はつと、ケインとマリスが振り向くと、カイルが両手で、バシツと挟んで捕まえた。

「ピーッ！」

「はっはっはーっ！ 俺のもんだぜー！」

野盗のごときカイルが、トリを持って、よろよると走り出すが

「返せー！」

「たーっ！」

「うわあーっ！」

ケイン、マリス、カイルは、必死に雛を奪おうと、取っ組み合っていた。

「みんな、いい加減にしてっ！」

クレアの声と同時に、三人の身体は、突風に見舞われ、吹き飛ばされた。その上、

砂や小石がバチバチと当たって痛い。

「目を覚ますのよ！ 『それ』は、ミュミュよ！」

三人は、クレアのセリフに、思わず目を思い切り見開き、彼女の目のひらにあるものを見直した。

「ひどいよ、みんな！ ミュミュのこと、食べようとしたなーっ！」

ピーピー言っていた灰色のトリの雛は、よく見ると、体中を砂だらけにして泣いているミュミュに、移り変わっていったのだった！

「ご、ごめん！ ミュミュだったのか！？ てつきり、トリの雛だと……」と、ケイン。

「そうそう。悪気はなかったんだよ」カイルも弁解する。

「ごめん。あたしも、てつきり、モグモグだと……」

「……おい、なんだそりゃ？」マリスに向かい、ケイン、カイルが眉をひそめる。

「うわーん！ ひどーい！」

ミュミュが飛び回りながら、泣き叫んだ。

「俺としたことが……！ 飢えのあまり、幻覚症状まで……！」

ケインは、がっくり肩を落とし、溜め息をついた。

「我ながら、シヨックだ。自分に、あんなあさましいところがあったなんて……！」

「やれやれ、こういう時に、人間の本性って、出るモンなんだよな

あ。あはははは！」

落ち込むケインと対照的に、カイルが明るく笑っている。

「あたしじゃないの。サンダガーが欲しがってたのよ」

「都合のいいこと言うな！」

マリスの言い訳に、即座にケイン、カイルが言い返すと、クレアが両手を組み合わせ、

天を仰いだ。

「ああ！ 人間で、なんてみにくい！」

「あんただって人間でしょ！」

「ひどいよー！ ひどいよー！」

飢えが最高値に達し、皆、神経が尖って、ぴりぴりしていた。ふと、ある考えが、ケインの頭をよぎった。

（腹も減り、体力、精神力ともに衰えているこんな中、もし敵にでも遭遇したら？

クレアやヴァルだって、ベストの状態からすれば、魔力は減っているはずだ。しかも、

マリスは、剣を持っていない……！ もしかして、俺たちは、最も危険な状態なんじゃ

……！？）

この世に二人としない『獣神サンダガー』を操ることのできる、

特異な少女戦士と、

上級魔道士、魔法剣の男、魔道士見習いの巫女、役に立つんだかなんだかよくわからない

妖精に加えて、伝説の剣を二つも持っているケイン 最強（？）のメンバー という

は、こんなところで、敵または自然の掟によって、息絶えてしまうのだろうか！？

ケインは、ヴァルドリューズに目をやる。

（もしかして、ヴァルが結界でも張ってくれてるんだろうか？ だけど、ずっとなん

て無理だろうし、よくはわからないけど、なんとなく、今は結果は張られていない気がする……)

周りは、まだ騒いでいる中、ケインはヴァルドリューズに歩み寄った。

「……今、敵に出てこられたら……絶対絶命かもな」

彼の無表情な碧眼が、ゆっくりとケインを見下ろす。

「今のところ、その気配はないが、用心に越したことはないだろう」ケインは、黙って彼の目を見つめた。

極限状態の中、それでも彼は、常に敵を意識していたのだった。

高い魔力を身につけるには、相当な精神力をも必要とする。

この砂漠では、どんなに鍛えられた精神の持ち主でさえ、正常に保つのは困難だっただろう。

いくらか魔力を消耗していたとしても、上級魔道士とは、皆がヴァルドリューズの

ように、こんな時でも冷静に物事が判断できるものなのだろうか。

だとすれば、ベアトリクスベアトリクスの魔道士団や、他の魔道士たちを敵に回すということは、

非常に恐ろしいこととなる。

ケインは、「できれば、ヴァルだけが特別であって欲しい」と願うのだった。

「……というのも、あまり断言できないのだが」

大分経ってから、ヴァルドリューズが付け加えた。

「どうということだ？」

ケインが聞き返すと、ヴァルドリューズは躊躇ためらいがちに口を開く。「マリスの甲冑は、彼女の発する魔力を、外に漏らさないよう細工してある。私の魔

力も、極力抑えているので、遠くの者たちには嗅ぎ付けるのは困難なはずだ。だが、

それに加えて、どうもこの砂漠は……『魔力を読み取るのが困難』なのだ」

それがどのような意味なのかは、ケインには憶測で感じ取るしかない。

「俺は、魔道には疎いから、よくわかんないんだけど、アストーレからフェルディナ

ンドへ行った時みたいに、高速で飛ぶか、空間を通って行くことは出来ないのか？」

「そのつもりであったが、様子を伺っているうちに、次元の穴の場所が、はつきりと

わからないこともあるが、時空を移動するよりも、足で進んで行った方が、まだ安全

だという気がして来たのだ。内部に入れば入るほど、そのようだ。バヤジッドのペン

ダントを開けてみる」

言われて、ケインは、ポケットから木のペンダントを取り出し、開ける。

彼の肖像画は、絵のままだ。時々、ぼやっと揺れるが、実写になるまではいかない。

顔を上げてヴァルドリューズを見ると、彼も頷いた。

「やはりな。通信が出来なくなっている。何か、魔力を妨げるものが、この砂漠にはあるのだ」

「魔力を妨げるなにか？ 次元の穴と関係あるのか？」

「それはわからない。が、今まで見て来たものより、規模の大きいものなのかも知れぬ」

それを、ケインは、サンダガーでなければ、倒せない魔物が潜んでいるということ、と受け取る。

「そのおかげで、敵の魔道士たちには、今のところ、遭わずに済むのだろうが、逆に、

こちらでも彼らを察知しにくいということだ。ただし、ミュミュの特殊能力は、あまり

関係ないらしいが」

「……ってことは、今のところ、一番頼りになるのは、あいつってことか。……非常〜

〜に、頼りないけど」

ケインが、力なく笑う。

「どんな敵が潜んでいようが、下手したら、俺たちの命は、ミュミ

ユ（あいつ）に握ら

れている。俺には、そっちの方が怖いな」

ヒトの道（後書き）

砂漠は圏外なんですね……（^^；

オアシス

「水の匂いがするよ」

羽を勢いよく羽ばたかせて、ミュミュが言う。

「今度こそ、本当なんだろうな？」

カイルが、ダグラの上で、疑わしい目を彼女に向けた。

「ウソじゃないもん！ さっき、ミュミュ、見て来たもん！」

ミュミュは、ぷーっと頬を膨らませた。

マリスが、はっとしたように前方を見据えた。

「……何か見えるわ！」

皆で目を凝らしてみると、地平線の彼方の、ゆらゆらと景色がぼやけている辺りに、

白い、建物のようなものが横に並んでいるのが見える。

「どうせまた屋気楼なんじゃないの？ 俺たち、あれに何回騙されてんだよ」

溜め息混じりに、カイルが言った。

「だから、オアシスだってばー！ さっきから、言ってるでしょー！」

ミュミュが、カイルの金髪の一束を引っ張りながら、わめいた。

「ああ、ああ、わかった、わかった」

なかなか信じようとしないうカイルは、いい加減な返事をした。

「オアシス……！！」

思わず、カイルが言葉を漏らす。

何もなかった砂山を下ったところに、小さな村が見え、その奥には、空と同じく、

青く澄んだ湖のようなものが広がっていたのだった。

泉の周辺や、離れたところにまで、濃い緑色の草が生えていた。まさに、命の泉

である。

「とうとう着いたのね……!!」
クレアが、目尻をそっと拭^{ぬぐ}う。

それが最終目的地ではなかったが、そのセリフはふさわしかった。
「ほーらね! ミュミュの言った通りだったでしょ?」

ミュミュは、得意気に手を腰に当ててみせた。

一斉にダグラをオアシス目掛けて走らせる。

湖の手前には、白い石でできた四角く低い建物やテントが並ぶ。

以前、目にした、

布を被^{キアラパン}つた行商人の姿だけでなく、旅人の姿も多い。

「水だー! 水だー!」

一行の中で、一番に泉に辿り着いたのは、カイルだった。今まで萎^{しお}れていた

わりに、どこにそんな元気があったのかと皆が思うくらい一目散に泉の中へ、ばしゃ

ばしゃ入って行くと、がばがば水を飲み始めたのだった。

続いてマリスとケインが水に飛び込んだ。

ひゃーっと冷たい感触を想像していた彼らであったが、予想に反して、温水であっ

た。炎天下では、当たり前かと思ひ直し、もっと深いところへ行けば冷たいであろう

とわかつていながらも、我慢し切れずに、ぬるい水を飲む。

遠目から見れば、青く見えた水も、実は濁っていて、とても綺麗とは言えなかった

が、この時ほど、彼らは、水がこんなにも美味しいと思ったことがなかった。空腹で

もあつたが、まずは、この水だけで充分だった。

一通り、全身を水に浸かり、満足いくほど温水を飲みまくと、後は、それぞれ好き勝手にする。

カイルはぶかぶか仰向けに浮かんでいて、気持ち良さそうであったし、マリスは甲
胃を脱いで、少年服のまま泳ぎ回っている。

いつの間にか泳いでいたミュミュは、カイルの腹の上に乗っかり、一休みする。

他の旅人たちも、大勢ではないが、一泳ぎしている人、服を洗っている人などもいた。

少し離れたところでは、ダグラを洗っている人もいた。

(……てことは、俺たちは、そんな水をがぶがぶと飲んでいたりってことが……!?)

と、ケインは思ったが、この暑さの中、あまり細かいことは考えるのはやめた。

岸边では、クレアは両手で水を掬って飲み、顔を洗ったらしく、水を滴らせていた。

ヴァルドリューズが水を飲むところをケインは見なかったが、彼もおそらく飲んだ

のだろう。今は、木陰で座っていた。

水を浴び、飲んで、ひとまず息を吹き返した一行は、さっそく食堂を探し、駆け込んでいった。

ガツガツガツガツ……!

一行は、夢中で食べていた。

「お客さん、よっぽど飢えてたか？ そんなに慌ててかつこんでると、喉に詰まる。」

お茶飲みながら食べるよろし

「お茶あ？ お茶なんかより、水持って来いよ！」

彼らの^{がき}餓鬼のような食いつぶりに呆れながらも、心配している現

地人の店員

に向かつて、そちらを見もせず、食べながら、カイルが命令する。皆、一心不乱で食べている。聞こえてくるのは、フォークが器に接触する音と、食べ物飲み込む音くらいであった。

何かの肉を煮込んだものと、カリカリに焼いたもの、野菜のぶつ切りと、動物の骨の入ったスープ、固いパンのようなもの、木の実　などを、次々と胃袋に詰め込んでいく。

味は、彼らにはいまいち馴染みのないものばかりだったが、飢えていたせい、非常に美味しく感じられたのだった。

「おう、あんちゃん、どんどん頼むわ！」

カイルがスープを飛び散らせながら飲み、通りすがりの店員に催促する。

店員は、「まだ食うか!?」と言わんばかりに目を見開いていたが、一行は構うことなく、ただただ目の前に並んだものをかつ込んでいくのみであった。

ヴァルドリユースも、普段よりも速いペースで食べていた。ミュウも、普段のようえにこの選り好みしている暇はないようで、彼らの中で、一番、食の速度の

遅いクレアの皿から、パクパク食べていた。

一行が、デザートに大きな木の実を割り、なかなか、あっさりとした果汁と一緒に、果実をスプーンで削り取って、食べているところだった。

「なんだ、この店は。ほとんど品切れじゃないか。それなら一体何ならあるというんだ?」

傭兵の成りをした黒い短髪の若い男が、眉間に皺を寄せている。

同じテーブルに

は、連れである、金髪で色白の、同じく若い傭兵もいる。

その二人に向かって、店員がペコペコと頭を下げていた。

「今は、木の実と果実だけで……。さっきまでは、まだたくさん残っていたんですが

ね……」

白い長い布に身を包んだ、色黒で痩せた店員が、ちらつと、『白い騎士団』のいる

テーブルを見た。

「またお前たちか」

文句を言っていた黒髪の傭兵が、眉間に皺を寄せたまま、一行のテーブルに近付いた。

皆は、その男の顔には、見覚えがあった。

「きみは、確か??」

「誰よ、あんた」

ケインが思い出しかけた時に、マリスが、スプーンで果実を口に運びながら、遮った。

「忘れたとは言わせないぞ！ 貴様ら、トカゲどころか、他の食い物まで、俺たちから取り上げる気か!?」

男は、まだ若いはずであるのに、額には、皺が刻まれていた。

「……ああ！ 思い出したわ！ あのガラガラオトカゲを奪い合った、確か……」

マリスは、ぽんと手を打っておきながら、その続きがなかなか出て来ない。

「だからさ、あいつだよ。えっと……あれ？ 何てだったっけ？」

ケインも、名前までは思い出せないようだ。

「『青い豹ジャガーのダイ』だ！」「イライラしながら、彼は名乗った。

「あら、そんな名前だったかしら？」「マリスが首を傾げる。

「本人がそうだと言っているのだ！」

「そう？ その、ジャガーのダイさんが、あたしたちに、何の用なのかしら？」

けるっとしてマリスが問うと、ダイが拳をわなわな震わせた。

「とぼけるな！ 俺たちの食事を、一度ならず、二度までも邪魔しやがって！ 今度

という今度は、絶対に　！」

「あら、そう言えば、お連れの方がいらしたのね」

ダイの後ろに立っている、金髪の背の高い青年に、マリスが気付く。

「人の話の腰を折るなー！」

ダイは、こめかみに青筋を立てて叫んだ。

「初めまして。僕、クリスと言います。先日は、ダイが大変お世話になったそうで」

クリスと名乗ったハンサムな青年は、一行に対し、にこにこ人の好い笑みを送り、

馬鹿丁寧にお辞儀をした。悪気はなくとも、男たちにとっては、鼻につく行為だった。

「バカ野郎！ お礼言っでどうする！？ こいつらは、俺がせつかく捕まえたトカゲ

を食っちまい、今だって、こいつらのせいで、俺たちの食事がなくなっちまったんだ

ろうが！」

「ええっ！？ そうだったの！？」

状況が、あまりわかってなさそうなクリスに、ダイがイライラしたまま、きつい

口調で言い放った。

「ちょっとタイミング悪かったみたいね。同情するわ」

「貴様に言われても、真実味がないわ！ 女のくせに乱暴だわ、よく食うわ

まったく、品性のかけらも感じられんな」

マリスをじろじろ睨みながら、ダイが憎々し気に言う。それは、なかなか当たっ

ていると、マリス以外は心の中で頷いたことだろう。

「でも、もう食べちゃったものはしょうがないし……よかつたら、夕飯奢るけ

ど、それで許してくれる？」

マリスは、両手を合わせて、小首をかしげ、にっこり笑ってみせた。

「今さら、かわいごぶつてもだめだと言っただろう！ 金で解決しようというその

魂胆は、ますます気にいらん！」

余計に、彼は腹を立てた。

「だって、他にどうしろっていうのよ」マリスが肩をすくめた。

「食い物の恨みは拳でつける。貴様、正式に、俺と勝負しろ！」ピシッと、ダイがマリスに指先を向けた。

「ダイ、いくらなんでも、女性にそれは乱暴なんじゃないの？ そんな、食べ物のことくらいで」

横から、クリスが口を挟んだ。

「うるせー！ だいたい、貴様が大事な食料を、砂漠で落としたりするから、こんなことになるんだ！」

彼の怒りは、その連れにまで及んだ。

「まあ、食料を……」

クレアが、手を口に当てる。

そのクレアに向かって、クリスが、にっこり微笑んでみせた。

「そうなんですよ。僕たち、前のいくさの時から一緒に行動してる

んですが、負け
いくさだったんで、お金がもらえずで。賞金稼ぎの話聞いて、魔
物を捜して、こん
なところにまで来ちゃったんですけど、生憎、ガイドにお金を取ら
れて逃げられてし
まって、たまたま身に着けていた、なけなしのお金しか手元になく
て……しかも、布
袋に穴が開いていて、そこから、知らない間に食料がポロポロ落ち
てたみたいなん
すよ。ひどい話でしょう？」

クリスは、困ったように笑った。
(笑ってる場合なんだろうか？)

ケイン、カイル、クレアは、目を見開いて二人の傭兵を見ていた。
「人事じんじのように言うなー！ お前が、マヌケだから、俺がトカゲを
捕まえ

ることになり、それが、この小娘に蹴り倒されるハメになったんじ
やねーか！」

ダイは、額のおちこちに血管を浮き上がらせ、切れそうになっ
ている。

それとは対照的に、クリスの方は、にこやかに微笑んでいた。

「ああ、そうか。ダイは、このお嬢さんに負けたことが気に入らな
かったのか」

「うるせー！ 負けたわけじゃねえ！ あの時は、腹が減ってて、
普段の実力が出せ

なかったただけだ！」

ダイは、またじろつとマリスを見下ろした。

「というわけだ。わかったか、貴様！ 表へ出て、俺と勝負しろ！
」

「いやよ」

あっさりとマリスが拒絶したので、ダイは拍子抜けした。

それは、ケインたちにとっても、意外であった。今まで空腹で暴れられなかった分、

これをいいことに一暴れするものと思っていたのだが。

「今日は、遊ぶって決めたのよ。今まで死の瀬戸際を歩んできたのよ。やっとおアシ

スに辿り着けたんですもの。久しぶりに、のんびりしたいわ」

マリスが両手を伸ばして、伸びをしなから言った。

「だったら、貴様、勝負しろ！」

「は!？」

ダイの指先は、ケインに移動していた。

「なんで俺が？」

「貴様に掴まれたところが、しばらく痣あざになっていた。かなりの武道の使い手

と見込んで、言ってるやつっているのだ。有り難く思え！」

「はあ……それは、どうも」

ケインは、面食らったまま続ける。

「でも、生憎だけど、俺もパスするよ。理由は、彼女と同じだ。今日くらいは、ゆっくりしたいからな」

ケインも、わくわくを隠せない様子であった。

「ふん、怖じ気付いたか」

ダイは、その後もしつこくマリスとケインを挑発していたが、二人とも、それどころ

ではなく、オアシスで遊ぶことで、頭がいつぱいであった。

「ねえ、ダイ、そんなことよりもさあ、僕、おなか減っちゃったよ。別の店に行かない？」

「クリスの一言で、いざこざは、収まったのだった。」

食後、一行は、また大きな湖に戻り、乗っていたダグラを洗って

いた。

ダグラを水の中へ連れていくと、脚を折り畳み、水の中に座る。借りた手桶で、カイルが背中に水をかけてやり、ケインが、布で毛並みに沿って

こすり洗いをする。ダグラは、気持ち良さそうに、目を閉じた。

もう一頭の方は、マリス、クレア、ヴァルドリューズが手入れをしている。

クレアが水をかけてやり、マリスが、布でダグラの身体を拭いてやっているのだが、

力が入り過ぎて痛いのか、ダグラが嫌がって鳴いている。ヴァルドリューズが代わりと、気持ちよさそうに目をつぶったのだった。

その後、宿を取り、そこでダグラを預けると、彼らも水浴することにした。

宿屋の主人の話では、男女別に水浴場があるという。

着ていた服は、ボロボロとまではいかなくとも、砂だらけで、色褪せていて、

とどこどころ変色もしていたり、大分ほころびも目立っていた。

行商人キャラバンの屋根のない店が、ずらっと並んでいる中、男性、女性に別れ

た一行は、まずは着替えを買い、それから、水浴びをしようということになった。

「あんまり種類ねえなあ」

カイルが、眉をひそめる。

キャラバンと同じような、上から下までを白い布で覆い、腰にサッシュを巻いたも

のや、東方の民族らしい商人の話では、それこそ魔道士チヨウが履いていたような膨

らんで足首のところか、すばまっているパンツと、短いベストなどが主流だといひ、

ケインやカイルが着ているような傭兵用の服などは、あまり見当たらない。

皆、各国から出稼ぎに来ている商人たちの、それぞれ出身国の特徴がでていたが、当然のことながら、暑さに強い国のものが圧倒的に多かった。

「この先も砂漠が続くんだし、通気性のいい生地のものもいいかもなのな」

「そうだな」

ケインとカイルは、お互い頷き合い、ヴァルドリューズは、いつものように、特に反応はない。

動き易さも考慮すると、結局は、あまり柔らかくはないが通気性の良さそうな生地
で出来た、膨らんだ白いパンツとベストにターバンというスタイルに落ち着いた。

三着一遍に買うから安くしると、カイルが値切ったため、安く手に入ったので、カイルもケインも満足だった。

男三人は、さっそく購入した服を持って、水浴び場へ向かう。
その番人には、始めに見た大きな湖のようなところとは違い、岩場で固められた方へと案内される。

岩の壁は高く、外からは見えない造りになっていた。そのおかげで、その水は、冷たかった。

彼らは、貴重品や剣を、近くの岩の上に置き、早々に水に浸かった。

「はー、気持ちいいー！」

カイルが、ばしゃばしゃ水で顔を洗い始めた。

水場は、彼らが思ったよりも広い。

カイルとケインは、ヴァルドリューズに荷物を任せ、泳ぐことにした。

「向こう側まで競争だ！」

「よーし！」

他にもぼつりぼつりと人はいたが、スペースを探して、二人は、

わざわざ、^{ばしや}

ばしやと、^{みずしぶき}水飛沫を上げて、泳ぎまくった。

水浴び場では、中心へ行くほど深くなっていき、彼らでも足が届かないほどであった。

自然に湧き出ている泉のようで、水は澄んでいる。

あれほど容赦なく照りつけ、恨めしく思っていた太陽も、その泉の中からは、心地よく感じられた。

「ああ！ 生きててよかった！」

仰向けになって、ぷかぷか浮いているカイルは、しみじみ感動を噛み締めていた。

ケインも同じ気持ちだった。

死にかけてたこともあったが、ここへきて、一気に緊張の糸が切れたようであった。

水から上がると、彼らは、購入した服を手取る。

「どうやって着るんだ、これ？」

「さあ……？」

ケインもカイルも、このような民族衣装は着方がわからなかった。「もう五年くらいになるかな。俺に『武浮遊術』^{ぶゆうじゆつ}を教えてください、東方の女の子が、似たような服を着ていた気がするけど、服の着方なんかは教わらなかったし……」

ケインたちが、どうしたものかと手を付けられないでいる横では、

ヴァルドリュー

ズが、一番サイズの大きい服を手に取り、身に着け始めた。

「そっか、ヴァルは東方の出身だったもんな」

二人は、ヴァルドリューズに教わりながら、なんとか服を着る。

「お前の国でも、こういう服装だったのか？」

カイルが尋ねる。

「少し違うが、チヨウの出身であるタイラでは、砂漠もあるため、主にこのような服

装だった。国が近い故、私の国でも、このような服も出回ってはい
た」

腰にサツシュを巻きながら、ヴァルドリューズは淡々と答える。

「宮廷では、どんな服だったんだ？」

見よう見まねでサツシュを巻きながら、今度はケインが尋ねる。

「白い詰め襟の、裾の長い服だ」

やはり、淡々とした口調で、答えが返る。

二人は、普段の黒いマントに身を包んだ彼を見慣れてしまっていたが、ヴァルドリ

ューズは西洋系の整った顔ではあるものの、本来は東洋人であり、肌も浅黒いので、

今着ている白い色は映えていた。

その様子からは、彼の出身であるラータン・マオの宮廷魔道士の
衣装という白い詰

め襟服とは、黒いマント姿とは違う印象で、しかも似合っていただ
ろうと思わせる。

「俺たち、結構似合ってたない？」と、カイルが得意気に言った。

仕上げに白いターバンを巻いた彼らは、西洋の衣装を見慣れたカ
イル、ケインから

すると、まるで、謎の外国人三兄弟のように思えてしまい、爆笑し
ていた。

もちろん、ヴァルドリューズは、笑ってはいなかったが。

ヒトの道(2)

男性用の水浴び場で、疲れを取ったカイルとケインは、木陰で瞑想するヴァルドリ

ユーズとは別行動になり、キャラバンたちの露店を、プラプラと見物しながら、マリ

スとクレアを待つことにした。

女性用水浴場は、始めに見た大きな湖を挟んで向こう側である。

男性用同様、やは

り、背の高い岩場に覆われていて、浴場の中は見えない。

「しかし、こんなところじゃ、なかなか出会いはないだろうな」。別に、期待しちやいないけどな」

カイルが、露店で買った、果物の干したものをかじりながら笑う。彼が普段の元気を取り戻してきたのを嬉しく思ったケインも、くすつと笑った。

しばらくして、カイルの足がピタツと止まり、そのまま茫然と立ち尽くす。

「どうしたんだよ、カイル？」

怪訝そうに、ケインがカイルの顔を覗き込み、その視線を辿ってみると、二人の、まだ若い女性の後ろ姿があった。

ひとりには、長い艶やかでストレートな黒髪。肩を包む程度の膨らんだ短い袖、ハイ・ウエストを紐で結んでいる、淡いピンク色をした膝丈のワンピース姿だった。

東方の踊り子が着ると言われている服に、似ているとケインは思った。

もうひとりには、オレンジ色に輝く長いカールがかった髪で、赤い

民族衣装に身を包んでいた。

背中が広く開いていて、中で赤い布を巻き、その上から、赤い、透ける素材の服をまとい、腕のところは膨らんで、手首で締まっている。

腰にサツシユを巻き、同じ色の膨らんだパンツの足首のところは、キュツと窄まっ

ていて、隣のピンクの衣装に比べ、彼らの着ている服装と近かった。「後ろ姿を見る限りでは、お二人とも美人だよな。まさか、こんなところで、こんな

女の子たちがいようとは……！」

ウキウキしているカイルの横では、ケインも思わず頷いていた。

「そもそも、このオアシスに着いてから、食堂だろうとなんだらうと、女性客なんか

見かけたのは、初めてだな」

ケインがきよるきよるしながらそう言うと、いきなりカイルが走り出したので、

慌てて追いかけた。

「ねえねえ、彼女たち、どこから来たの？」

カイルは、赤い方の女の子に声をかけた直後、ピシッと強張り^{こわば}、動かなく

なった。

「すいません、こいつが何か変なことを……！」

カイルの首根っこを後ろから捕まえたケインが、ペコペコする。

「カイルにケインじゃない。何してるの？」

聞き覚えのある声に、ケインが顔を上げると、紫の瞳と目が合った。

「……マリス？ ……クレア？」

砂だらけだった時とは打って変わった美しい姿に、しばらく言葉が告げられず、

二人の男は、茫然としていた。

「あー、わかった。あなたたち、あたしたちだと思わなくて、ナンパしようとしたんでしょ？」

「マリスが、からかうように瞳をくるくる輝かせて、カイルをつんつん突いた。」

「まっ！ こんなところに来てまで……！ なんて人たちの！？」

「クレアが、横目でカイルとケインを交互に見る。」

「俺は違うよ！ こいつを止めてただけだよ。一緒にするなよ！」
固まったままのカイルの首を抱え、ケインは、自分名誉を守るのに必死だ。

「いやあ、あんまりかわいいから、思わず声をかけちゃったぜ。ホント、無意識のうちだったんだよ。かわいいってのは罪だよなー」

カイルが、にっこり笑って、クレアとマリスに愛想を振りまく。

（な、何言ってるんだ、こいつ？）

取り繕っているカイルを見て、ケインは横で、背中がかゆくなるような思いがし、

思わず彼から手を引いた。

「あら、かわいいだなんて……」

二人の少女たちは、まんざらでもなさそうに微笑む。

東方の文化も手伝って、二人は、どこか神秘的な、不思議な雰囲気であった。

「こんなに短い服、着たことないわ。……変じゃないかしら？」

つい先程まで、目を吊り上げていたクレアが、膝上のスカートの下を気にする。

「そんなことないっ！ よく似合うぜ！ 髪も、そうやって降ろしてるのも、かわいいっ！」

カイルが大袈裟に絶賛する。

ケインも同感であった。ただ、彼のように、ペラペラ言ってあげることが出来ない

でいた。それをもどかしくも思う。

「私には、こういう可愛らしいのは似合わないんだけど、やっぱり、クレアには似合

うわね。羨ましいわ」

マリスは、クレアを眩しそうに見ていた。

以前、カイルが指摘していたように、マリスは、中性的な雰囲気であることをうま

く利用する時もあれば、それを気に病むこともあるのかも知れないと、ケインはふと

思った。

「食料だ！ 食料をよこせ！」

「水もだ！ もっと持ってこい！」

一行が、夕飯でも食べようと、宿に戻る途中、十数人の男たちが、キャラバンを脅

し、露店の前に群がっているのが見える。

関係のない露店のキャラバンたちは、そそくさと荷造りを始めている。

その場から逃げて来た商人を捕まえて聞くところによると、彼らは砂漠を旅するう

ちに、資金が底をつき、ろくに金も払わず、水や食料を強奪しようとしているのだと

いう。

「だからって、野盗に変貌するとは……」

ケインは、彼らの前に進み出ようとすると、

「お待ちなさい！」

いつの間にか、赤いパンツスタイルと、ピンクのワンピース姿の

女たち　マリスと

クレアが、彼らの前に立ちはだかっていた。

「水や食料が貴重なものであるのは、皆にとっても同じこと。それを、お金も払わな

いで持ち去ろうとは、不屈き千万！　自分たちだけは特別だと思つ、その驕りおご

高ぶりを、今すぐ悔い改めなさい！」

クレアが、彼らに向かって、指を突きつけた。

「天に代わつて、成敗するわ！」

マリスも片方の手を腰に当て、もう片方は彼らに突きつけ、クレアとポーズを揃えた。

ケインたちの知らない間に、二人の息はピッタリであった。ケインとカイルは、

そのまま様子を見ることにした。

「なんでえ、てめえらは！？」

「小娘どもが！　おかしなこと言つてると、てめえらも、かつ攫さらつて、売り飛ばしてやるぞ！」

人相の悪い、茶褐色の皮膚をした男たちは、本物の野盗ではなさそうであるが、随分と乱暴な口をきいた。

だが、飢えが人をここまでにさせている、とばかりは言い切れなかつただろう。

ケインやカイルが思うに、彼らは、もしかすると、ヤミ商人か、もしくは、それらと取引をしている者たちかも知れなかつた。

「人を売るといふ行為は、それだけで犯罪です！　あなたたち、それ以上、罪を重ねていくつもりですか！？」

クレアが、大真面目に発言していた。

言っていることは間違っているとはいなくとも、彼女の言うことは、どこかズレていると、

ケインとカイルは思った。

「かつ攫^{さら}えるもんなら、かつ攫^{さら}ってごらん！」

マリスの先制攻撃だった。向かいの男に蹴りを喰らわせると、男は、どたつと倒れた。

クレアも、呪文を唱え始める。

「このアマ！ やつちまえ！」

野盗まがいの男たちは、一斉に、マリスとクレアに襲いかかっていった。

待つてました！ とばかりに、マリスが、男たちを次々と投げ飛ばしていく。剣は

なくとも、素手で充分であった。

「うぎやーっ！」

クレアに、手を伸ばした数人の者たちも、彼女の放つ風の魔法によって、露店と共に

に吹き飛ばされ、舞い上がった。

大勢を一遍にやつつけるという点では、効果的ではあったが、関係のない人々まで

巻き込んでいた。

実戦経験の少ないクレアには、まだ状況判断は難しいようだ。

数十人の賊たちは、二人の少女により、みるみる『人山』となつて、築かれていった。

た。

「これっぽっちじゃ、足りねえよ」

男たちの持ち合わせでは、せいぜい三人分の食料と、水を買うので精一杯のようだった。

「おなかが空いたら、祈りなさい」

クレアが、手を合わせた。

「祈って満腹になるか！」

「そうだ、そうだ！」

男たちは、跪いたまま、ぶーぶー文句を言う。

「だからって、人様から食べ物奪っていいの!？」

マリスが仁王立ちになり、腕を組んで、彼らを見下ろす。

(あのー、そんなこと、きみに言えた義理だろうか?)

ケインは、ちよつと思つた。

「金が足りないんだつたら、真面目に、ここで働いて稼いだらどう?
? それでこそ、

初めて人並みの食事が出来るつてもものよ。地道にやりなさいよ、地道に」

マリスが、手前にいる禿げ頭を、ポンポン叩いて言った。

「あなたたちの荒^{すさ}んだ心に、よく効くお話を差し上げますわ。

昔々、あるところに、有り難い老修道士様が……」

言いかけたクレアを、マリスが引つ張つて連れ去つた。

(一体、何を言おうとしていたんだろうか?)

ケイン、カイルは、目を点にしながら、見守っていた。

「おっちゃん、あと、そいつとそいつも！」

機嫌のいいカイルの声が響く。

一晩を、固い石のベッドで過ごし、完全復活した一行は、ダグを二頭と食料、

水を買ひ、準備万端で、オアシスを後にしようとしていた。

「それよりも、お客さんたち、この砂漠の中を、ガイドなしに行くつてのは、あまり

にも無謀なんじゃないのかい? いくら、そつちのお方が魔道士だと言つても」

商人たちが、皆心配そうに一行を見ていたが、構わず出発する。

いよいよ、次元の穴を捜す彼らとしては、どのような化け物が出るともわからなかったため、一般人を巻き込むことは出来なかったのだ。

ばたたたた……

オアシスを出発して間もなく、何か白いものが飛んできて、一行の頭上で旋回している。

「バヤジッドのハトだ」

そう言つて、ヴァルドリューズは、腕にハトを止まらせた。

ハトの足に括り付けられた小さな袋を開けてみせると、そこには、あの赤い

飴玉が入っていたのだつた。

「……いまさら……」

呟いたのは、ヴァルドリューズ以外、全員だ。

「また砂漠の熱で溶けちゃうんじゃないか？」

呆れたように、カイルが言つた。

「ま、そうならそうなら、仕方ないでしょう」

マリスは、それを、無造作に布袋の中にした。

やっとのことで、本来の目的である、魔物の通り道『次元の穴』を、目指せる『白

い騎士団』一行であつた。

クレアとマリスが同じダグラに、男性陣は、ひとりずつダグラに跨がり、再び砂漠へと向かう。

砂漠に潜むもの（1）

オアシスで水浴びをし、軽く（？）食事を摂った後、本来の目的である次元の穴のあるらしい砂漠に向かう『白い騎士団』一行である。

ぎらぎらと照りつける日差しは変わらずであったが、それまでの砂漠と違い、

オアシスから近いせいか、背の高い植物や岩などの日避けられるものがあり、

通行人にとっては非常に有り難い。

ある程度日が落ちるまで、一行は木陰で休憩することにした。

影になっているとはいえ、気温は高い。ごろごろと岩が転がっている岩は、冷たく

とまではいかないが、座ることは出来る。

岩の上に俯せていたカイルが、何やらごそごそとやり始めた。

そうして、白いベストのポケットから取り出したものをしゃぶる。

オアシスで見つ

けた干物や、果物の皮を乾燥させたものだ。

紙巻き煙草は、とうに尽きてしまったので、口が淋しくなると、

そのようなものを

かじるのだった。

「それ、なあに？」

ミュミュが目敏く見付けると、カイルにはたばたと寄っていた。

「シッ！ オアシスで、こっそり買ったんだよ。みんなには内

緒だぞ」

彼は、周りに気付かれないよう、そっとミュミュに、萎れた木の皮を手渡し

た。

両手でそれを受け取ったミュミュは、その茶色く干涸びたシワシ

ワの物を、じーっ

と見ていたかと思うと、思い切つて、カプツと噛み付いた。

「にがーい！」

「お子様には、わかんねえ味なんだよ。いらないんなら返せよ」

伸ばしてきたカイルの手の甲をペチツとはたいて、『皮』を口に
くわえたまま、

ミュミュはふーっと飛んで行き、内緒だと言われたばかりにも関わ
らず、ヴァルド

リューズにそれを見せていた。

「ねえ、ヴァル、次元の穴って、どの辺なの？」

赤い東方系の衣装の上から白い甲冑を着たマリスが、岩の上に腰
掛けたまま、

顔だけヴァルドリューズを向いた。

「この辺りにあったのだが おかしなことに、消えている」

「ええっ!?!」

何事かと、皆も一斉に二人に注目する。

「消えてるって……どうということよ!?!」

「先日見た時は、確かにこの辺りにあったのだが、……消えている
としか言いようが

ないのだ」

ヴァルドリューズの静かな碧眼は、暑さの中でさえ、涼しげに語
る。

「本当だよ。ミュミュも、この間は確かに見たけど、もうなくなっ
ちゃってるんだよ」

萎びた木の皮をしゃぶりながら、ミュミュがヴァルドリューズの
肩に止まる。

皆で、顔を見合わせる。

「なくなっただって 次元の穴って、移動したり、消えたりするも
のなのか？」

と、不思議そうなケイン。

「……なんとも言い切れないわね。今までは、そういうものではないと思っただけ
れど……」

マリスも首を傾げる。

「……ただ」

ヴァルドリューズは言いかけるが、すぐに口を噤んだ。

「ただ なに？」

マリスが、慎重な面持ちになる。

「……『魔』の気配はずつとしている。……用心に越したことはないだろう」

「『魔』の気配　！」

クレアが真剣な表情で耳を澄ませる。

「私には、よくわかりませんが……」

「見えるところではなく、『見えないところを探って視る』のだ」
無表情な碧眼がクレアを見下ろす。

彼女は、再び精神を集中させた。

「……今度は、感じるわ。どこかで……魔物というよりは、……なんていうのかしら、

うまく言えないけど……とにかく、異様な気配を感じるわ。近くなったり、遠くなっ

たり　どうということなのかしら？」

クレアは言葉を一旦区切ってから、さらに慎重な様子で続けた。

「『ここ』のようで、『ここ』ではないどこか　それに、この感じは、なんだか

」

言いかけて、突然ふらつと倒れかけたクレアの身体を、とっさにヴァルドリューズ
が受け止めた。

「無理をするな。まだ体力が完全に回復していないのだ」

「す、すみません……」

オアシスを出て以来、クレアの体調は良くない。顔色も悪かった。「一足先に、クレアを連れて、この先の村に行こうと思うのだが」

ヴァルドリューズが、クレアを抱きとめたまま、マリスに言った。

「その方がいいみたいね」

「そんな……！ 私だけ、そういうわけにはいかないわ！ それに、そんなことを

したら、ヴァルドリューズさんの魔力の消耗が激しくなるばかりです！」

「ミュミュに回復してもらうから、大丈夫だ」

「で、でも……！」

ヴァルドリューズがクレアを抱き上げると、皆の目の前から二人の姿は、ふっと消えた。

「……行っちゃったぜ？」

放心したように、カイルが、二人のいた場所を見る。

「ミュミュがクレアを回復してあげれば良かったんじゃないか？」

宙にふわふわ浮かんでいるミュミュに、ケインは言った。

「やったよ。魔力も体力も復活させたけど、クレアの調子はよくならなかつたんだよ」

「……大丈夫なのかな？」

「大丈夫だと思うわ」

ケインが呟いたのを受けて、マリスが答えた。

「多分、クレアの調子が悪いのは」

「ああ、そうか！ そういうことか！」

マリスが言いかけるのを、カイルが、ぼんと手を打って遮った。

「なに？ なんだって？」

カイルは、ケインに得意気な顔になってみせた。

「鈍いなあ、ケインは。『月の物』が来たんだよ。前に聞いたことがあるんだけど、

女の魔道士は、そういう時、魔力が一時的に弱まるらしいんだ。女
って大変だよな」

それを聞いて、ケインも、魔道士だった女の子から、そのような
話を聞いたことが
あつたよな気がした。

「なんだか大変なんだな、女の人って」

「そういう時に、普段以上のパワーを発揮する人も、稀まれにいるらし
いわよ」

「お前なんか、そうなんじゃないの？」カイルがマリスをからか
つた。

「そうかも知れないわね」マリスマも笑う。

「ほんとに大丈夫なのか？ クレア」

しばらくして戻ったクレアは、幾分顔色が良くなっていて、元氣
も少しは戻つたよ
うだった。

「村で薬を飲ませてもらったら、すぐによくなったわ。『砂漠病』
とって、貧血に

似たような症状で、砂漠ではよくかかる病気なんですって」

「……誰だよ、月の物なんて言ったのは？」

ケインが小声で言うが、カイルもマリスマも、素知らぬ顔をしてい
る。

「薬はしばらく必要なんだけど、魔物をバシバシやつつけるために、
早く治すよう

頑張るわ！」

ピンクのワンピースを着て、長い髪を下ろした彼女の、フェミニ
ンな出で立ちには
似つかわしくないセリフであつた。それが微笑ましく、皆は思わず
笑う。

「男ばっかの傭兵団と違って、女の子がいると、場が華やかになっ

ていいよな」

カイルが、にこにこして言う。

「あら、今までだって、一緒だったじゃない」

そう言ったマリスに、カイルが指を立て、「ちゅちゅ」と舌を鳴らしてみせた。

「甲冑着て少年騎士振る舞ったヤツと、かしこまった神官服の巫女さんよりも、東方

から来た謎めいた美少女戦士二人組の方が、神秘的でカッコいいじゃないか！ これ

で、やっと、このメンバーにも色気が加わったぜ！」

喜んでいるカイルを、クレアは複雑な表情で睨んでいたのだが、美少女と言われた

手前、怒るに怒れないでいた。

マリスの甲冑姿や、クレアの神官服も好感を持っていたケインも、今のマリスの

赤いパンツスタイル（上に甲冑を着てしまっただけ）や、クレアのピンクのワン

ピース姿は、確かに目の保養になると思った。

「それで、さっき言ってた『魔』の気配ってというのは、近くに魔物の存在があるって

ことなの？」

マリスが、ヴァルドリユーズに尋ねる。

「『魔』と言っても、魔物の発するものとは、また違うようにも取れる。だが、明らか

かに、『魔』の存在も感じられる」

いつもの無表情で、彼は返していた。

「どういう意味なのか、はっきり言ってくんない？」

ヴァルドリユーズを見るアメジストの瞳が、いくらか歪められた。

「悪いが、そのようにしか言いようがないのだ」

「じゃあ、魔物の気配と、それとは別の得体の知れない気配の二つが、感じ取れるってわけね？」

「大きく言えば、そういうことだ」

少しの間、マリスは腕を組んで考えていた。

「……今までになかったケースね。もしかしたら、……ちょっと厄介なことになるかも知れないわね……」

マリスとヴァルドリユーズ以外、様子のわからないケインたちは顔を見合わせていた。

皆、彼女の次の言葉を、聞き漏らすまいと待つ。

いつもの大胆不敵な笑みが、彼女の顔に浮かぶ。

「いるには、いるのだったら、誘き出してやりましようか。ヴァル、サンダ

ガー』よ」

「ええっ！？ こんなところで!?!」

ヴァルドリユーズ以外、一斉に青ざめていた。

「何も現れていないのか？」

ヴァルドリユーズでさえ、いくらか呆気に取られているような反応だったが、マリ

スは人差し指を立て、片目を瞑ってみせた。

「何も見えないからこそ、『サンダガー』で『あさる』のよ。そこからへんを、手当たり次第ね」

誰一人、二の句が告げられずにいた。

「幸い、砂漠で、辺りには壊れるようなものは何もないわけだし、ここんとこ呼び出

してやってないから、『あいつ』もストレス溜まってるだろうし、小出しにしてやら

ないと制御のコツも忘れちゃうかも知れないし　ね？」

「それって、『サンダガーで暴れ回る』　ってこと？」

マリスは、にっこりとケインを見た。

「さすが、ケイン。察しがいいじゃない」

「……なんて大雑把おおざっぱな……！」

ケインとクレアは、頭痛を覚える。

単に彼女が暴れたいだけのようにも見えるが、万が一、本当に、
獣神サンダガーの

召喚魔法で、『彼』を操るコツを忘れられてはかなわない。彼女が
制御に失敗すれば、

この世は、サンダガーの暴走により、どのようなことになってしま
うものやら。

そう考えると、誰も、真っ向から否定も出来なかった。

「なるほど。悪くはない」

「でしよう？」

沈黙の中での、ヴァルドリユーズとマリスの会話であった。

「おいおい、お前らさあ　！」

カイルが言いかけるが、ヴァルドリユーズが構わず続けた。

「だが、それならば、サンダガーを召喚するよりも、もっと簡単な
手がある」

ヴァルドリユーズが、改めてマリスを見て、一言、発した。

「脱げ」

驚いたのは、皆の方であった。

ケインとクレアは思わず、冷静なヴァルドリユーズと、そのよう
なことを言われて

も、平然としているマリスとを見比べていた。

カイルなどは目を輝かせている。

(おい、お前は、何を期待してるんだ？)

ケインが、カイルの隣で横目になる。

「……なるほどね」

マリスは納得すると、何気なく、甲冑を脱ぎ始めた。

「カイル、俺たちは席を外そうぜ」

カイルの首に腕を回し、ケインはマリスから背を向けるが、カイルは思いつきり

仏頂面ぶつちやうめんになる。

「なんでだよ？」

「……そこで、そういう言葉が出ること自体、おかしいだろ？ マリスは、仮にも、

ベアトリクスベアトリクスの王」

言いかけて、ケインは留まった。マリスの身分のことは、彼らは知らないのだと思いついたのだ。

「ベアトリクスベアトリクスの王 何だって？」

カイルが怪訝けげんそうな顔になる。

（まずい！）

ケインは、慌てて取り繕う。

「……だから、その…… 『ベアトリクスベアトリクスの王太子付きの護衛』 だったんだしさ、

それに、彼女は貴族だろ？ あんなんでも、一応は『姫』 なんだからさ、その……」

カイルの眉が、への字に寄っていく。

「それがどうしたんだよ？ 護衛だったんなら、とりわけ身分の高い貴族きうしゆってわけ

じゃないんだし、見ちゃいけないなんて、誰が決めたんだよ」

「だって、紳士は、そんなことするもんじゃないじゃないか！」

「俺は別に紳士じゃねーもん！」

「お前まへってヤツは ！」

「見るなって言われてもいないんだから、いーじゃねえか！」

「わー！ バカ！ 見るなー！」

ケインの腕を振り解いたカイルが、マリスを振り返った。

が、そこには、もう彼女の姿はなく、白い鎧だけが地面に転がっていた。

「何してるのよ、二人とも。マリスなら、もう行っちゃったわよ」
クレアが言った。

「魔力を抑えていた甲冑を外すことによって、魔物に、マリスの魔力を感知させ易くしたのよ。そうやって魔物を誘き出したところで、『サンダガー』を呼び出す

そういう作戦だそうよ」

クレアが説明した。

「それならそうと言ってくれよ。紛らわしい言い方じゃが……

！」

カイルが、ヴァルドリューズに横目で文句を言うが、彼の方は全く取り合わず、そっぽを向いている。

「なにかんちがいしてるの？ バカじゃないの？ きゃははは！」
ミュミュがケインとカイルの頭の上を笑いながら、ぐるぐる回っている。ケインは

羞恥心に顔を赤らめて下を向き、カイルは特に取り繕おうとしなかった。

「……ちょっと待て、じゃあ、今マリスは甲冑も着けずに、ひとりで砂漠をうろついでるってのか！？ 剣もまだないのに？」

「そう言えば、そうだわ」

ケインの疑問に、クレアが頷く。

「この砂漠では魔力を読み取りにくいって、言ってたよな？ もし、マリスが魔獣

に出会っても、居場所を突き止めるのに時間がかかるんじゃないのか？ いくらマリ

スが鍛えてるからって、素手で魔獣と向かい合うことでもなった

ら！」

ヴァルドリューズは、そう言うケインを、いつものように静かに見下ろす。

「たかが偵察だ」

「魔物が姿を表すのを、待てばいいじゃないか！」

「いつ現れるかわからない魔物を、ただじつと張ってるだけじゃあ、それこそ能が

ないじゃないか。また食料や水が尽きちゃうかも知れないんだしさ」
ヴァルドリューズの代わりに、ケインにはカイルが答えていた。

「だったら、せめて、ヴァルがマリスの近くで見張ってるとか……。魔物が現れたら、

すぐに出て行けるように、魔力の届く範囲で、援護してやれば」

ケインは、以前、アストーレの山でもそうだったように、ヴァルドリューズに対し

ての視線が、徐々に睨むように変わっていくのが、自分でもわかった。それと同時に、

彼に対する、疑いに近い思いも、徐々に顔を出す。

だが、それには介さず、ヴァルドリューズは続けた。

「もう少し、クレアの回復を待った方がいいだろう。薬が効くまでは、彼女をやたら

に動かさない方がいい。さきほども言ったが、マリスは単に偵察に行っただけなのだから」

ヴァルドリューズは、心配そうに彼を見上げるクレアに、静かに頷いていた。

（いつも慎重なヴァルが、なんで今は……？ ホントに心配いらないと確信している

のか、それとも、他に理由があるとすれば……）

その先を考えたケインは徐々に胸騒ぎを覚え、いても立ってもいられなくなった。

「マリスは、どっちへ行った？」

低い声で尋ねたケインに、一瞬ビクツとしたクレアは、マリスの向かって行った方向を指差す。

「マリスを援護してくる。ヴァルがいなくなつて、魔獣くらい俺が倒してやる！」

ケインは、キツとヴァルドリユースを睨むと、ダグラに飛び乗り、走らせた。

「ケインのヤツ、何ムキになつてんだろうな」

僅かに、カイルがそう言っているのが聞き取れたが、その後は、ケインにはダグラ

が砂を蹴る音しか耳に入らなかった。

砂漠に潜むもの(2)

(マリリス……！ 間に合ってくれ！)

ダグラを駆り立てながら、逸^{はや}る鼓動が音を立てる。

マリリスとヴァルドリユーズは一年旅を続け、魔物と戦っている。戦闘の時に発動さ

せる召喚魔法のコンビネーションは最高ではあるが、普段の信頼関係がそれほどでもないように、ケインには思っていた。

マリリスの方はヴァルドリユーズの実力を認めており、信頼もしているように見える

が、ケイン自身、魔道士というものを、どこか得体の知れない人種だと思っっていることもあってか、どうも、ヴァルドリユーズが彼女を信頼しているのかどうかを、疑問に思ってしまう時がある。

それは、砂漠の前に滞在していたアストレー王国の山の上で、彼と二人だけで話をした時から抱き始めているものだった。

『ゴールダヌス派というわけではない』と、『サンダガーを暴走させた時は、マリリスを斬ることもある』 それらの言葉を、ヴァルドリユーズの口から聞いてからであった。

以来、ケインは、彼に対しての見方が、少し変わってしまったくらい、真の敵は彼だった！』ということになったとしても驚かないほど、彼に対して不信感を抱いていたのかも知れなかった。

(こんな砂漠に、しかも、何か異様な事態が潜んでいるとわかって、
困^{あど}りし
て、ほっぴり出すなんて、彼女を守る役のヤツのすることじゃない
！)

ケインには、彼がミュミュヤクレアには、あまり感情を面に出さない彼なりに、心から思い遣っているように見て取れたのだが、マリスに対してそのような場面は、見たことがなかった。

彼が常に敵を意識し、結界を張ることを怠らなかったのは、義務であるように見えただった。

(こつは考えたくはないけど、……ヴァルが、ゴールドヌス派ではないんだつたら、わざとマリスを危険なところへ追いやつて、……魔獣を倒している間の事故死に見せかけることだつて、しないとは限らない……！ マリスが死んでしまえば、ゴールドヌスの計画とやらも達成されないわけだし、……できれば、こんなことは考えたくない)
かっただけど、その可能性がないとは限らない！)
(性格的にも行動的にも、かなり問題のある彼女ではあるけど、本来なら、王太子妃となつて、戦いとは無縁な、華やかで優美な人生 ホントかよ？ を、送つて

いたかも知れないんだ。それが、信頼しているパートナーであり、上級魔道士である
ヴァルが、いつ敵に回るかわからないこんな状態で、魔物やベアトリクスの追手、敵
の魔道士たちを蹴散らしながら、仕舞いには……魔王にあてがわれ

てしまう!?

そんな理不尽なこと、俺には、黙って見過ごすことは出来ない!
(そして、彼は、こうも考えた。

いつか、何もかもが終わって無事だったら、マリスは帰らないとは言っていたが、

ベアトリクスまで、彼女を送り届けるつもりでいる。ベアトリクスでの陰謀もすべて

片付けてから、である。

(セルフイス王子がどんな人物かは皆目見当が付かないし、当然面識もなければ義理

もないけど、あの常軌を逸したマリスが好きになった相手なんだっ
たら、彼に、これ

以上彼女を野放しにさせないようお願い聞かせて じゃなかった、

彼こそが、彼女を

最も幸せにしてあげられるような気がする)

それが、彼の、ヴァルドリューズに対しての不信感とともに、ケ
インの中に沸き出

してきた思いつきであった。

「ケイン? どうしたの?」

マリスがダグラの上で、目を見開いている。ケインが考え事をし
ている間に、彼女

に追いついていた。

ほっと安堵した彼は、すぐに顔を引き締める。

「心配するなよ、マリス。魔物が現れても、絶対に俺が守るからな」
頼りになる男の決め台詞のように言っただつもりであったが、それ

に反して、彼女の

顔は不機嫌になっていった。

「あたしを守るですって? そんなことは、どこかのお姫様にでも
言うことね」

拍子抜けした彼は、すぐに思い出した。

（そうだった。こいつは普通じゃなかったんだ。俺なんか、そんなことを言わ

れるのは、プライドが許さないらしい……）

「そうは言うけどさ、マリス、お前、素手で魔物に刃向かうつもりか？ それは、

いくらなんでも無謀過ぎないか？」

「だったら、ケインの剣、貸して」

「へっ!？」

「また前みたいに、マスターソード貸してくれない？ それとも、今度は、そつちの

バスターブレードも使ってみたいわね。よく斬れるんでしょう？」

マリスの不機嫌な顔は消え去り、今では瞳を輝かせている。

武人氣質であるからか、武器のこととなると、わくわくしているようだった。

「確かに、どつちかの剣をお前に貸せば、魔物が出て来ても、戦闘はラクだけど……」

「だけど……なに？」

一呼吸置いて、ケインは続けた。

「どつちも、俺にしか使えない剣なんだ」

「あら、でも、前は、マスターソード貸してくれたじゃない？」

「あのー、それは、きみが勝手に抜き取ったから。それに、マスターソードは、今は

あの時とは状況が違ってて……」

黒の魔石ダイク・メテオの力を吸収したマスターソードは、以前と違い、黒魔法が強化したが、同時に、敵の魔力を吸収し、使うことが出来る。剣の持ち主でない

限り、魔力を吸収することは出来ないのだった。

「ふ〜ん、なんだか事情があるみたいね。……だったら、バスターブレードでもいい

わ

「それこそ、人には、使えない剣なんだ」

「あら、ちよつとくらい重くたって、あたしは平気よ」

「そうじゃないんだ。バスターブレードは、前の持ち主の意志を引き継いだ者にしか

使えないんだ」

「えーっ、そうなの？　じいちゃんここで見てから、あたし、バスターブレード使っ

てみたかったのに。……あ、見たことあるっていうのは、もちろん、魔術であって、

本物じゃないけどね」

（ゴルドダヌスカ。さすがに、何でも知ってるらしいな）

「でも、何でその、『じいちゃん』は、そんなに性格に伝説の剣の姿形を知ってなん

だ？　魔道士の力を持ってしても、この剣は　特に、マスターソードは知られてな

かったはずなんだよ」

　　マリスは、少し驚いて、ケインを見る。

「そうだったの？　でも、じいちゃんは、どっちの剣も、見たことがあるって言うて

たわ」

　　ケインは思わず、ダグラの足を止めた。マリスも、揃って、手綱を引き、彼の隣で

立ち止まる。

「……そんなことは、有り得ない。だって、バスターブレードも、マスターソードも、

前の持ち主は、何百年も前の人物だったはずだ」

「じいちゃんは、千年以上も前から生きているのよ。だから、きっと、その間に、

両方の剣を見たんだわ」

「せ、千年だつて!？」

驚いたケインは、マリスの顔を見つめながら、クレアの言葉を思い出した。

『半ば魔神と化した魔道士』だと。

(千年も生きているということは、やっぱり、そういうことなのか) ついでに、ふと思いつく。

フェルディナンドで出会ったカエル魔道士のドウグは七〇〇年、木の魔道士バヤジ

ツドは六〇〇年以上生きていたと言っていた。既に、ヒトとはほど遠い外見の彼らであつたが、それ以上も前から生きているゴールドヌスとは、どのような外見だつたのだろうか？

(ゲテモノ食いだと言うし、殆どバケモノだつたんじゃ……!?)

そう思い付いて、ケインは、ぶるつと身体を震わせた。

「詳しい話はよく覚えてないんだけど、バスターブレードのことは、なんでも北の果

ての巨人族の剣で、この世で最強の剣だつてことくらいは、なんとなく覚えてるわ。

マスターソードのことは、あの剣は詳しいことは持ち主にしか伝授されないからつて、

あまり教えてもらえなかつたけど。いくら優秀な魔道士たちが力を合わせて探ろうと

しても、ダメだつたみたいよ。

五〇〇年前に魔道士の塔が設立されて以降も、マスターソードの秘密は、どうして

も探れなかつたみたいだわ」

マリスは一旦区切つてから、続ける。

「それでも、じいちゃんや、『蒼いじい』、ヴァルなんかは、もうちょっとは詳しく

く知ってるみたいだけどね」

『蒼いじじい』とは、ゴールドナスと敵対する蒼い大魔道士のことであった。

あまりにも強力な魔力を持つ魔道士には、その名を口にしたらだけでも探知されてしま

まうおそれがあるため、悪口ではなく、マリスはそのような言い回しをしたのだった。

「ねえ、ほんとに、剣貸してくれないの？」

マリスは、好奇心を隠せない目を隠し切れずに、媚びた表情を作っている。

「貸したいのは、やまやまなんだけど……」

ケインは、少しの間、考えていた。

（バスターブレードは、本来の持ち主の意志を受け継がないと……だし、マスター

ソードは、ダーク・ドラゴンの力が吹き込まれ、剣を使えば使うほど、俺に馴染んで

くるもの。マリスに貸したところで、その力が逃げていくわけでもないし、操れる

わけでもないけど、その間は、剣の成長が止まってしま

この先訪れる町や村に、いい剣がなければ、マリスに貸している期間も延びること

になるわけで、それだと、ちょっと 大分、もったいない気がする。かと言って、

バスターブレードは……！ マスターソードは……！)

彼の思考はぐるぐると巡り続け、一向に答えが出る気配はない。

「しょうがないわねえ。あたしが決めたい。よしっ！ バスターブレードにしま

しょう！」

マリスが、ぽんと手を打った。

「こらこら、勝手に決めるなっば。それこそ、お前の持てるモン

じゃないんだよ」

「ケインが前の持ち主から意志を受け継いで使ってるんだとしたら、あたしも、その意志を受け継げばいいんでしょ？」

「……それが、マリスに出来るようなことなら、俺だって、さっさとバスターブレードを貸してるんだけど」

溜め息を吐いたケインを、きよんとした顔で、マリスは見ていた。

「いいか、これを手に入れた人間の意志と、違う者が使えば、巨人族が剣を取り戻しに来ちゃうんだぞ」

「……そうなの？」

「そう」

「……で、その持ち主の意志って、何だったの？」

マリスの瞳は輝いていた。

「俺が使えるってことで、わからないか？ その持ち主の意志は、すなわち正義だ」

「……」

マリスは、黙っていた。

少しの沈黙を経て、再び彼女は口を開いた。

「マスターソードは？」

(……おい、なぜ、そんなに簡単に諦める？)

ケインは、横目で見てから答えた。

「マスターソードは、まだ成長段階なんだ。俺が使わない間は、成長が止まっちゃうんだよ」

「じゃあ、どっちもあたしには使えないっていうの？ ひどーい！」

「行いを正せば？ そしたら、バスターブレードだって、使えるか」

も知れないぞ」

悠々と、ケインはマリスを見て言った。

「……バスターブレイドもマスターソードも正義の剣……」

マリスはダグラの上で腕を組み、ぶつぶつ言っていた。

「よしよし、考えてる、考えてる。これを機に、行いを改め」

「やっぱ、パス！ どう考えても、どっちもあたしには無理みたい。お手上げだわ」

彼女は、肩を竦めてにつこり笑った。拍子抜けしたケインは、危うくダグラから落ちそうになった。

「な、なんで、そんな簡単に諦めるんだよ。悪いことに使わなければ、いいだけなん

だから、簡単だろ？」

「それが、なかなか難しいのよねー。だって、野盗とか苛めちゃだめなんでしょ？」

彼女は、ころころと笑っていた。

（このムスメは……！ やっぱり、根性が曲がってる！）

「……本当に、剣はいらないのか？」

「うん。ケインに守ってもらうから、いい」

またまた彼は、ダグラから落ちそうになった。

「だって、どこの魔道士や魔物が狙ってるかわからないのよ？ あたしが武器を持って

ないんなら、ケインが四六時中守るしかないじゃない？ あたしと

常に一緒なのよ？

大変ねえ、頑張ってる！」

「し、四六時中……」

マリスのにっこり笑顔を見て、ドキッと心臓が鳴り、ほわっとした気持ちでケインの脳裏を掠めたのは、ほんの一瞬であった。

（いやいや、呑気に喜んでる場合じゃない！ 俺が根を上げて、剣

を貸すって言い出すまで、きつと何かやらかすつもりなんだ……！ この顔は、絶対そくに違いない！）

両者の睨み合いが続く。

ふと、マリスが視線を反らせた。といって、睨み合いに負けたのとは、様子が違い、

真剣な表情だ。

「……魔物だわ……！」

空が、ようやく薄暗くなりかけていたその時、久しぶりに対面しようとしている

魔獣の、おどろおどろしい気配が、ケインにも、徐々に感じ取れた。

じじじじじじじじ……！

砂漠の地面の底から、地鳴りのような音がする。

「大きいわ！ ……まさか、近くに次元の穴が！？」

ますます大きくなる地鳴りに、二頭のダグラは、悲鳴いみなのような
きを上げ、

暴れ出した。なだめても静まらなかったため、二人はダグラから下りる。二頭とも、

別々の方向へ駆け出してしまった。

どどどどどどどど……！

二人の前方の砂地が盛り上がる。頂点の砂が流れ落ちていくのと同時に現れたものは

太い四本の手足を生やし、頭が既にヒトひとり分はあろうかという、黒光りした

大きな岩で出来た八頭身のヒトに似せた形のもの ゴーレムだっ

た。

「ふはははは！」

そのゴーレムの肩には、小柄な人影があった。

黒いフードを被った、見るからに魔道士のような者であったが、フードの中は、

三〇代後半くらいで、あまり特徴のない、魔道士としては普通の青年らしさが感じられる顔だった。

「ふっふっふっ、久しぶりだな、ケイン・ランドール！」

「なにっ!? 俺の敵だったのか!?」

「忘れたとは言わせんぞ」

男はそういうが、ケインには、まったく覚えがない。

「誰だ、お前は!？」

魔道士の男は、足をすべらせかけたが、すぐに体勢を立て直した。

「ほら、私だ」

「……ほら、と言われても……?」

「お前とは、ローダンの山で初めて会った……ほら、あの時の……」
「なんとか思い出させようと努めているようであったが、といって、友人ではなさそうだ。」

「お前なんか知らない」

ケインが真面目な顔でそう言うと、ちょっとがっかりしたように、彼の口からは

思わず溜め息が漏れた。

「じゃあ、ザンドロス様のことは……?」

自信をなくした小さな声で、男はまたしても尋ねる。

「ザンドロスだと!? そいつは、マスターソードを奪おうと企んだ、上級のヤミ

魔道士じゃないか! なんて、お前は、そんなヤツのことを知っている!？」

……そうか、それだけ、ヤツが有名人だったということだな！
しゅんと、冷めた空気が流れていた。マリスも、謎のゴーレムで
さえも、止まっていた。
いた。

「……マヌケ加減も相変わらずのようだな、小僧。我が名は　ま
だ名は許されてお
らぬが、ザンドロス様と共に、お前を捕えようとした、お付きの新
人魔道士様だ！」

ゴーレムの肩の上で、魔道士がそういうと、タイミングよく、風
が一吹きし、ふわ
っと砂を巻き上げていった。

ケインは顔をしかめ、腕を組み、はたまた首を傾げ、一生懸命思
い出そうと試みた。

「……………ああっ！」

そう言えば、いたな、そんなヤツ！」

ケインは、ぽんと手を打ち鳴らした。

「ふっ、やっと思い出しおったか」

魔道士の方も、ちよっと嬉しそうである。

「ねえ、誰なの？」

マリスが、つつつとケインに寄る。

「二年前に、ちよっと出会ってな。ザンドロスってヤミ魔道士は倒
したんだが、その

時お付きだったこいつには、逃げられちゃったんだよ。別に倒すほ
どのヤツでもなか

ったから、後を追わなかっただけで」

「なあ〜んだ、そうだったの」

あはははは……と、その場は、笑いに包まれていた。

「ちがーう！　そうではないっ！」

一緒に笑っていた魔道士であったが、ゴーレムの肩の上で足を踏

み鳴らし、和やかな空気を遮った。

「私は大魔道士様のご命令で、二年と三ヶ月の間、この砂漠で貴様を張っていたの

だ！ 今度こそ、逃しはしないぞ、ケイン・ランドール！」

彼は、ピシツと指をケインに向けた。

「だから、逃げたのは俺じゃなくて、お前の方だってば」

「そうではないっ！ 私は、あくまでも大魔道士様に報告をしに行つたのだ！ それ

は、新人魔道士の務めなのだ！ 従つて、決して、お前が怖くて逃げたのではないのだ！」

いかにも言い訳じみた言い方に、二人には聞こえた。

「それで、あんた ああ、名前がないんじゃないわね。とりあえず、

『名無しのプー』でいいわね？」

マリスのセリフに、彼は、ゴーレムの上で転げ落ちそうになっていた。

「プーさん、あんたの言うその大魔道士って、もしかして、蒼い大魔道士のこと？」

ケインは、はっとしてマリスを見た。

「大魔道士なんて、そうそういるもんじゃないわ。それに、彼は、マスターソードの

ことを知っていたものね」

「さすがに、我が大魔道士様は著名であられる。小娘、貴様の言う通り、我が主人は、

蒼い大魔道士ビシヤム・アジズ様であらせられる！」

既に、勝ち誇ったような笑い声が、ゴーレムの肩の上という高いところから、こぼれてきていた。

「そうだったのか！ てことは、あの蒼い大魔道士が、マスターロードや俺のことを

知ってたのは……！？」

「そうだ。私が報告したからなのだ！」

「またしても、嬉しそうな声であった。」

「ああ、そうそう、お前に聞きたいことがあったのだった」

魔道士ブーは、普通に、近所の住民のように、親し気な口調になった。

「バスターブレードのレオン・ランドールはどうしたのだ？ お前の父親の。なぜ、

一緒ではないのだ？ 今、どこにいる？」

「……そうか、俺のことを覚えていたんだから、当然、彼のことも覚えていたか」

ケインは、ぎゅっと拳を握りしめた。

「父親って……」

マリスは呟いてから、ケインを気遣うように見る。

ケインは、顔を上げ、ゴーレムの肩に乗った魔道士をキッと見据え、言い放った。

「……レオンは死んだ。彼が息を引き取る前に、俺がバスターブレードを引き継いだ

んだ」

ケインは、背中に背負い、突き出している剣の柄に、左手で触れていた。

V S ゴーレム

「そうか、レオン・ランドールは死んだのか。あれほどの男を亡くすとは、実に惜しいことだな。」

ところで、ケイン・ランドール、なぜそんなおかしな格好をしている？ マスターソードがなければ、危うく見逃してしまうところだったぞ」

ケインと出会って二年経つ今でも、まだ新人を名乗る魔道士プー（仮称）は、敵で

ありながら、緊張感のない質問をした。

オアシスで購入した通気性の良い、白いたつぷりしたパンツに、ベストとターバンという東方の衣装に身を包んでいるケインと、マリスマ似たような形の赤い衣装である。

「お前こそ、二年前から、ここで俺を張ってたとは、お前の主人は、二年後に、俺がここを通るって予測できたってわけか？」

巨大ゴーレムの肩の上で、プーは、ふっふっふと笑ってから、語り始める。

「二年前のあの後、『マスターソードの少年の名前を調べよ』との大魔道士様の命令

で、私はお前の名前を確認した。なにしろ、貴様とレオン・ランドールは、私の中で、ごっちゃになっていたからな」

ケインもマリスマも黙っていた。

「そのすぐ後、私は、マスターソードの件から解放され、この砂漠で、ゴーレムを

作る修行を命じられたのだ。だが、それは、貴様がここを通りかか
ることを予想なさ
った、大魔道士様の、二年と三ヶ月の間、お前を待ち伏せするの
に私を退屈させな
い意もあつたのではないかと、私には、今わかつたのだ！」
黒いフードを被つた新人魔道士は、誇らしげに、踏ん反り返つて
いた。

「ねえ、それって、もしかして、……実は、左遷だつたんじゃない
の？」

マリスが、ひそひそとケインに耳打ちする。

「だよな？ 蒼い大魔道士が、俺たちがここを通るかも知れないつ
て予想してたんだ

「たら、こんなヤツにこの場を任せるわけないし」

ケインも、こっそり返す。

「ヴァルはいないし、マリスも剣を持っていない 向こうにとつ
ては、マリスを

手に入れる絶好のチャンスだろう。いくら、こっちの戦力が普段よ
り劣っていたと

しても、そんな重要なことをこんなヤツごときに任せるわけではない
だろうからな」

こそそそと話し合う二人の姿を気にも留めていなかったプーが、
ふとマリスに視線
を落とす。

「時に、その小娘は、一体なんなの？ なんだか、とてつもない
魔力を感じるのだ

が……？」

（こいつ、マリスのこと知らされてないのか！？）

ケインがマリスと出会つたのは、ほんの数ヶ月前のことだ。

（俺のことを調べて、すぐゴーレムの修行に入ったと言っていたか
ら、俺たちが一緒

に行動していることは知らなかったのか。しかし、そんな情報さえ行ってないって

ことは、やっぱり、あいつ、大魔道士に見捨てられたんじゃない……？

」

一瞬、プーを哀れに思うケインであったが、すぐに表情を引き締める。後ろに手を

回し、楽な姿勢で、ぼーっと暇そうに立っているマリスを背に庇うと、ゴーレムの肩にいるプーを睨んだ。

「彼女は、ただの>b<謎>/b<の踊り子だ。この娘には、手を出すな！」

「えーっ！」

不平一杯の声を上げたのは、マリスだった。

「『えーっ！』じゃないっ！ お前、今の自分の状況わかってんのか？」

「わかってるわよ」

「俺に『守ってもらう』んだろ？」

ケインは、先の彼女の台詞を口まねただけであったが、彼女は面白くなさそうに、

ふて腐れ、そつぽを向いた。

「てことで、お前の相手は、俺だけだ。かかってこい！」

ケインは、プーを挑発するよう笑ってみせた。あんな新人魔道士の作ったゴーレム

など、まだ不完全であるマスターソードでも充分だと、確信していた。

「そうか、身の程知らずめ」

プーも笑う。そして、片方の手を口元に添え、辺りに声を張り上げた。

「ゴーレムの皆さん、よろしくお願ひしまーす！」

彼の謙虚な呼びかけに応えて、砂の中からポツポツと現れたのは、

彼の乗っている

岩の巨人よりも断然小さい、ヒトの頭ほどの大きさの、茶色をしたゴーレムたちであつた。

しかし、その数は、ケインが思ったよりも多く、百体はあるようだつた。

「よし、こんなやつら、まとめて……！」

ケインが、そう思っていると、マリスが、いきなり彼の剣を抜き取つた。

彼女の手には、マスターソードが握られていた。

「義によつて、助太刀するわ！」

マリスはマスターソードを構え、しゃあしゃあと言つてのけると、首だけケインに向き、にっこり微笑んだ。

「こら、返せ！」

「やっぱり、剣があつた方が、早く片付くと思うのよ。ね？」と、肩をすくめる。

「その娘は、ただの『謎の踊り子』ではなかつたのか！？」

マリスの慣れた構えに、プーは驚いて足をすべらせ、ゴーレムの首に必死に捕まつた。

（『謎の踊り子』つてだけで、充分得体が知れないはずなんだが……）

ケインが、呆れ顔になる。

「ふっふっふっ、それは、単なる仮の姿。敵を欺くには、まず味方からつてね」

（俺は知ってるつつうの！）

「そつ、そうだったのかあ！ なんといい汚い作戦なんだあ！」

不適な笑みを浮かべるマリすと、ゴーレムの上で頭を抱え込むプー、それをます

ます呆れながら見守るケインであった。

「それにしても、バカにちっちゃいゴーレムね。普通、ヒトよりちよつと大きいくらいなのに」

マリスの声に、プーは我に返り、またしても踏ん反り返る。

「いかにも、それらは、私の作ったゴーレムだからだ！」

「……イバれるかよ」

「だって、そつちのは、デツカイじゃないの」

プーの乗っかっているゴーレムを指差して、マリスが言った。

「これは、ある上級魔道士様が、私のために、見本で作ってくれたものなのだ！」

「あー、なるほど、別人の……ね」

それは、一目瞭然だった。巨大ゴーレムは、^{いか}厳つい顔をして、全身黒光りし

ていて、材質の良さが伺えるが、辺りに湧いて出てきたゴーレムたちは、ヒトが眠っ

ているような顔を掘られていて、土を塗固めて作った人形という印象が強い。

形もイビツで、ケインたちがたまに露天などで見かけてきた、^{まが}紛い物の置物と変わらなかった。

「せつかく作ったのに悪いけど、この剣のサビにさせてもらっわ！」

「

マリスが剣の刃をぺろつと舐め、にやつと笑う。

「お前は、野盗かー！」

やっと思っ存分暴れられる場になったのだから、この場は彼女に任せてやっても

いいように思えたケインであったが、一応、背中のバスターブレードを引き抜き、

構えた。

「ゴーレムの皆さん、少年の方は生かして捕らえるのですよ。女の方は殺しても構いません」

「おいおい、逆だろ！？ お前、大魔道士に怒られるぞ！」
チビゴーレムたちは無言で、短く丸まった足をよちよちさせながら、二人へと近付いていく。

(こ、こんなやつらに、一体何ができると……？)

スコーン！

軽い音がした。

マリスが、一番手前に来たものの首をはねたのだった。

哀れにも、小さな丸い頭は飛ばされ、残った胴体は、ぱたんと倒れると、黒い煙と
なって消えていってしまった。

それでも、数だけが多いゴーレムたちは、速度を変えることなく、よちよちと迫っていく。

ケインもバスターブレードで辺りのゴーレムたちを薙ぎ払っていた。

普通の地面と違い、砂地に足を取られがちではあるものの、土人形たちを壊していくのは、二人にとっては容易たやすい。

(今回の本命の敵は、あの巨大ゴーレムかな。あっちは、上級魔道士が作ったって

言ってたもんな。決してプー本人ではなく、あくまでもゴーレム) チビゴーレムを倒しながら、ケインはそう考えていた。

「あああ、なんてことを……！」

プーの嘆きが、空に響く。

僅かな時間の間に、彼の二年と三ヶ月の修行の成果は、ケインとマリスの剣にかかり、瞬く間に消滅してしまった。

「ちよつと可哀想な気もしたけど、……結局、なに？」
ケインもマリスも、まるで、単なる掃除が終わったかのような気分だった。

「……貴様たちを、少々侮っていたようだな」
プーが悔しげに呻うめいた。

「侮りすぎだっ！」声を揃える二人。

「では、大きい方のゴーレムさん、お願い致します」

プーは、すぐ真横にあるゴーレムの顔に向かって、ペコリと頭を下げた。

ずしん……

巨大ゴーレムが地響きを立て、ゆっくりと歩き出す。

ずしん……

ずしん……

ずしん……

ずしん……

「ふん、しゃらくさいわ！」

速度の遅さにじれったくなったマリスが、突然走り出し、ゴーレムの足目がけて、

マスターソードを横に構え、一気に薙ないだ！

ぱっくりと割れた綺麗な切り口は、まるで岩のテーブルである。

不完全なマスターソードでも、ゴーレムを斬ることが出来たのは、彼女の剣の腕が

良いことを表していると、ケインは思う。

斬られた足首を残したゴーレムはバランスを崩し、倒れそうになるが、短くなった方の足を砂に食い込ませ、なんとか持ちこたえる。

マリスは続けて攻撃はせず、即座に向きを変え、油断のならない目で、さらに構えた。

「はっはっはっ、無駄だ！」

魔道士プーの笑い声が響いたと同時に、巨大ゴーレムが短くなった足を持ち上げ、切り口を合わせる。

すると、みるみるうちに境目が消えていき、元通りの足に戻ったのだった。

「やっぱりね」

マリスが呟く。

「ゴーレムは、岩や石などを基本に固めて作った物。本来は、水の魔法でないと倒せないものなのよね」

「その通り！ 貴様らが、いくら切り刻もうと、このゴーレムは、すぐに復活して

しまうのだ！」

まさに、トラの威を借るキツネであるプーは、勝ち誇った笑い声を立てた。

「そっか、斬ってもダメなのか。……あれ？ じゃあ、さっきのチビゴーレムたちは、何で斬れたんだ？」

「ますます、完成品からはほど遠い、残念ゴーレムだったってことでしょうね」

「……」

けなされても一向に気にしていないプーが、声を張り上げる。

「それでは、一気に行っちゃってください！」

岩の巨人は、マリスに拳を振り下ろす。

飛び退すたって回避した彼女は、砂に足を取られたため、普段ほどの距離を飛ん

ではいなかった。

ゴーレムは動きに敏捷さは感じられなかったものの、破壊力は高く、打ち付けた

地面は、人間ほどもあるその巨大な拳より一回り大きくへこみ、そこへは、ざざーっ
と砂がなだれ込んだ。

砂地でなく、普通の地面であったなら、その拳の跡は残り、地割れも起こっていたことだろう。

マリスを援護しに走ったケインも、ゴーレムの足に斬りつけたが、切り口は簡単に塞がる。

だが、マスターソードの時のように、切り口が完全に見えなくなるということはな

く、つなぎ目が節目のように残ったままだった。

バスターブレードで斬りまくれば、いつかは壊れてくれそうな気もしたが、それは、

ケインの体力の問題にもかかわるのだった。

「ケイン、倒すことは考えなくていいわ。とにかく、時間を稼ぐのよ。もうすぐ、

ヴァルが来てくれるはずだわ」

(そんなこと……アテになるもんか！)

ケインは、ひたすら岩人間を切り刻もうと試みていたが、そのうち、ゴーレムは、

マリスよりもケインへ、攻撃を向ける。

踏みつけようと、巨大な足が上から来たのを飛び退ると、そこへ岩の拳が振り下ろ

された！

砂に足を奪われ、逃げるタイミングの遅れた彼に、容赦なく拳は襲いかかる。

ガシッ！

マリスが、ケインとゴーレムの間に入り、マスターソードで、ゴーレムの拳を受け止めた。

「こんなヤツ相手に、まともに斬り込むことないじゃないの。ヴァールが来るまでの辛抱だつていうのに、何をムキになってるのよ。……もしかして……!?」

ヴァルドリューズを信用していないことに、気付かれたかと、ケインはマリスを見る。

「ケインも暴れたかったの？」

「お前と一緒にするなー！」

ケインの大剣は、巨大な拳を押し返してから、斬り飛ばした。地響きを立てて、岩の塊は、砂地に落下する。

「おのれ、ちよろちよると……!!」

ゴーレムの肩の上に乗ったままのプーが、イライラしていると、遠くから、獣の唸り声のようなものが聞こえてきた。

「あれは、……魔獣!?」

マリスが振り返る。

ゴーレムの登場と同じく、離れた地面から砂が盛り上がっていく。そこに現れたのは、巨大なトカゲだった！

トカゲは、後ろ足で立ち上がると、雄叫びのように、奇妙な声を上げた。

全身が砂と同じ色の、表面がぶつぶつした黒い濡れたように光る皮膚。

大きな太い尻尾を地面に叩き付ける度に、砂を舞い上がらせていた。

燃えるような赤い瞳と、同じ色の二枚の舌が、裂けた口から絶えず出たり、引っ込んでいたりしている。

口の中にも、びっしりと、牙が生え尽くし、足先の指には、牙よりも太く、鋭い爪が光る。

ゴーレムとほぼ同じ大きさの、巨大な魔獣であった！

「なんじゃあ、こいつはあ!？」

ゴーレムにしがみついたプーが、その大トカゲを見下ろし、足をすくませていた。

「何って、お前が呼び出したんじゃないのか？」

ケインは、目を丸くした。

「違う！ 私は、こんな不気味なものは知らん！」

「呼び出したのがプーじゃないとすると……」

「巨大サラマンダー。どうやら、次元の穴も、この辺にあったみたいね」

ケインの横で、マリスが静かに言った。

トカゲはゴーレムに近付くと、匂いを嗅ぐように、顔を向けていたが、食べられな

いと踏んだのか、そのうちケインたちの方へ目を向け、赤い舌をちらちら出して、

近付いてきたのだった。

「こつちなら、なんとか倒せそうじゃない？」

マリスがウインクする。

「ただし、次元の穴を通じてやってくる魔獣の後には、そいつの本当の姿が出現する

「こともあるんだけどね」

モルデラの魔獣ドラドなどは、その例であった。それを、マリステとヴァルドリユー

ズが召還した獣神サンダガーが葬ったのは、ケインの記憶にも新しい。

ドラドとサンダガーの戦いを見る限りでは、剣だけで倒せるようには、とても思えなかつたのを思い起こす。

サラマンダーは、目で獲物を探すというより、辺りの匂いを嗅いでいた。食べられるものの匂いだと判断してか、ケインたちめがけて目がけて、鋭い爪を振り下ろした。

ケインとマリスは、それぞれ反対へと散り、回避した。

トカゲは、きよろきよろするが、そのうちマリスに向かい、足を振り上げた。

しばらくそれを軽く避けていた彼女は走り出すと、ケインへと向かう。

「どつやら、あいつは目があんまりよくないみたいだわ。あたしの魔力を感知して、追っかけてるだけみたい」

そうケインに告げた時、後ろから伸ばされてきたゴーレムの手が、マリスの身体を掴んだ。

「何するのよー！」

「マリス！」

彼女の手から、剣が落ちる。

咄嗟に、ゴーレムの指を切り落とそうとしたケインだったが、彼女にあたることをおそれ、ためらった。

その一瞬の躊躇いのうちにも、ゴーレムは、マリスを引き上げて

いつてしまったの
だった。

「ふはははは！ 小僧、娘を返して欲しくば、おとなしく、私の言
うことを聞くの
だ！」

なんとか抜け出そうと、マリスがもがくが、いくら『武遊浮術』
を極めていても、
怪力になったわけではない。相手の勢いを利用するところに極意が
ある。

ゴーレムの手から逃げるのは、人間の力では無理であった。

プーが、勝ち誇った笑顔で、ケインを見下ろす。

ケインは、トカゲの爪攻撃をかわ躲しながら、マリスを見上げる。

「マスターソードごと貴様を差し出せば、きっと大魔道士様も喜
びになるはず。」

どうだ、マスターソードと貴様をセットで、小娘と引き換えとい
うのは？ 早くしな

いと、この娘を捻り潰してしまうぞ」

形勢逆転にプーは気分を良くしたのか、にやにやしている。

「ケイン、後ろ！」

マリスが叫ぶと同時に、巨大トカゲの口はカツと開き、ケインを
一飲みしようと、

すぐそこまで迫っていた！

V S ゴーレム V S サラマンダー

どぼふあっ！

その時、強い風が地面をえぐった。

サラマンダーの巨体は、何かで突き飛ばされたように、一瞬で弾き飛び、砂にめり込んだ。

「ヴァル！」

マリスの歓喜の音が響く。

ケインのすぐ後ろの空間が揺らめくと、そこには、ヴァルドリユーズが姿を現したのだった。

「おい、ケイン、マリス、大丈夫だったかー！？」

舞い上がる砂煙の中から、カイルとクレアの乗ったダグラと誰も乗っていないダグラがやってきた。

「き、貴様、仲間がそんなにいたのか！？」

プーが、素っ頓狂な声を上げた。

ケインの隣に来たヴァルドリユーズは、ちらっと、プーの乗るゴーレムを見上げた。

「ヤツは？」

「ああ、昔の知り合いだ。どうやら、『蒼いじいさん』の一派らしい」

ヴァルドリユーズの瞳が、一瞬鋭く細められた。

「ヤツ自身は、まだ駆け出しの魔道士なんだが、あのゴーレムは、上級魔道士の作っ

たものだと言っていた。剣で斬ってもすぐにくっついてしまうんだ」ケインが話し終わるか終わらないうちに、巨大トカゲが砂の中か

ら、むっくりと
起き上がる。

「ゴーレムは私なんかする。魔獣は、お前が倒せ」

「あんなデカイ魔獣を、俺ひとりで!？」

「思わず、ケインはヴァルドリユーズを見返した。」

「どうした？ お前ひとりでも、マリスを魔獣から守ってやるのではなかったか？」

彼の静かな声は、挑発しているかのように、ケインには思えた。

「……そうだったな」

ケインは、手にしているバスターブレードに、ぎゅっと力を込めた。

「それではない。マスターソードを使え」

落ちていたマスターソードを拾って、ヴァルドリユーズが差し出した。

バスターブレードを背中に担ぎ直し、戻って来たマスターソードを両手に握り締め、

ケインは、サラマンダーに向かって構えた。

「それは、あたしの獲物よー！ サンダガーに食わせるんだから！

」

マリスのヤツ、この期に及んで何を言ってるんだと思いつつ、

ケインは、大トカ

ゲに向かい、斬り込んでいった。

サラマンダーは、さすがに砂漠慣れしていて、ゴーレムよりも、動きが敏捷だ。

ケインが、フェイントをかけても、すぐに方向転換が出来る。

深い砂場を走り回らなくてはならない人間の方が、断然不利な状況には違いなかった。

それでも、一瞬の隙を見つけ、ケインは魔獣の振り翳す鋭い爪目にかけて、一気に

斬りつけた。

しゃあああああああ！

三本の指先は、それぞれ飛び散った！

そこから不気味な緑色の血液が、ぶしゅと勢いよく流れ出る。

牙だらけの口は天を仰ぎ、舌もちりちりと伸び上がっていく。

その間にも、ケインは、魔獣の白い腹の下に滑り込み、斬りつけていった。

魔物特有の血が、白い腹からも吹き出す。緑色のぶよぶよした内蔵が、割れた腹から覗く。

ら覗く。

彼は、その場から脱出し、倒れるのを見届けようとしたのだが、

「ケイン、よけて！」

マリスの声が聞こえたような気がした。

と同時に、サラマンダーの口から炎が吐き出された！

人ひとりなど簡単に包み込んでしまうほど、大きく、勢いもある

炎の渦が、ケイン

を襲った。

マスターソードを迫り来る炎に向けて突き出す。

しゅるるるるる………！

炎はすべて、マスターソードの中に吸収されていった。

（良かった。マリスに剣を使われても、中のダーク・ドラゴンは逃げなかったみたいだ）

ちらつと、剣の柄を見て、ケインは、わかっていたことでも安堵した。

「むづうう！ やはり、恐るべし、マスターソード！」

プーの声だった。

（あいつは、きつと、魔石を三つとも揃えたマスターソードのまま
だとしても、思っているんだろう）

炎を吐き続けるトカゲの術を、次々と、難なく吸い込んでいくマ
スターソード。

ダーク・ドラゴンも喜んでいるのか、剣の中で、勢いよく、くね
りまわっている
感じが、ケインにも伝わる。

「そろそろ、反撃させてもらおうか」

サラマンダーから、再び発射された炎目かけ、ケインがマスター
ソードを向けた。

「剣に棲まいし黒き竜　ダーク・ドラゴン　よ。紅くわいなの竜に、
その身
を映うつせ！」

剣先から現れた、西洋竜を象かたどった黒い影は、瞬時に赤々と燃え盛
った。

渦巻く炎に、まるで生きたドラゴンのような炎が激突する！

炎のドラゴンが、炎の渦を喰らうように、二つの炎は絡み合い、
周囲を赤々と照ら
す。

「レッド・ドラゴン　！？」
マリスとカイルが同時に叫ぶ。クレアは、驚きのあまり、声も出
せなかった。

ヴァルドリユーズの瞳は、何かを確信したように、微かに光る。

炎の竜が渦を吸収し、サラマンダー本体にも襲いかかると、もは
や、サラマンダー
に逃げる術すべはない。

レッド・ドラゴンに絡めとられた巨大トカゲは、跳ね上がりながら、なんとか飛び

退いたが、口先から腹にかけて全身の半分が焦げ、パリパリと、皮膚が鱗ウロコの

ように割れ目が出来、剥はがれかかり、激痛に、のたうち回っていた。

「すごいわ……！ マスターソードって、炎の技も出来るのね！？

炎系の得意な

サラマンダーにさえダメージを与えるなんて　！」

捕らわれの身であるマリスが、そんなことは一切忘れていているかのような、感心した

声を上げた。

「ふふん、あんなのは、ほんの序の口だ。あの剣は、私の呼び出したデモン・ビース

トですら、一瞬にしてやつつけてしまったくらいなのだからな！」

プーが、誇らし気に、威張って見せた。

（お前って、一体……？ ホントに敵なのか？）

時々、ケインは疑問に思う。

それまで、ゴーレムに水の呪文を浴びせる様子の中になかったヴァルドリューズに、

動きが現れた。

彼の指が三角印を作り、その中に、ぼわーっと金色の光が生まれていた。

マリスの周りにも、白い煙のようなものがしゅっしゅと集まっている。

その光景を、一行が目にしたのは、二度ほどあった。

（まさか、獣神『サンダガー』！？）

プーの目の前で、マリスの身体は、金色の光に包まれたかと思うと、巨大化が始ま

った！

「な、なんだ！？」

ゴーレムの肩の上で、プーが驚いていた。

マリスを掴んでいたゴーレムの指が、どれもみしみしと軋みを立てると、

大きな罅が入っていったのだった。

ばごほぼふあおっ！

「ぎゃーっ！」

ゴーレムの手が崩れる音と、プーの叫び声は、殆ど同時だった。

金色の光は、ますます巨大化していき、ゴーレムと同じ位の大きさにまでなっていった。

そして、その金色の光の塊は、ヒトのような形へと変貌していったのだった。

「ふはははは！ お久しぶりだぜーっ！」

聞き覚えのある声が、響き渡る。

金色にたなびく長髪、白い彫刻のような整った顔立ち、全身を金色の鎧に包まれた

美しくもあるが、邪悪でもある姿形　それはまさしく、『彼』以外の何者でもなかった。

「今まで退屈で、しょーがなかったぜ！ マリスは死にかけるしよー。俺様の出番も

もうおしまいなのかと思ったら、つまんなくなっつて、ついフテ寝しちゃったぜー！」

彼は、皆が呆気に取られていても気にせず、大声で笑った。

「あああ……！　何者なんだ、こいつは！？　金色の……しかも、喋るゴーレムなんか見たことないぞ！」

事態がよくわかっていない哀れなプーは、それ以上、目を開けないほど見開き、

足はゴーレムの肩の上を落ち着きなく歩き回っていた。完全に混乱している。

サンダガーは、それへ、ちらつと目を向けた。

「ほほう、俺様のことがわかっていない人間がまだいたとはな。それじゃあ、自己

紹介してやるぜー！ 何を隠そう、俺様はゴールド・メタルビーストの化身、獣神

『サンダガー』様だーっ！ 恐れ入ったかー！ ゴーレムなんかと一緒にすんなよお

ー！ はーっはっはっは！」

サンダガーは、五月蠅うるせかった。両手を腰に当て、下界に出て来られるのが

嬉しいとでもいったように、いつでも高飛車な笑い声を立てている。「獣神『サンダガー』だと！？ そのような邪神がなぜこんなところに！？」

プーには、理解不可能であった。まだ気が動転しているらしく、頭を片方の手で

押さえ、思いつきり見開いた目はサンダガーに釘付けだった。

（それにしても、自分の主人は悪い魔道士だっていうのに、それは棚に上げた発言だよな）

ケインは、ちらつと思った。

「今日の獲物は、ゴーレムと壊れたトカゲか。まあ、いっか。二つもあるんだからな。

ふっふっふっ……」

サンダガーは、腕を組んで、ゴーレムとサラマンダーの二体を物色するように眺め降ろしていた。

「よしっ！ ゴーレムはぶっ壊すとして、トカゲは焼いて食おう！
」
ぽんと手を打って、彼は言った。

（言うことまで、マリスにそっくりだ！）

一行の皆は、そう思った。

「よし、それじゃあ、いくぜー！ 木偶人形めー！」

嬉しそうに笑いながら、サンダガーは片方の拳を振り上げた！

その直前に、ヴァルドリューズが一瞬でケインのところへ現れ、
次の瞬間、彼ら

一行は同じところに集められていた。ヴァルドリューズの張った結
界の中へ。

巨大ゴーレムは、サンダガーの拳を、砕けた方の手とともに両手
で、受け止めよう

と突き出すのが、勢いのいい拳をまともに受け、両方の腕は肩まで罅
が入っていくと、

ガラガラと崩れ落ちていってしまったのだった。

「うわああーっ！」

プーが、ふわっと宙に浮かんだ。粉々になったかけらは、復活す
ることはなかった。

「な、なんとということだ……！ こんなことは聞いたことはない！

『水』を使わず

して、ゴーレムを、たったの一撃であそこまで……！」

プーは、あわあわ言っていた。

「だから、俺様は『神』だって言ってるだろー？ 所詮ヒトが作っ
たモンなんか、

神に敵うわけないのさー！」

サンダガーは舌舐めずりすると、同じ拳でゴーレムの中心を殴り
つけた。

黒い巨体は、あっけなく、石ころとなってドサドサ砂の上に転が
っていった。

「あああ……なんてことだあ！　これは一大事！　今すぐ大魔道士様に、ご報告せねば……！」

プーは、忠実にも、蒼い大魔道士のもとへ知らせようと消えていったのだった。

「ふっ、弱者は逃げ足が速いもの」

サンダガーは、兜からはみ出た金髪をかき揚げ、ふっと笑った。

「次は貴様の番だぜ、トカゲー！」

言うと同時に、それまで警戒するようにサンダガーを伺っていた巨大サラマンダー

に向かい、彼は掌を向け、大きな炎の球を出したのだった。

げきやぴっ！

サラマンダーは、瞬く間に炎に包まれ、奇妙な叫び声を上げながら、悶えて、跳ね上がった。

「よく焼かないとな。デリケートな俺様の胃でも、ちゃんと受け付けるようにな」

サンダガーは、ぶつぶつ独り言をいながら、炎の中に手を突っ込み、大トカゲを

裏返ししたりしていた。

炎に触れても、彼は平気であった。

一行にとっては、自分と同じ位の大きさのサラマンダーを喰らうとは、度肝を抜か

れたが、呆れてしまうほどでもあった。

「なんか、マリスに似てないか？」

カイルが、ぼそつと言い、クレアも、ケインも頷く。

いつの間にか、結界の中に現れたミュミュは、結界の『壁』に、ペタツと張り付き、

その様子を、物欲しそうな顔で見つめる。一見して、腹が減っているようだった。

突然、ヴァルドリユーズが顔を上げる。

「どうしたんだよ？ いきなり、びっくりするじゃないか」

カイルもクレア、ケインも、ヴァルドリユーズを見上げる。

ヴァルドリユーズは、結界の壁へ近付き、遠くを見据えるようにして外を見る。

サンダガーは、胡座あぐらをかいて、座り込み、嬉々として、少し縮んでしまっ

たサラマンダーの肉に、かぶりついた。

間もなく、一行を覆っていた結界が、急に解かれた。

「どうしたんだよ、ヴァル。いつもサンダガーが退場するまで、結界を解かないじゃないか」

ケインは、ヴァルドリユーズの様子から、不安げな表情を浮かべていた。

「何か、地鳴りのような音が聞こえた気がした。……やはり、今も聞こえる……！」

彼に続き、クレアも頷いた。

「そう言えば、なんとなく、聞こえるような……？」

ケインとカイルも、顔を見合わせ、再び、ヴァルドリユーズを見ると、いつもと

様子が違うのがわかる。

彼の碧眼には、深刻な色が浮かんでいたのだった。

「……次元の穴の謎がわかった……！」

「えっ？ ああ、あの巨大サラマンダーが出て来たところか？」

ケインの問いかけには頷きもせず、彼は進み出て、珍しく、声を張り上げた。

「マリス、戻れ！ そこは危険だ！」

彼は、サンダガー　マリスに向かって、そう叫んでいた。

たちまち、サンダガーの身体は、下から白い煙に包まれる。

「うわあっ！ 何すんだよー！」

サンダガーが泣きそうな声で喚わめいた。

「いいから、早く戻るのよ」

マリスの意志の声も、どこからともなく聞こえる。

「いやだーっ！ まだ食いかけじゃねーか！」

それでも、サンダガーは、トカゲにかじりついていた。

「マリス、早く戻るのだ！」

いつになく、ヴァルドリューズの真剣な様子に、一行が不思議に思っていると、

ずじじじじじじ……！

地響きと共に、サンダガーの足元の砂が、一気に崩れ去った。

それと同時に、ヴァルドリューズの姿が消えた。

「なんだ！？ また砂地獄か！？ 」カイルが叫ぶ。

「違うわ！ あれは……！」

クレアが言いかけた時だった。

サンダガーが白い煙に巻かれたまま、絶叫し、地割れの中に、沈んでいった。

「マリスー！ ヴァルー！」

ケインたちが叫び続けている間も、地割れは更に広がっていき、一行のいる場所に

まで及んで来たのだった。

「うわあーっ！」

一行もダグラも、砂の中に出て来た地割れへと、吸い込まれていくようにして、墮ち

ていった！

獣神の暴走！？

ぼたっ……ぼたっ……

どのくらいの間が、経っただろうか。

頬に当たる冷たい滴で目が覚め、ゆっくりと瞼を開いていく。

周りは、薄暗かった。

特に打った様子はなく、怪我もないようだとなると、ケインはゆっくりと身体を

起こす。

「……ここは！」

ガバツと跳ね上がると、目の前には石造りの建物が、ずらりと並んでいたのだった。

「確かに、あの時、砂漠に出来た地割れの中に落ちて行ったはずだけど、まさか、

ここは、あの砂漠の地下！？」

周りを見渡すと、少し離れたところにある、ピンク色の布が目にと留まる。

「クレア！」

ケインがクレアのところへ駆け寄ろうとすると、何か薄い膜のようなものに当たっ

た。弾力性があり、押したり、引きちぎろうとしても破れそうになり。

「クレア！ クレア！」

ケインの呼びかけが届いたのか、ピンクの服の少女は起き上がった。

「……ケイン？」

「良かった、無事だったか」

「ええ、ケインも」

駆け寄ったクレアの声は、膜のせいかわいらしく聞こえて聞

こえる。

「ここに、変な膜があるらしいんだ。待ってて、今破るから」

クレアに離れるよう合図してから、空間さえも切り裂けるバスターブレードに、

ケインが手をかけようとするが、次の瞬間、彼の顔から血の気が引いた。

「なんか背中が軽いつつあったら……！」

そこに、剣はなかった。認めたくはなかったが、どうやら、バスターブレードを

落としてしまったようだ、彼は悟った。

慌てて周囲を探すが、それらしいものは見当たらない。

視線を腰に移し、マスターソードは無事であることがわかり、ほつとする。

(だけど、バスターブレードが……レオンの形見の剣が……！)

茫然と立ち尽くしているケインを、膜の向こう側から、クレアが心配そうな顔で見ている。

見ている。

思い直したケインは、マスターソードを抜くと、膜の壁に斬りつけた。剣は、あっ

さり膜を貫通した。

「他の皆は？」

「私が見たところ、他に誰もいなかったわ」

落胆した様子で、クレアは言った。

「俺、どこかにバスターブレードを落として来ちゃったみたいなんだ」

「ケインも！？ 私も、ヴァルドリユーズさんから頂いた魔道書がなくなってるの」

二人の間には、心細い沈黙が生まれていた。

「……とにかく、剣や魔道書もだけど、皆のことを探そう」

「ええ」

ケインのいる場所は、石がごろごろと転がっており、行き止まりであったので、

クレアのいる側へと、膜を通り抜けた。

クレアの手のひらに、小さな光の球が浮かぶ。それを頼りに、白い煉瓦れんがの

ような石造りの町の中へと、進んで行く。

「こんなところに町があるなんて……」

おそろおそろ、辺りを伺いながら歩く二人は、近付くにつれ、建物に見えたものは

ただの壁であったこと、町全体が迷路のように入り組んだ作りになっていることが、

わかってきた。今のところ、家らしいものには、出くわさずであった。

「ヒトは住んでいないのかしら？」

心細そうな声で、クレアが呟いた。

天井を見上げてみても空ではない、星のない闇が広がるばかりだ。日もないため、

辺りは薄暗いが、クレアの魔法の光球が白い石の壁に反射し、またそれらの石材が

わずかに発光しているようで、うっすらと青白い光であったが、町の中は、多少は

様子がわかった。

「ヴァルは、いそつか？」

「それが、この場所は、魔力を察知しにくいみたいなの」

思わず、ケインの足が止まり、改めて、クレアを見直す。

「今までいた砂漠みたいに、……いいえ、なんだかそれ以上に、魔力を妨害している

何かが、強くなっているみたいなの」

「魔力を妨害する何か……？ とにかく、得体の知れない場所らし

いな。今のところ、住民とか生き物とかには出会ってないけど、ここは、俺たちにとって安全な場所とは言い切れない。早く皆と剣、魔道書を見つけて、ここから脱出する方法も探さないと」

「そ、そうね」

ますます心細そうな声で、クレアは頷いた。

「マリスー！ ヴァルー！ カイルー！ ミュミュー！」

ケインが呼びかけるが、反応はない。二人は、仲間の名前を呼びながら、いくつかの角を曲がる。

そのうちに、とうとう町の出口と思われる門を出ていた。

そこには、不思議なことに草も生え、木まで立っていたのだった。

「こんな日の当たらない場所に、草木が……？」

ケインが辺りを見回していると、クレアが、ある木の影を指さした。

「……誰がいるわ！」

ケインも見してみると、確かに、ヒトが座り、背中を丸めているような影が見えたのだった。それも、鎧を着ているようで、暗闇の中でも、光球に反射し、背中が光っている。

「マリスは甲冑着てなかったし……、もしかして、ここの住民かな？」

ケインがクレアを振り返ると、クレアも頷く。二人は、ゆっくりと、その人間に近付いていった。

「すいません、ちょっと、お聞きしたいんですが……」

草むらを踏みしめ、声をかけながら近付くが、その人間は、なかなか振り向かない。

かなり近付き、二人は、その者のすぐ後ろにまで来ると、どうやら、夢中で何かを

食べているようで、物を飲み込む音が聞こえてくる。

その後ろ姿を見ているうちに、どこか奇妙な感じがする。

やはり、甲冑を着ていて、兜からは長い髪が、背中に垂れている。

そして、最も

奇妙なのは、尾が生えていることだった。

「人間じゃなさそうだけど、ここの住民かな？」

ケインが小さな声で言うと、クレアも、どうしていいかわからない顔で、曖昧に

頷いた。

身体の大きさは、ケインと大して変わらないように見えた。この世界に住む種族で

も、言葉を通じるものか不安はあったが、思い切って、ケインは問いかけてみた。

「あのー、すみません。ここのヒトですか？」

「俺のことか？」

そう男の声が返ってきた。彼は、両手に何かを抱えたまま、むしやむしや言いながら、くるつと振り向く。

「良かった！ 言葉は通じるみたいだ！ ……ん！？」

ケインもクレアも、思わず目を見開き、まじまじと、その男の顔を覗き込んでいた。

よく見ると、彼は金色の甲冑に身を包み、髪も金髪フロンド、男の割に綺麗な

整った顔をしているが、目付きは悪い。明らかに、二人の知っている顔であった。

しかも、つい先に見たばかりの。

「……サ、サンダガー！？」

ケインとクレアは同時に叫ぶと、後退っていた！
時間が止まってしまったかのように思えた二人であった。

「サンダガー……いや、マリスなのか？」

ケインが思い切って尋ねる、というよりも、無意識のうちに言葉が口から出ていた。

「はっはっはっはっ！」

獣神がいきなり豪快に笑い出したので、二人はビクツと、再び後退った。

「俺はマリスじゃねえ。真正銘のサンダガー様だ！」

それだけ言うと、彼はまた両手に持った肉にかぶりついた。

（それは、もしかして、あの時食ってた、巨大サラマンダーの……？）

ケインは目を丸くした。

「あの、ここは一体、なんなのでしょう？」

クレアが、ケインの背に隠れながらも、おそろおそろ問いかけた。

「どっかの国みてえだな、それも相当古く、寂さびれてる。大昔に滅亡して、砂漠

ん中にも埋まっちゃまった国なんじゃねえの？」

興味のなさそうにいい加減な口調で答えると、骨までも食べ尽くしてから、立ち

上がった。一八〇センチ以上ある長身のケインと同じくらいの背丈であった。

「だが、その割には、その辺の石には魔力が宿ってるんだか、発光してんのはその

せいだ。ここも、微妙に魔空間に近い。その光の球を消してみな」

言われて、クレアは光球をしぼませた。

淀んだ月明かりにでも照らされたような、ぼんやりとした青白い光ではあったが、

瓦礫のような石からは、僅かに発光していた。

「……それで、その、……マリスは、一体どこに？」
「さあな」

ケインの質問に、彼は、あっさりと答えた。

「マリスの身体から押し返されて分離した俺様は、仕方なく、自分の住処すみかへ

帰ろうとしたんだが、その時には、既に、『ここ』に来てたんだよ。おかげで、やつと自由の身だぜ！」

サンダガーが自由の身とは、もしかしたら、それは、とんでもないことなのでは……

……！ と、顔を見合わせたケインとクレアの表情は、緊張を帯びていく。

「ふん、マリスのダチどもか」

サンダガーは両手を腰に当て、二人をじろじろと眺め回した。その威圧的な雰囲気

は、巨大化している時と何も変わらない。

「特に、お前」

サンダガーは、ケインに指を突き出した。

「お前は、どうも気に食わねえ。いずれ、俺様に楯突たてつくような気がする」

「なんだって！？ 俺がマリスに……？」

「マリスにじゃねえ！ いや、そうかも知れねえが、俺様にだ

！」

ケインにもクレアにも、どういうことなのか見当も付かない。

「かといって、今のうちに潰しとくってほどもねえけどな。マスターソードも、

まだまだたいしたことねえし」

サンダガーは、ケインを見下すように見て、にやつと笑った。

ケインの背筋が、ぞくつとした。獣神がその気になれば、人間な

ど一瞬で と

考えると、脂汗が流れる。

「だが、今のところ、お前はマリスの役に立ってるみてえだからな。俺様が付いた

おかげで、あいつもストレス溜まってるから、それを発散してやれば、俺様も、

少しは助かるからな」

「……？」

訳がわからないといった風に、ケインとクレアは、またもや顔を見合わせるが、

獣神は構わず、ふふんと鼻で笑った。

「マリスもヴァルドリユーズのアホも、まだ気付いてはいないが、俺様の計画は着々と進んでるってわけよ！」

サンダガーは、笑い声を上げた。

「まあ、あのヴァルドリユーズさんを、アホ呼ばわりするなんて！」

「

クレアが信じられないという顔になる。

「ちよつと待て。なんなんだ、その計画って？」

「なあに、ほんのささやかなもんよ」

聞き捨てならないといったケインに、サンダガーは、にやにや笑いながら、肩を

竦めてみせた。

「ウソだろ？ ささやかなもんとか言いながら、実は、世界征服とか考えてるんじゃないや

……！？」

「ウソなもんか。神はウソつかないぜ？」

けるつとした顔で弁明する神を、ケインは横目で睨む。

「だいたい、あなたは、何の神様なんですか？」

ケインの後ろから、クレアが震える声で尋ねる。

「五人の獣神のうちひとり、雷獣神のサンダガー様だ。うーんと……、そうだな、強^しいて言えば、勝利の神かなー？ まあ、戦いにおいては無敵の神ってことさ。」

雷の術なんか得意だぜー！ 後はな、そうだなあ……」

（……それ、今考えてないか？）
にこにこ得意顔のサンダガーに、目を丸くするケインは、どうも『神』と話しているような気がしなかった。

「とにかく小僧ども！ 俺様は、せつかく自由になつたんだ。てめえらの話に付き合ってるヒマはねえ。腹も膨れたことだし、いっちょ地上で暴れるとするか！

あばよっ！」

「なっ、なんだって！？」
いきなりサンダガーは物凄い勢いで、土埃^{つちほこい}を巻き上げ、飛び上がった。

それだけの動作でも、かなりの風圧が起こり、木は揺らぎ、草は抜けてはらはら散っている。

「はーっはっはっは！」

サンダガーの笑い声だけが、暗闇の空に響いていた。

「ケイン！ サンダガーは、マリスを離れた今、人間界で暴走するつもりなんじゃ

……！？」

立っているのもやっとの暴風の中、クレアがケインにしがみついで、声を張り上げた。ケインも、彼女が飛ばされないようしっかりと抱きかかえ、獣神の消えた天空を、睨むようにキッと見上げた。

「制御出来る者が地上にいない今、サンダガーに暴走されたら、世界は一体……！？

「魔物から世界を救う為に使おうとしている召喚魔法『サンダガー』が、今まさに、

世界を滅亡の危機へと、追い込もうとしているなんて！」

「禁呪は、やっぱり、こうしたことが予想された、使ってはならない技だったんだ！」

「ケインがどうしようもなさに、ぎゅっと目をつぶり、口を引き結ぶ。」

「クレアも、顔を覆った。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

時空の歪（ひず）み

「ああ！ 一体いつになったら地上に出られるのかしら！ 皆も、ちゃんと無事なのかしら？」

バスターブレードとチャール・ダパゴの魔道書を無くしたケインとクレアは、仲間を探し、砂漠の地下を歩く。

もと来た迷路のような白い壁や、サンダガーと出会った草むらなど、再び隈無く探すが、誰も見つけることは出来なかった。そんな最中に発せられた、クレアの嘆きであつた。

「なんて悲惨な境遇なの！？ この世は、本当は神など存在していないのではないかしら！？」

「だから、ここにいるって言うてんだろー！」
マリスから分離したヒトサイズのサンダガーが、面白くなさそうな声を出す。

異次元の自分の居場所に戻り損ない、地上で暴走を目論み、失敗した彼が、ケインたちと行動を共にしているのを、ケインは不思議に思っていた。

クレアが、キッと、サンダガーを睨みつける。

「あなたのような、野蛮な獣神のことじゃありません。ヒトの拝む尊いお方のことを言っているんです。それとも、邪神は存在するというのに、人々を導いてくれる聖なる神は、いらっしやらなかつたというのかしら？ そんなの、あんまりだわ！ それ

なら、ヒトは一体、何を心の支えにして生きていけばいいというの！？」

クレアは、天を仰いで、今にも泣き出しそうだった。今の獣神にはたいしたことが

出来ないとわかってからのクレアの態度は、一変していた。

「ぎゃあぎゃああつるせえ女だなあ！　こんなことで、いちいち泣き言いうんじゃねえ

よ

「あなたって人は　！」

言いかけて、彼女は、ふらふらとその場に崩れるようにして、座り込んだ。

「大丈夫か、クレア。薬は？」　ケインが、彼女の側に屈む。

「全部落としちゃったみたいなの」

砂漠病の一種である、貧血に似た症状の病気は、一日で完治はしなかった。

彼女の顔色は、徐々に青ざめていき、色白であったのが、一層白くなってしまうている。

「早く、ヴァルか、ミュミュでもいいから探さない」と

「しょうがねえな。ほらよ」

クレアの前で、サンダガーが背を向けたまま、腰を屈めた。

「結構よ！　あなたの手なんか借りなくなつて　！」

先よりも弱々しい声で彼女が言いかけるのを、ケインが打ち切つた。

「そんなこと言わないで、ここは、彼の言う通りにした方が、クレアのためだと思う

よ

つり上がった目尻を元に戻す。

「……ケインがそう言うなら……」

クレアは、渋々サンダガーの背に乗った。

(サンダガー、意外にいいヤツなのかも知れない)
感心しながら、ケインは獣神の隣に並び、草むらの中を歩き続けた。

「まずは、ヴァルドリューズのヤツを見つけないとな」

そのサンダガーの声に、クレアが嬉しそうに面を輝かせる。

「あの野郎縛り上げて、俺様にかけて術を解かせなくちゃなんねえ」
忌々(いまいま)しそうに言うサンダガーを見て、二人は、彼がなぜ自分たちと行動

していたのかを理解した。

「神様でも術を解けないなんて??ヴァルドリューズさんで、よほどすごいのね！」

クレアが嬉しそうな声を上げた。

「そうじゃねえよ。ここの空間がおかしいんだよ。俺が元通りになれば、こんなところ

る早く抜け出せるんだがな。ヤツは、俺が『そのもの』に戻る前に術をかけやがった

のよ。まったく面白くもねえ！」

サンダガーは、ブツクサと続けた。

「だいたい、あいつは人間のくせして、生意気なんだよ。妙な術ばかり編み出しやが

つて……！ 魔神『グルーヌ・ルー』とグルになって、素直な俺様をハメやがるんだ」

ケインは、密かに笑いをこらえていた。

(神とは言っても、獣神は動物に近く、あまり小ズルイことは出来ないのかも。ある

意味、自分で言うように、素直なのかも知れない)

「やはり、ヴァルドリューズさんは、すごい方なんだわ！ あの方から魔術を習える

なんて、本当に光栄なことだわ！」

サンダガーの背の上で、クレアは顔を綻ほころばせていた。

「お前、ヴァルドリユーズの女か？」
平然と、サンダガーが言った。

神にしては、俗っぽい発言だとケインが思っていると、クレアの顔が上気していき、

「またもや目尻が上がっていった。」

「な、なんて品のない……！ あなた、それでも神様ですか！？ 信じられないわ！」

「あいつ、意外とモテるみたいだな。あんなんでも、実は、結構スケコマシだったり

してな。お前も、魔道以外にも教わってること、あるんじゃないの？」

サンダガーがゲラゲラ笑い出す。

ケインは、ハラハラしながら、二人を見る。

「ひどいわ！ なんてこと言うのよ！ あの人は、そんな人じゃないわ！ この邪神

(ケダモノ)！ 降ろしてちょうだい！」

サンダガーの背で、クレアが暴れ出した。カイルにからかわれても、ここまで彼女

が怒ったのは、ケインは見たことがない。

「なんだよ、冗談も通じねえのかよ。お固い女だな。そんなんじゃないぞ」

「おつ、大きなお世話ですつ！ あ、あなたみたいなケダモノ獣神になんか、おぶつ

てもらうんじゃないわ！ 今すぐ降ろしてよ！」

本心なのか、からかっているだけなのか、彼の言うことは、彼女を怒らせるばかり

であった。

無理矢理背から降りたクレアは、崩れるように座り込む。

「大丈夫か？」

「え、ええ」

クレアはケインに答えると、額に手を当て、乱れた呼吸を落ち着かせようとする。

獣神は腕を組み、そっぽを向いていた。

「なんだか、さっきよりも具合が悪くなってるみたい……。巫女の名残かしら？」

邪なものに長い間触れているのは、身体が耐えられないみたい」

「なんだと、このアマ！ 俺様は邪神じゃねえ！ 失礼な！」

「ここから別の次元になってるみてえだな」

どのくらい歩いたか、三人には見当もつかなかったが、進んで行くうちに、あたり

は岩山のような景色になっていた。

岩の間から覗く、奇妙な、はつきりとしらない、まるで水溜りが縦に出来たような

ものが、どうも時空の歪みらしいことがわかる。

「やたら通り抜けない方がいいだろう」

珍しく、サンダガーの口調は真面目だった。

「他を探すぞ」

さつさと違う方向へと進みかける彼の背に、クレアが弱々しく声をかける。

「そこにヴァルドリューズさんたちが紛れ込んでしまったということとは、ない

かしら？」

体調のよくならない彼女には、ケインが肩を貸していた。

「……かも知れねえが、今、俺たちはここを通るべきではない、そんな気がする」

能力もヒトサイズになってしまったと嘆いていたサンダガーではあつたが、神らし

い感覚はあるようだ。

「可能性があるのなら、探した方がいいのではないかしら？」
「やたら、生身の人間が空間を越えるもんじゃねえ。身体にはたいしたことはねえが、
精神にダメージを受けるぞ。今の俺は、お前らのために、いちいち結界を張ってやる
ようなことはできねえんだからな」

慎重な面持ちでそう言うと、獣神は、そこを離れた。

「だったら、自分が行って、ちょっと見て来てくれればいいじゃないの、ねえ？」

クレアが、ケインに耳打ちする。

辺りには、特に目印になるようなものはなく、風もなにもない薄暗い空間をひたすら歩き続ける。

「ここもか。……一体、なんだって、『ここ』は、こんなに時空が入り組んでやがるんだ？」

岩の間の妙なうねり　縦になった水溜りを再び発見したサンダガーが、舌打ちする。

その奥も、同じようにうねっている『水溜りの膜』が何重にも重なっているらしく、眺めているだけで、目の感覚が狂いそうだ。

その時、後ろから何かの気配が感じられた。

三人が振り向くと、そこには、いつの間にか現れた、ヒトほどもある巨大な茶色いムシが一匹いたのだった。

ムシは、背から羽を生やし、大きな逆三角の頭部には、触角が、長いものと短いもの

のと二本ずつ生え、大きな丸い赤い目が不気味に輝いていた。

しゃあっ！　と開いた口からは、牙が見える。細長い胴からは、

両脇に足が五、六

本ずつ生え、特に前の左右四本には鋭く長い爪が見られた。

ムシは、それを彼らに向け、威嚇するように伸び上がり、振り上げた！

「ミドル・モンスターか。へっ！　こんなヤツ、俺様の敵ではないわ」

サンダガーがにやつと笑い、手を組んでボキボキ言わせながら、一歩前進した時、

「きゃああああ！　いやーっ！　」
「ぼわーっ！　」

「うわあああ！　」
クレアの放った強風に、モンスター、ケイン、サンダガーまでもが吹き飛ばされた。

だが、威力は、普段の彼女に比べて、落ち込んでいただろう。

「このヘタクソ！　どこに向けて打ってやがんだ！　」

サンダガーが立ち上がり、怒鳴ったと同時に、クレアは、へなへなどその場に倒れた。

「ちっ！　俺様としたことが？？！　油断したぜ！　」

自らの背で、ざざざーっとなぐらを削り取っていった跡から目を反らし、サンダガ

ーは、少しだけ羞恥心に顔を赤らめながらも、よろよろと起き上がったムシに、手のひらを向けた。

発射された小さな炎がムシに到達し、ムシ全体を火達磨ひだるまにして、消滅さ

せたのは、あっという間だった。

「クレア！　」倒れた彼女をケインが揺さぶる。

「寝かせておけ。その方が回復するだろう」

ケインはクレアを背負うと、獣神が歩き出す後ろについていく。

「うるせえ女が眠ってくれたおかげで、助かったぜ！」
伸びをしながら、彼は悪ぶって言った。

進んで行くと、草むらに、焼け焦げたような跡がいくつか見える。
「これは、モンスターを殺^やった跡だ」

地面をじつと見下ろしていたサンダガーが、何を思ったか、突然走り出す。クレアを背負ったケインも、後を追う。

「ヴァルドリユーズ！」

サンダガーが立ち止まった前には、長身の黒マント姿が見える。
彼らの探していたうちの一人、ヴァルドリユーズであった。

彼は、ゆっくり振り返ると、驚くこともなく、いつもの静かな眼を、獣神に向けた。

「おい、てめえ！ 俺様をこんなにしやがって！ ヒト並みの術しか使えねえもんだから、いろいろと恥かいちゃったじゃねえか！」

赤面したサンダガーが、威勢良く文句を言った。

「……では、あの呪文は成功したのだな」

ヴァルドリユーズの方は、それでも冷静だ。

「ヴァル、クレアをなんとかしてやってくれないか？ 薬を落としちゃって」

ヴァルドリユーズは、ケインと、背で眠っているクレアとを見つめた。

「そんな女、眠らしときゃいいんだ！ うるせーたら、ありやしねえ！ 邪神邪神」

て、ヒトのこと何だと思ってやがんだ」

横では、サンダガーがぶーぶー言う。

「悪いが、私の魔力も通常の半分ほどに減っているのだ。彼女は特殊な病気のため、

体力を復活させても、またすぐに減ってしまう。ここは、サンダガ

「の言う通り、

眠らせたままにしておいた方がいいだろう」

「そんなことよりもさー、早く俺様のことを、もとに戻せよー！

俺様の、神様とし

てのプライドは、もうズタズタだぜー！」

サンダガーは、まるでだだっ子のように、ヴァルドリュースの周りを、うろつろし

ながら抗議していた。

ヴァルドリュースの碧眼は、一見いつもと変わらず穏やかではあったが、どこか

おかしさを堪こたえているようでもある。

「言った通り、私の魔力も半減しているのだ。悪いが、あなたをもとに戻すことは

できない」

「ウソだろ……？」

「本当だ」

「……………わーっ！」

放心していたサンダガーは、しゃがんで頭を抱えこむ。

「それじゃあ、俺様は、いつ、もとに戻れるんだよー！ こんなひどい話がある

か！？ 貴様ら、俺に一体何のウラミがあるってんだー！」

彼には、既に、神の威厳などというものは存在していなかった。

「ところで、他のみんなを見かけなかったか？」

ケインの質問に、ヴァルドリュースは、静かに首を横に振る。

「マリスは？」

「今探している」

そう答えると、ヴァルドリュースは彼らに背を向けて、歩き出した。クレアを背負

ったまま、ケインも歩き出すが、側でしゃがみこんでいる獣神を見下ろした。

「ほら、探しに行こう。あなたは、マリスの守護神なんでしょう？」
「
そう言っつて、ケインはサンダガーの腕を引っ張り上げた。

「誰かが通った跡がある」

ヴァルドリユーズは、『それ』に触れもせずに調べたところだった。

「なんだ、ここの時空の歪みひずみは？ さっきまで見て来たのと、ちょっと違う

みたいだな」

岩の間に来た、大きな薄い膜を前にして、ヴァルドリユーズとケイン、眠って

回復したクレア、サンダガーは立ち止まっている。

その『時空の膜』だけは、他のものと違い、水溜りの向こう側の景色が、揺らめきながらも見える。

「なんだか、さっき通った砂漠にも似てるけど、……なんか違うよ
うな？」

ケインの言う通り、その景色とは、彼らを通ってきた砂漠とよく似ていた。

立っている樹木と、ところどころに生えている植物は似ていても、違うものであり、
岩も、まったく違う鉱物だ。

砂漠のようには見えたが、砂漠では赤茶色をしていた砂の地面が、膜の向こうでは、

石が細かくなつたような、粗い灰色で、砂丘といった方が近い。荒れ地に砂が溜まっ

ているようなところも見える。

「なんでえ、ありゃあ、ベアトリクスの辺境じゃねえか」

ケインの右肩から顔を覗かせて、サンダガーが言った。

「ベアトリクスですって……！？」

クレアが、サンダガーと、仲間を見回す。

ヴアルドリューズは黙ったままだ。

「どうして、こんなところに、そんな離れた国の辺境なんか見えるのかしら？」

「だから、『ここは、そういうところ』なんだ。空間がよじれて、合わさって、乱れて

る！ 世界中の自然の森 特に、辺境みたいな得体の知れない場所と、つながって

んだ。

お前たちの辿ってきたモルデラの山や、アストーレの北の山なんかにあつた次元の

穴は、それぞれ独立して沸いたものだったが、ここは違う。次元の穴すら、こういう

歪みに左右されてんだ。ある時は砂漠の上に、またある時は地下にそれも、しょ

つちゆう位置が移動しているらしい、すげえ不安定な状態なんだぜ」
獣神の静かな口調には、真実味を帯びていた。

「……誰がいる」

ヴアルドリューズの静かな声に、彼らは、さっと緊張して、時空の膜を覗き込んだ。

砂埃すずはこの奥には、黒い、ひとつの影がある。

砂が風に巻き上げられていくと、それが、全身を黒いマントに包んだ、痩せた男で

あるのがわかった。

顔は、フードに覆われていて、彼らからは見えなかったが、その男の手には、見覚

えのある大剣が握られていたのだった。

「それを、返してもらいましょうか？」

聞き覚えのある声とともに、膜に映った左側から、赤い衣装に身を包んだ、独りの女が現れた。

「……マリス！」

ケインとクレアが、同時に叫んだ。

まさしくマリスであったが、二人の声は届いていないのか、膜に映った二つの人影は、反応しなかった。

「これは、これは　！　まさか、このようなところで、お遭いするとは、思いも

よりませんでした。これは、盲点をつかれましたな、マリス殿」

ゆっくりとマリスの方へ首を回し、その一見して魔道士とわかるマントの男が、

平坦な声で告げた。

声の様子からすると、それほど年齢は離れていないようだ。

「私だって、戻ってくるつもりはなかったわ。だけど、ちよっと落とし物しちゃった

から、取りに来たのよ」

「それが、この剣なわけですか？」

ケインの背に緊張が走る。

その魔道士が持ち上げて、彼女に見せた剣は、紛れも無く、バスターブレードであつたのだ。

「それさえ返してもらえば、用はないわ。おとなしく帰るから、剣をこっちに、ちよ

うだい」

マリスが、手を差し伸べた。

男との間には、互いの顔がはっきり見える程度ではあるが、いつ戦闘が始まって、

攻撃を避けられるほどの距離はあり、それは、決して、二人が友好関係などでは

なく、実力がわかった上での警戒なのだというのを、充分に感じさせる。

「……さて、どうしたものでしょう」

魔道士の男は、フードの頭を傾げた。マリスも黙って、彼を見つめる。

「見たところ、この国の剣ではないようですが、これを、あなたは、どうされたのです？」

魔道士は、大きく、重厚な剣の先を地面に立て、上から下まで眺め回す。

「もらったのよ」

「あげてないぞ」と、心の中で反論しながら、ケインはそのまま状況を見守る。

「本当に、これは、あなたのものなのですか？ 私には、なんとなく、違う方のもののように、思えるんですけれども？」

男の声は、からかうような響きをはらんでいた。

「この剣は、後で私が持ち主に返しておくとしても、あなたを見逃すというのは、

ちよつと いや、大分、もったいないですねえ。そうは思いませんか？」

男は、にたりと笑っているような声で言った。

マリスは表情を変えずに、男を見ている。

「あなたを、女王陛下に突き出す、そうすれば、宮廷での私の株も上がりますしねえ。」

それどころか、私は、国を挙げての英雄にまでなってしまいかも知れませんよ！

反対に、そんなチャンスをみすみす逃してしまえば、怒られるだけでなく、たちまち謀反人扱いです。そんなのは、まっぴらごめんです」

「女王への反逆罪で追われてるあたしには、『謀反人』なんていうと、仲間意識が

湧いてきちゃうけど？」

マリスも、不適な笑顔で返す。

「マリスが、ベアトリクス女王へ、反逆　！？　」

無意識に繰り返したクレアが、驚いて、口に手を持っていく。

ケインの目が細められ、一層、二人のやり取りに注目する。

膜の向こうの二人は、しばらく、そのまま動かなかった。

それを見守る膜の外の四人の中でも、身動きするものはいない。

「この剣は返さない　と言ったら、どうします？」

魔道士が、再び口を開く。

マリスが、キッと、男を睨みつけた。

「ここで、私は、この剣を拾った。誰にも遭わなかった。剣ひとつで、あなたを見逃そうというのです。どうです？　悪い話じゃないでしょう？」

ケインは、思わず身を乗り出していた。

緊張したまま、歪みの向こうの彼女の表情を見つめる。

ベアトリクス of 魔道士

「あんたのような魔道士が、剣を手にしたって、使えっこないじゃない。それに、

その剣は、持ち主以外のものが使うと、回収されることになってるのよ。だから、

無駄だわ」

「おや、それは本当ですか？ 一体、どなたが回収に来るといいうんです？ なんなら、

試してみましようか？」

魔道士は、バスターブレードを、マリスに向かい、両手で低く構えた。

「このあたしに、魔道士風情が、剣で勝てると思うの？」

「あなたの言う通り、持ち主以外のものが使って、本当に剣を取り返しに来るものが

いるかどうか、確かめるですよ」

「バカなマネはやめて！ 確かに、その剣は、あたしのものじゃないわ。だけど、

それを返してもらわなくちゃ、困るのよ。ここで、回収されたりしたら、もう二度と、

取り返すことはできないかも知れないわ。だから、お願い！ やめて！」

マリスは、いつになく必死な表情になっていた。

(俺の剣のために……？)

時空の歪みである膜を覗くケインの心臓は、緊張したまま、高鳴って行く。

「……だったら、私と一緒に、ベアトリクス城へ行きますか？」

男は、剣を降ろすことなく尋ねた。

マリスは、唇を引き結んだ。

「行けば、あなたは反逆罪、女王陛下からの処刑が待っていることでしょう。多分、

あなたは裁判にかけられることなく、一生陛下の奴隷に終わるか、さもなければ……、

死刑でしょう」

クレアが、再び両手を口に当てる。

ケインは、じっと動かさず、目を反らせずにいた。

「……どっちもごめんだわ」

「では、力づくで、剣を取り返してみますか？」

なおも、魔道士は挑発する。

いてもたってもいられなくなったケインは、マスターソードに手をかけた。

「待て！」

サンダガーが、それを制する。

「お前は、あそこへ行くべきじゃない」

「助けなきゃ、マリスを……！！」

剣を抜こうとしたケインの腕を、サンダガーが押さえつける。

「放してくれ、ダメージを受けたって、俺は構わない！ マリスだつて、あっち側に

いるってことは、精神ダメージを受けてるはずだ！」

「あいつは魔力が高いから、多少は守られる！」

常人程度の能力に抑えられた獣神でも、その手をどけることは、人間には不可能

であるのか、剣に手をかけたままの体勢で、ケインは、膜に映るマリスを見ている

しかなかった。

「が、次に何かあれば、サンダガーに止められても、何とかして、無理矢理にでも飛び込むつもりでした。」

「……随分、卑怯な手を考えるものね。あなた、そんなヒトだったかしら？」

「ヒトは変わるものですよ。あなたが失踪して一年以上経つんです。ヒトの心など、変わるには十分な時間です」

バスターブレードを構えたまま、魔道士は、平坦な口調で答えた。「それに、今のあなたは、どういうわけか、あのゴールド・メタル・ビーストがついていないようですね。知っているでしょう？ 私が、ヒトの守護神を感じ取るのに長^たけていることは。」

「剣も何もない上に、守護神まで無くされたあなたを、目の前にしているとは、なんと奇遇なことでしょう！ あなたも、私の实力は、わかっているはずです」

「ええ。王太子セルフィスの側付き魔道士ギルシュさん。その隠された实力は、宮廷魔道士の中でもズバ抜けていたと、記憶してるわ」

（あいつが、セルフィス王子の　！？　）

ケインは、思わず、身を乗り出す。

剣を掴む腕は、サンダガーに掴まれたままだ。

クレアが、ますますはらはらした様子で見守るが、ヴァルドリューズは変わらず、

冷静沈着な瞳で、見据えているだけであった。

しばらくはらみ合いが続いていたが、不適な笑いを浮かべていたマリスが、肩をすくめた。

「どう考えても、そっちの方が有利だわ。お手上げよ」

「ほう、物分りがいいですな」

魔道士は、バスターブレードを降ろした。

「連れていけ」

それを合図に、彼から離れたところの木や岩の間から、黒いフードを被った、痩せた男たちが、次々と現れる。

「汚いぞ……！ あいつ、あんなに部下を連れてたのか」

もかくケインを、やはり獣神が腕一本で抑えつける。

「マリス、逃げて……！！」

クレアが、祈るように両手を組み合わせ、懇願した。

ヴァルドリューズは、身動き一つしない。

マリスの周りを、五人の魔道士たちが取り囲み、今にも近付こうという時だった。

「ぎゃあああああ！」

「ひゃあああああ！」

突然、彼ら魔道士たちの身体は火ダルマになり、その場をのたうち回ると、一瞬にして、跡形も無く消滅していったのだった！

目の前の、信じられない光景には、ケイン、クレアも眼を見張った。

「な、なに？ マリスが何かしたのかしら！？」

「いや、構えは取ってるけど、何かしたようには見えなかった！」
目を凝らして、膜の映し出す映像に見入っている二人に見えているのは、マリスと、
彼女の正面に、ただ独り、王太子側付き魔道士だという男が、立っているだけの光景
だった。

様子が違うのは、バスターブレードの他に、彼の手にはもうひとつ、宝玉テュロの付いた
透明な杖が握られていたことだった。

ケインもクレアも、状況が把握できず、ただ啞然とする。

「やれやれ、やっと、あの小煩いハエどもを、始末できた」

魔道士の口調は、一変して、平坦から表情豊かになっていた。

「お怪我はありませんでしたか？ もう大丈夫ですよ」

魔道士は、すたすたと、マリスに寄っていった。

マリスは、構えていた拳を降ろす。

「……あなた、いいの？ こんなことして」

彼女も、目の前の出来事に多少の驚きは隠せず、いくらか茫然とした表情だ。

「なあに、あいつらは、正規のベアトリクス魔道士団じゃないんですよ。宮廷魔道士

のひとり もう、だいたい見当はついてるんですけどね そいつが、私につけた

見張りなんです。

私も妬まれやすいみたいで、いろいろと、足を引っ張ろうとする輩も多くてね。

この辺境は、よく魔物が出ることは、あなたもご存知でしょう？

そいつが、彼らを

食ったことしておきます。彼らは、ベアトリクスのために、名誉ある殉職をしたの

ですよ」

それまでとは打って変わった親しみやすい口調の魔道士は、滑稽な感じに肩をすくめてみせた。

その動作に、マリスは安心して、ケラケラと笑い出した。

「ああ、もう脅かさないですよ！ほんとに連れてかれちゃうかと思っただから！」

ほっとして笑いすぎたのか、マリスの片方の目尻には、涙が滲んでいた。

「すみませんでしたね。あいつらの手前、仕方がなかったんですよ。これは、お返ししておきますね」

彼は、すんなりと、バスターブレードをマリスに渡した。

剣が戻ってきたのと、彼が敵でなかったことに、ケインとクレアは、ほっとし、全身の力が抜けたのだった。

「ですが、なぜ、またこんなところにいたのです？ 見つけたのが、たまたま私だったからよかったものの、他の奴らだったら、本当に捕らえられていましたよ」

男は、心配そうに言った。

「ちょっと変なところに落っこっちゃって。アストーレから西に行っただけ、時空の歪みひずみみたいな膜があちこちあって、そのうちのひとつに

映ってた岩の間を何気なく覗いたら、なんとなく、故郷の辺境に似てるなーって。

ほら、あたし、辺境警備隊もやってたじゃない？

そしたら、この剣が、そっちに落ちてるのが見えたから、ちよつと躊躇ためらった

んだけど、さーっと行って取ってこようと思ったのよ」

マリスが肩をすくめた。

「そんな危険を犯してまで　よほど、大事な剣だったのですか？
あなたのもので

はないとおっしゃってましたが」

「ええ。友達のなの。その人以外の人間が使うと、本当に巨人族が剣を取り戻しに
来ちゃうんですって」

「本当なの？ ケイン」

振り返ったクレアに、ケインは、映像から目を反らさず、頷いて
みせた。

「それにね、この剣は、その人のお父さんの形見なの。巨人族に取
られちゃうこと

より、形見がなくなっちゃうことの方が、辛いじゃない？」

そう微笑んだマリスの顔を、ケインは目を見開いて見た。

「……あなたは、全然変わってませんね」

黒いマントをなびかせ、魔道士ギルシュは、フードで隠れている
顔を、懐かしそう
に綻ほばせた。

「変わったわよ。もう、ここにいた時のあたしじゃないわ」

「……今でも、旅を続けてるんですか？ 私が聞いた話では、……
『例の方』と組ん

で、召喚獣を呼び出しているとか……？」

「うーん、まあね」

考えながら、マリスは答えた。

「召喚獣じゃねえっ！俺は、神だぞ！」

膜の絵に向かい、サンダガーがわめくが、二人には届いていない。

「……殿下には、会っていかれませんか？」

魔道士の男の瞳が、ふっと和らぐが、声には、慎重な様子がこもっていた。

マリスの肩が、わずかにピクツと反応した。

「……会わないわ。会う資格はないもの」

マリスは、ギルシュから目を背けた。

「セルフィス様は、今でも、あなたのことを……お待ちになっております。あなたが

問われている陛下への反逆罪などは、誤解であることは、見抜いておいでです。私が、

特殊な結界をお張り致しますから、一瞬でも、殿下にお会いになつてはいかがですか？」

驚きを隠せずに、マリスは彼を見上げた。

その紫水晶のような瞳は、驚きだけでなく、微かな期待をも、隠せずにいた。

「なあ、もうそろそろマリスを連れ戻そうぜ。でないと、俺様が付いてないのに、

ベアトリクス城になんか行ったりしたら、どんなヤツが出てくるか

……、あの魔道士

が優秀だつていったってなあ、女王だつて、抜け目ないんだぜ。ちよつとヤバいん

じゃね？」

今の自分の力では、彼女をこちらに連れて戻すことは出来ない

踏んで、サンダガ

ーは、ヴァルドリューズに催促しているのだった。

とあって、ヴァルドリューズにさえ、そこまでのことが出来る魔力が残っているのかも、定かではない。

残る手段は、ケインのマスターソードで、時空の歪みを破るのみだが、ケインは、

それは、まだだと思っていた。彼女の次の言葉を聞いてからでも遅くはない、と。

（せっかく、故郷に戻ってきたんだ。セルフイス王子が近くにいて、あの腕の立つ

魔道士が、会わせてくれるっていうんだから、せめて一目でも、王子に会わせてやりたい……）

そう思う反面、会わせたくない気持ちもあるのが、正直なところだった。

実は、会って欲しくない方が大きかったかも知れない。

（バカなことを……王子と張り合おうつてのか？ 二人は許嫁だったんだぞ。俺なん

かが、彼女に、行くななんて、言えるわけないだろ）

心の奥底にあった、以前の恋人の、咎めるような顔が浮かぶ。

（……そうだよな。きみが見たのは、きつと彼女じゃない……）

ひとり想いを巡らせているケインの隣では、サンダガーが、ヴァルドリューズに

文句を言い続けているが、彼は一向に取り合う様子は無い。

（そういえば、なんでヴァルは、早くマリスを助けようとしんない？

俺にマスター

ソードを使って、歪みを切り裂くことも命じようとしんないし……）

ケインが、慎重な視線をヴァルドリューズに向けるが、彼は、サンダガーの文句も

まるで聞こえてはいないかのように、膜の向こうに映るマリスと、魔道士の男から目を離さず、静かに見ていた。

少しの沈黙の後、マリスが顔を上げた。

「せっかくのご厚意だけど、……遠慮させて頂くわ」

にっこり笑ってはいたが、その水晶の瞳は、どこか淋し気だった。「さっきも言ったように、あたしは、もうあの時のあたしじゃないのよ。人だって

殺したことがあるし、男の人だって……騙したことはいっぱいあるし。女王が怒ってる

とかは関係ないの。あたしは、セルフイスに合わせる顔がないのよ」

「しかし、殿下は」

「お願い！ 会わせないで！」

魔道士の言葉を、マリスは鋭く打ち切った。

「あたしの勝手な言い訳を、押し付けて悪いけど、お願いよ、彼とは会わせないで。」

今、会ったら、全部終わりになってしまっわ！ あたしは、彼と一緒にいたくなっ

しまう。そうなるわけにはいかないのよ。まだまだ、倒さなくちゃいけないものは

多くて、だけど、あたしを助けてくれる仲間も出来たの。あたしは、城の中でぬく

ぬくしているよりも、その人たちと魔物を倒していくことに決めてるの。その方が、

あたしだって、生きてるって思えるんだもの」

「……ゴールドダヌ殿の命令だからですか？」

彼は、静かに尋ねた。

「……知ってたの？ でも、あたしが自分で決めたことだから、この際、じいちゃん

は、関係ないわ」

マリスは、一度、地面に視線を落としてから、顔を上げた。

「ひとつだけ、お願いを聞いてくれないかしら？」

魔道士は、慎重な態度で、ゆっくりと頷いた。

「あたしが、みんなのところに戻るのを手伝って欲しいの。みんなって、今一緒に

いるみんなのことよ」

魔道士は、彼女の手にしているバスターブレードに視線を移す。

「その剣の持ち主も、いらっしゃるのですか？」

「ええ。彼は、結構いいヤツなのよ」

マリスが魔道士にウィンクしてみせる。

ケインは、ちょっと嬉しく思った。

「ちょっとぼーっとしてるんだけどね」

それは余計だと、ケインは思った。

「それでは、どちらにお送りすればよろしいでしょうか？」

魔道士ギルシュが尋ねる。

「そうねえ……。ヴァルー、その辺にいるんでしょう？ ちょっと迎えに来てくれない？」

マリスは、あちこちに向かい、呼びかけた。

ヴァルドリューズとケインの目が合った。

「ケイン、マスターソードを、時空の歪みに突き刺してくれ」

待っていたとばかりに、ケインは目の前の時空の膜に、剣を差し込んだ。

「げっ！　なんで、あんなところに剣が！？」

マリスは、彼女からすると、右の空に見えているであろう剣先を見付け、驚いて

あつすま
後退った。

「どうやら、あそこらへんにいらっしやるようですね」

魔道士が片手をすっと上げると、マリスの身体が、ふわっと宙に浮かぶ。

「ありがとう！　この恩は忘れないわ！　あなたも気を付けてね、ギルシュ！」

魔道士に向かい、マリスは手を振ると、剣の刃へと近付いていった。

剣へ近付くにつれ、マリスの身体は黄金色の光に包まれた。剣の差し込まれたところからは、同じような金色に包まれた腕が、マリスの腕を掴み、引き上げる。

完全に、膜から抜け切った時、弾かれたように押し出され、ちょっとした風を巻き起こす。

それから、ケインは、マスターソードを膜から抜き取り、元通り鞘に納めたのだった。

金色の光が収まるのと引き換えに、マリスの姿が現れた。

薄暗い、青白い光の岩の中を、きよろきよろし、ケイン、クレア、ヴァルドリユーズに気が付く。

「マリス！」

クレアがマリスの首に飛びついた。

「クレア、ケイン！　皆、無事だったのね！？」

クレアの瞳から伝わった涙の粒が、マリスの首筋を濡らす。

「どうして泣いてるの？」

「なんでもないの。……マリス、戻ってきてくれて良かった……！」

「

ケインも、クレアが彼の想いも代弁してくれたように思いながら、微笑ましく、

二人を見守る。

マリスは、わけがわからず、しばらく呆然としていた。

「……そっか、あの剣は、マスターソードだったのね？」

ケインと目の合ったマリスは、クレアの腕をやさしく解いてから、右手に握り締め

ていた巨大な剣の柄を、彼に差し出した。

「これ、落ちてたから」

ケインは、何とも言えない瞳で彼女を見つめると、思わず抱きしめていた。

（バスターブレードと一緒に、無事戻ってきてくれた！）

（どんなに王子に会いたかったことか！ それを振り切るのは、本当は辛かっただろ

う……！）

言葉にならない様々な想いが、彼の中を駆けめぐる。

殴られてもいい！ ぶっ飛ばされてもいい！ そう覚悟していたのだが、マリスは、

意外にもおとなしくしていた。

「ちょ、ちょっと待って！ 誰よ、あんた！？ ……もしかして、サンダガー！？」

ケインの腕の間から顔を出し、マリスは驚いていた。

サンダガーは、誇らし気に、腕を組む。

「いかにも、俺様は、お前の守護神、獣神サンダガー様よ。さつき、お前を空間から

引き上げたのも、俺様なんだぜ？ おめえが精神ダメージを受ける

のをカバーする

ためにだな、神々しい黄金の結界で包んで」

「なっ、なんで、あなた個人で独立してんのよ？」

「んなこたあ、ヴァルドリユーズに聞け！ あいつのせいなんだからな」

得意げに説明しかけていた獣神であったが、思い出したように不機嫌になった。

サンダガーから視線をヴァルドリユーズに移す。

ヴァルドリユーズは、普段の平然とした目で、彼女を見下ろしている。

ケインが手を離し、マリスは、ヴァルドリユーズに近付いた。

「どうということなの？」

「ここは、次元の穴が常に移動しているらしい。おおよその範囲は決まっているよう

だが、地上に現れたり、このように地下に引っ込んだりしているのだ。

しかも、ここは、いろいろな辺境とも、次元を越えて簡単につながっている。地上

で感じられたおかしな『魔』の気配とは、魔物だけでなく、あまりにも重なった時空

の歪みなどが原因だったのだ。

サラマンダーとの戦いで、それに気が付き、不安定な時空のもとで獣神を召喚した

ままでは、お前の身が危険だと分かったのだ。

ここは、本来の魔力の約半分の能力しか発揮できない。最悪、お前の精神が彼に

乗っ取られてしまう恐れもあったのだ」

初めて明かされた事実には、サンダガーを除いた三人は、ぞーっとしていた。

「そこで、ある呪文を試したのだ。以前、魔神『グルーヌ・ルー』

の力を借り、編み出しておいたものだが、サンダガーを人間程度に抑える呪文だ。呪文自体はたいしたことはないが、タイミングが難しかった。

彼が、マリスから、完全に分離してしまう直前にかけないと、効果のないものだったのだから」

ケインには、わかるようできて、よくわからなかったが、マリスとクレアは、理解出来た。

側で聞いているサンダガーは、聞けば聞くほど面白くもないという顔になっていった。

「そんなに時空が入り組んでいたところだったのね。なんでなのかしら？」

マリスが、首を捻る。

「大昔、魔神『パール・ダハ』を呼び出した魔道士のことを、知っているか？」

ヴァルドリユースは、皆を見渡した。

「パール・ダハ？ どこかで聞いたような……ああ、そう言えば……！」

ケインが、手を打った。

「ザンドロスって上級のヤミ魔道士が、確か、俺とマスターソードを手に入れて、

そいつを召喚しようとしていたんだっ！ その時、聞いた話だけど、大昔、ある

魔道士が召喚したんだが、制御出来なくて、魔神は暴走し、国一つを地中に埋没させ

た とかなんとか」

「その場面なら、俺も知ってるぜ。天界で見てたもんな」

サンダガーがケインに続いた。

「まあ！ なんですって？ そんな大変な事態を止めもせずに、ただぼーっと見て

いただけだっていうの？ ひどいわ！ それでも、神様ですか！？」

「分野が違うんだよ。しょうがねえだろー」

目尻のつり上がったクレアに攻められ、サンダガーは、面倒臭そうな声を出した。

「それが、ちょうど、この砂漠の辺りだったということを出し出したのだ」

ヴァルドリユーズが、静かに添える。

「時空の歪みは、その時の魔神が暴れたせいだろう。この次元の穴も、ここを通り、

他の時空にも現れたり、消えたりしていたのかも知れん」

「ベアトリクスとの境界にも、時々魔物が現れたりしてたのよ。まさか、その影響じゃ

？」

マリスに、ヴァルドリユーズは頷いた。

「原因の一つではあるだろう」

「じゃあ、こここのこんがらがった時空の歪みをなくせば、魔物の行き来は随分減る

わけね？」

「少なくとも、ここを通じての魔物の行き来は、止められるな」

サンダガーが答え、ヴァルドリユーズも頷いた。

マリス、ケイン、クレアは顔を見合わせ、「よし！」と言うように大きく頷き

合った。

「……ということは、ちょっと待ってちょうだい」

何かを思い出したようなマリスは、皆を見回した。

「この空間とベアトリクスの境界が繋がってたんなら……さっ

きもここにいた

あなたたちは、まさか　！　」

マリスの顔から、さーっと血の気が引いていった。

「さっきのベアトリクスでの会話、……まさか、全部聞いてたんじやないでしょうね？」

「ね？」

「そんなの当たり前だろ？」　サンダガーが平然と言った。

「なんですって……！！」

顔面蒼白になり、よろめいているマリスに、ケインが怪訝そうな顔を向ける。

「おい、大丈夫か？」

マリスの頬が上気していく。

「いやーっ！　バカー！！」

びたん！

ケインの頬に、凄い衝撃が走った。

そこだけでは収まらず、頭にまで響いていき、心にまで伝わった。

「忘れて！　忘れるのよ！　いい？　思い出しちゃだめ！　わかつた！？　」

「た！？　」

マリスは、ケインの襟元を掴むと、がくがく揺すった。

「なによ、別に、変なことは言っただけじゃないの」

クレアが首を傾げる。

「私は感動したわ。マリスにも、好きな人がいたのね？　それも、

王子様だなんて

素敵！　」

「だめだめだめだめ！　絶対に忘れるのよ！　わかつた！？　」

ケインは放り捨てられ、マリスは顔を真っ赤にしたまま、クレアに迫って行くが、

クレアの方は、にっこりと微笑み返していた。

「あら、いいじゃないの、隠さなくなつて。マリスも、普通の女の子だったのね」

「いや、全然普通じゃない」ケインの眩きは、かき消された。

「ああ！ 私もいつか、素敵な恋を試してみたいわ！」

両手を組み合わせて、うっとり宙を眺めているクレアを、ケインは驚いて、一歩

引いて見ていた。

「俺は、当然知ってたぜ。マリスの守護神様だもんな。お前のことなら、なんでも

知ってるぜー」

「バカバカバカバカ！ 全部あんたのせいだからねーっ！」

追い討ちをかける獣神に、動揺したマリスは、いつまでも責め立てていた。

地上への脱出！

ヴァルドリューズが、草の上に座り、目を閉じている。精神を統一し、ミュミュと

カイルの居場所を探っているのだ。

彼にとっては、ミュミュの気配は探知しやすく、魔力ゼロのカイルは、彼の魔法剣の魔力を辿るということだった。

「どうやら、ミュミュとカイルは一緒にいるらしい。おそらく、彼らは、今、地上にいる」

地中に埋没した帝国跡を、探し回っている最中に、ヴァルドリューズが、地上から僅かにミュミュの羽音が聞こえたというので、五人は、地上へ脱出作戦を立てることにした。

「マリス」

萎れたようになっていたマリスを、ヴァルドリューズは呼び寄せ、耳打ちす

る。マリスは、時々頷いていた。

「サンダガー、今のあなたの力で、その『次元の穴』を塞げるかな？」

ヴァルドリューズが尋ねる。

重なり合った時空の歪みから、砂漠に出現していた次元の穴を見つけるのは、地上にいた時よりも容易かった。

「さあな。本来の俺様ならわけないが、今は、『ヒト並み』だからな」

身体の高さも能力も、人間並みだという獣神は、両手を腰に当

てて返した。

出来ないことでも、堂々と威張って言うのが神の尊厳だとも言わんばかりである。

「では、少しだけ、あなたの魔力を解放する。それくらいは、今の私にも出来そうなので」

ピクツと、サンダガーの眉が動く。

「ほほう、俺様の能力を？ その次元の穴を塞げば、地上に出られるっての

か？」

「おそらく」

「待ってください！」

クレアが進み出た。

「私、ヴァルドリユーズさんから頂いた魔道書を、無くしてしまっただんです。もう

少し、探してみてもいいでしょうか？」

「けっ！ 散々探したけど、見つからなかったじゃねえか。魔道書なんか頼んなく

たって、魔法くらい使えるようになれよ」

「そ、それはそうだけど……あの魔道書は、ただの魔道書ではなくて、今は、もう

この世に一冊しかないという、チャール・ダパゴの魔道書なの。それも、ヴァルド

リユーズさんが、私の勉強のために、苦労して手に入れてくださったのだから」

クレアとサンダガーがにらみ合う。

「クレア、悪いが、あきらめてくれ。魔道書なら、他のものも出ている。そのうち、

また手に入れる」

ヴァルドリユーズにそう言われ、彼女は引き下がったが、後ろ髪を引かれる思いで

いるには違いなかった。

「俺のバスターブレードは、マリスが見つけてくれたから、助かったよ。下手したら、捕まって、処刑されてたかも知れないのに、俺の剣、一生懸命取り返してくれたもんな。ありがとな」

ケインは、素直に感謝の気持ちを表した。

「別に、あたしは、命張って、ケインの剣を取り戻そうとしたわけじゃないんだから。

みすみす捕まる気なんて全然なかったわよ。連行されてる最中に、どっかで剣奪って、暴れてやるって思ってたんだから」

マリスは、ツンとそっぽを向いた。

そんな彼女の頬が、うつすら紅潮しているのを見付け、照れ隠しだとわかる。

どこか可愛らしいその様子は、演技 武遊浮術の愛技ではないと、彼には思えた。

「素直じゃないなあ。お前、もうちょっと本心出した方がいいんじゃないの？ せめて、王子に会っておけば良かったのに」

「よけーなお世話よ」

あえて、怒ったように眉を吊り上げたマリスは、憎々し気にケインを睨むと、ぷいっと獣神の方へ向かった。

（マリスが否定しようがなんだろうが、あの時、彼女は、確かに俺のバスターブレード

に対しての思いを理解してくれていた。もし、ただの伝説の剣だったとしたら、あそ

こまで取り返そうとはしてくれなかったかも知れない）

『巨人族に取られちゃうことより、形見がなくなっちゃうことが辛いじゃない？』

（あの言葉が、嬉しかったんだ！）

いつか、バスターブレードの持ち主だったレオンのことを話そうと、ケインは思った。

サンダガーに命令しているマリスの、不機嫌そうな横顔を見つめながら、ケインは、心の中で語りかけた。

（いつか、ホントに全部片付いたら、ベアトリクスに行つて、お前を王子のもとへ

送り届けるから。それまで、俺は、お前の剣になろう。お前の戦いでは、必ず頼りになる剣に、すべてを任せられる剣になつてやる！）

……と、我ながら、格好いいことを思いついたのはいいが、同時に、彼女の無鉄砲な戦い方についていけるのか、という不安が、すぐさま湧き上つたのだつた。

「それじゃあ、いくぜー！」

サンダガーは元気一杯、不気味な空間の中に出て来た次元の穴の前に、仁王立ちになつた。

「時空の歪みの影響で、次元の穴がまた移動してしまうかも知れない。なるべく、早く決めてくれ」
「わかつてるぜ」

ヴァルドリューズには、サンダガーが首だけ向けて頷いた。

まずは、ヴァルドリューズが、サンダガーの力を少しだけ解放す

るということだ。

彼の掌からは、白い湯気のようなものが沸いて出て、それを獣神に浴びせている。

「よし、なんか元気が出てきたぜー！」

サンダガーは、両方の掌を、時空の合間に見える、ぽっかりと開いた、ヒトが通れるほどの黒い穴

次元の穴 に翳した。

その掌からは、バチツ、バチツと、電気のようなものが走り始めたのだった。

それがまるでどこからともなく集まってくるように、次第に大きな放電となつて

いくと、やがて、ヒトの頭ほどもある大きな光の球を中心に、かなり広範囲に及ぶ放電が起こる。

ヴァルドリユーズは既に獣神に湯気を注ぐのをやめ、ケインたちのところへ行き、

皆、身体を寄せ合つた。

「頑張つて、サンダガー！ あなたなら出来るわ！」
「マリスが応援する。」

「そうよ、頑張つて！ こんなことは、あなたにしか出来ないわ！」

「
クレアも一緒に叫ぶ。」

なんだかかわざとらしく聞こえたケインであつたが、獣神の方はまんざらでもなさ

そうに、薄ら笑いを浮かべていた。

「よし、そろそろいいだろう！」

既に、彼の身体の半分ほどにまで膨らんだ電光の球は、びりびりと音を立て、風ま

でもが、荒々しく吹き荒れる。

ヴァルドリユーズが、彼らの周りに、緑色の薄い膜を張る。

「くらえっ！」

獣神が球を発射させた。光の球は、バチバチと放電したまま、次元の穴に突進した。

強い光の乱射と暴風が巻き起こる！

ヒトサイズのサンダガーとはいえ、ヴァルドリユーズの防御結界がなければ人間

などは吹き飛ばされていたに違いない。

「はーっはっはっはっ！ 俺は、この瞬間を待っていた！ 今こそ、地上で大暴れ

してやるぜーっ！」

サンダガーが、揺らめく空間の中で、そう言っているのをケインは聞いた。

「なんてヤツだ！ それを狙って、わざとヴァルに、ちょっとだけ術を解かせたのか！？」

やはり、彼は邪神なのか！？ そうケインが思っていると

「ごおおおおおおお！」

光球の攻撃を受けた次元の穴が、みるみる縮んでいく。

その縮んだ中に、根っこごと抜けた草や木、巨大な岩までもが、勢いよく転がり

込んでいった。

「うぎゃあああああ！ なんだこりゃあああ！」

獣神の身体までもが、そこに吸い込まれかけた。

「マリス、ヴァルドリユーズ！ て、てめえら、またハカリやがったな！？」

「あんたの考えることなんか、最初っからお見通しよ！ 人間界を暴走しようったっ

て、そうはさせないわ。その勢いに任せて時空を通って、さっさと自分の巣にお帰り！」

マリスが勝ち誇ったように言い放った。

「ちくしょう！ 覚えてやがれー！」

いつもの捨て台詞を吐き、サンダガーの姿は見えなくなってしまった。

と同時に、地響きが起きる。

結界の中にいる彼らにも、充分伝わる。

ぼごわあっ！

彼らの立つ草むらの地面の底から、異様な音がすると、ヴァルドリューズの結界は、

地面から浮き上がり、丸い級の形へ変化していった。

「どんどん上昇してるわ！」

クレアが、結界の外を指し示す。

彼女の言う通り、それまでいた砂漠の地下 失われた帝国の、

白い迷路のような

壁、草原などが、いっぺんに抜け、舞い上がっているのだった！

「次元の穴が消滅したことによって、砂漠の土地が、元に戻っているのだ」

外から響く轟音で遮られがちではあったが、ヴァルドリューズの隣にいるケインに

は、彼の説明が聞き取れた。

まさに、埋没していた土地は、もとあった高さのところまで上昇しようとしていく

うとするのだった。

結界である緑の膜は解かれ、白い石の遺跡が、砂漠の上に忽然と姿を

現していた。

ケインたちが歩いていた時は暗くてよく見えなかった天井もあり、それを支える

円柱もあり、ところどころ破損してはいるものの、もとは立派な美しい神殿であったことは一目瞭然であった。

彼らから見ても、数百年以上も前に建てられたことは想像がつく、古い様式で造られた、白い石の神殿であった。

「なんて綺麗な……！」
思わず、クレアが呟いた。

クレアとケインが歩き回っていた白い壁は、神殿と少し離れたところに現れていて、町の面影がある。

「迷路みたいに、壁であちこち仕切られてたのは、こうして見ると、人が住んでいた家の仕切りだったのかも知れないな」

ケインの言葉に、クレアが頷いた。

砂漠に突如現れた、地下に埋もれていた古代の建物の数々は、容赦なく照りつける火の光に照らされ、思わず、解けてしまうのではないかという気にさせる。

「……サンダガーは？」

マリスの額に手をかざしてから、ヴァルドリューズが、ケイン、クレアに答えた。

「もとに戻ったらいい」

「どうやら、あいつ、脳ミソまでヒトサイズになってたらしいわね」

マリスがごろごろと笑った。

「神を欺くとは……！ 煽てて騙して、次元の穴だけ塞がせて、もう怒って出て来てくれなくなっちゃわないか？」

「さあ、どうかしらね」

心配になったケインであったが、マリスは大して気にも留めていないようだった。

「ひえー、なんだこりゃあ？ 随分とまた馬鹿デカイもん持って来ちゃったなあ！」

「カイル！？」

いきなり天から舞い降りてきた、金髪傭兵が、肩に小さな妖精を乗せて、着地した。

「無事だったか！」

「おう！」

僅か半日あまりであったが、ケインとカイルはじゃれ合って再会を楽しむ。

ミュミュは二人の周りをしばらく飛んでから、ヴァルドリューズに頬を擦り寄せた。

「そうだ、クレア、落としモンだぞ」

そう言いながら、カイルが、服の中から、古びた本を取り出す。

「こ、これは……！ チャール・ダパゴの魔道書！？」

マリス、ケインも、クレアの声に驚き、彼女の手元を覗き込む。

「どうやって、これを？」

クレアが、カイルを見上げた。

大事な魔道書が見つかり、喜ぶ前に、驚きの方が強いようだ。

「地割れに巻き込まれた時に、俺の近くに飛んで来たから、慌てて取っと思ったんだよ。」

大事なモンだったんだろ、それ？

ついでに、ミュミュも近くにいたから、必死で掴んだんだ。ほら、こいついれば、

どこでもいけるじゃん？ はぐれちゃっても、みんなのことも探せ

るしさ」

カイルが、にこにここと微笑みながら説明する。

「カイルってば、乱暴にミュミュのこと掴んだんだよ。ミュミュ、とっつても痛かった

の」

ミュミュは、両隣にいるケインとヴァルドリューズとに、耳打ちした。

「ありがとう……！」

クレアは魔道書を大事そうに抱きしめ、瞳を潤ませた。

カイルは、得意そうに笑ってみせる。

「それはいいとして、……あんた、随分さっぱりしてない？」

マリスが、カイルに顔を近付けて言った。

「ああ、俺たち、この先の村まで行って、一風呂浴びさせてもらってたんだ」

「なんですつてえ？」

ピクツときた彼らの心の動きを代表して、マリスがカイルの襟元を掴んだ。

「どーゆーことよ？」

「私たち、あなたたちのこと必死で探したのよ？ 魔道書を預かってくれて、本当に

感謝してるけど、私たちのことを探してくれようともせず、悠長にお風呂なんかに入ってたつていうの！？」

クレアもマリスと並び、背後に精神的炎を燃え上がらせた。

「えっ！？ いや、そんなことないよ！ さ、探したよ、俺たちだつて。なあ、ミュ

ミュ？」

カイルが尻込みしながら、ミュミュに訴える。

ミュミュは、ヴァルドリューズの肩に座り、こくこく頷いた。

「ミュミュが『お兄ちゃんたち探そう』って言ったら、カイルが『

じゃあ、俺はお姉

ちゃんたち探す』とか言つて、村に連れて行って言った」

「わーっ！ バカッ！ なんてこと言うんだ！」

ケインが溜め息を吐く。

「お姉ちゃんたち……」

マリスとクレアは、三白眼でカイルを睨む。

「あんた、まさか……お風呂入つて、綺麗になつて、ついでに綺麗なお姉ちゃんたち

と、遊んでたんじゃないでしょーねー！？」

「私たちのことを探してもしないで、よくもそんなことを……！」

「なっ、なんにもしてないってば！ 綺麗なお姉ちゃんなんか、あの村にはいなかったしさ」

「わあっ！」

「そーゆー問題じゃないっ！」

「わあっ！」

カイルは、二人に攻撃されていた。

ぎゃあぎゃああと騒々しい場所から遠のいたケインとヴァルドリユ

ーズは、しばらく

ぼーっと立っていた。

そんな中、ケインが切り出した。

「あの時、なんでマリスのこと、連れ戻さなかった？」

彼は、まだ完全には信用し切っていない目で、ヴァルドリユーズを見た。

対するヴァルドリユーズは、暑い日差しの下であるにもかかわらず、涼し気な目を、彼に向けていた。

「マリスが、もし、セルフイス王子に会いに行つてしまつたら、サングァーの召喚も、

ゴールダヌスの使命も 　もしかしたら、魔王が降臨してきても倒す手段が何もなく

なるかも知れなかつたつていうのに、なぜ止めなかつた？」

それが、今回の彼の行動で、ケインには不可解に思えた。

降臨した魔王と対決するかまではわからないが、ゴールドダヌスの計画は、マリス

抜きでは考えられないものはず。

ゴールドダヌス派ではないというヴァルドリユーズは、もしかすると、それを成し

遂げまいとしているのかも知れない、とケインは疑問を抱いていたのだつた。

「私には、彼女を連れ戻すほどの魔力はなかつたのだ」

意外な返事であつた。

「それなら、もっと早く俺に命じることだつて、出来たはずだろ？」

「

ヴァルドリユーズは、少し置いてから、答えた。

「彼女が、王子に会つても、いいと思つたのだ。彼に会うことによつて、自分のいた

場所へ帰りたくなつてもいいと 戦いから足を洗おうと決めても

いい、とすら思つた」

ケインの深い青い瞳が、ヴァルドリユーズの碧い瞳を、じつと見据えるが、本心が

らかどうか、それだけではわからない。

「彼女が戦いから引けば、ゴールドダヌスの計画とやらは達成出来ないだろう。むしろ、

そつなつた方がいいていうのか？」

「ミュミュがばたばたと、ケインの前に飛んできて、頬を膨らませた顔で睨んだ。

「ケイン、ヴァルのお兄ちゃんのこと、疑つてるのっ！？」 お兄ちゃん、ちゃんと

世界のこと、マリスのことも、考えてるよ。なのに、ひどいよー

！
「
「ミュミュ」

ヴァルドリユーズは、やさしく手でミュミュを制した。

「ゴールドナス殿の計画を達成させるのは、マリスの使命であると共に、私の使命だ。」

額のこのカシスルビーが証拠だ。これがついている限り、使いの魔道士は、その主人

に絶対服従を誓うのだ。そういうものだ。

同時に、マリスは、いずれ、ベアトリクスに帰るべき人間なのだ。それも、私の

受けた指令でもある。だが、それは『いずれ』であって、『今』ではない」

「『今』じゃないと思うんだったら、なおさら、なんでマリスが戦いから抜けても

いいなんて思ってたんだ？」

ケインの質問に、彼は、一瞬、瞳を揺らせた。

「それは、……マリスを、かわいいと思うからだ」

すざざざーっ！

ケインは、思い切り、後退っていた。

「か、かわいい？ マリスが？ ……お前が？」

予想外の言葉に、ケインはしばらく混乱していた。

気が付くと、ミュミュが「こらー、ケイン！ 失礼だぞー！ お兄ちゃんだって、

人間なんだぞー！」といいながら、ケインの頭をポカポカ殴っていた。

「以前、お前に言われたように、一年も一緒に行動していれば情も湧く。始めのうち

は、彼女のことは扱い慣れず、随分苦労したものだが、今では、それほどでもなくな
った」

そう打ち明けたヴァルドリューズの瞳は、いくらか和んでいる。
「お前に見れば、ミュミュはかわいい存在だろう？ それと同じことだ」

「そ、そうか。なるほど、ミュミュみたい……。世話は焼けるけど、放っておけな

い感じの。女としてかわいっていうより、コドモとか、ペットみたいな……。そっか、

そういうことかあ！」

「ミュミュは、ペットなんかじゃないでしょー！」

ミュミュがケインの頭の上に乗っかり、髪をぐしゃぐしゃにする。

「それじゃあ、……。信じていいんだな？ お前のこと」

上目遣いに、ケインがヴァルドリューズを見る。

「それは、お前の勝手だが、……。私は、お前を信じている」

そう言ったヴァルドリューズの碧眼は、どこかやさしく、どこかからかうようにも

見える、不思議な色合いに輝いていた。

その端正な顔立ちも、さらつとなびいた黒髪も、彼の纏まとう東方系の神秘的な

雰囲気も手伝って、男のケインでさえ、しばらく見蕩みどれてしまうほどであった。

（ずるい。こいつって、結構、ヒトを味方に引き込むの、苦手なよ
うで、うまいかも

……？）

ちよつとだけ、彼のことを信じてみようかという気になった、ケインであった。

エピソード

「なんか、ダグラはいなくなっちゃったけど、村まではもう少しなのよね？ それ

じゃあ、出発！」

マリスが、元気よく拳を上げかけるが、

「あっ、そうだね。その前に、せっかくだから、散々世話になったこの砂漠に名前を付けよう！」

「はあ、名前ねえ……」

彼女の思いつきに、皆、顔を見合わせる。

「だって、今まで地図にも表記できないところで、埋没してた国だって、こうして

遺跡となって現れてるわけだし。そういうのって、大抵、発見者が名付けるものでしょう？」

「

マリスは、自分の思い付きに酔いしれ、うっとり、白く輝く石壁を、見回していた。

「正義の白い騎士マリユス・ミラー命名　いいえ、歴史に名を残すんだったら、

本名の方がいいかしらね」

こほんと咳払いをし、彼女は言い直した。

「正義の白い騎士マリス・アル・ティアナ命名、この砂漠の名は…

…」

「ちょっと待てよ」

カイルが手で制した。

「もう、名前掘られてるぜ」

「なんですって？」

カイルが壁の一部を指差した。

『この神殿を、「獣神サンダガーの神殿」と定める。
これが存在している砂漠は、「ポペの砂漠」と命名する。
変更したヤツは死ぬ。』

誰が掘ったものかは、一目瞭然である。

「なんなのー？ このラクガキはーっ！？ あいつ、このあたしを
出し抜きやがった
わねーっ！」

自分のことは棚に上げ、マリスは怒り出した。

「ふざけた名前つけちゃって！ なにが『ポペの砂漠』よ！ ネー
ミングにセンスの
カケラもないわ！」

「案外、お前といい勝負じゃないか？」

思わず漏らした言葉を聞き逃さなかったマリスは、ケインをじろ
つと睨んだ。

「『変更したら死ぬ』だって。不吉だよなー」

「ほんと。これが、神様の考えることかしらね？」

カイルとクレアも、ほとほと呆れていた。

そのタイミングで、ケインの服のポケットで何かが震え出した。

「どうしたのよ？」

マリスが、まだ機嫌の悪い顔で、ケインの手元を覗き込んだ。

バヤジッドからもらったペンダントが握られている。

ペンダントを開けると、彼の肖像画が、ぼわーっとう実写に移り変
わっていった。

「皆さん、こんにちは！ お久しぶりです！ といっても、まだほ
んの十日足らず
ですけど」

元気のいいヒト離れた声がしていた。

彼は、木の枝分かれしている手で、身振り手振りを交えながら、

黒いフード姿で、
ペラペラと喋っていた。

「魔力を妨害する時空の歪みがなくなったおかげで、また交信ができるようになった
ようだな」

横から、ヴァルドリューズが言った。

「このペンダントって、向こうからの受信機能もあるのか。しかも、
バイブ!?」

ケインを始め、皆も感心するというより、驚いた。

「いくら交信を試みても、どういうわけか、なかなか出来なかった
ものですから、

心配しちゃって……。皆さん、大丈夫でしたか？」

「おう！ いろいろあって大変だったけどさ、もう大丈夫だぜ！」

バヤジッドに、カイルが笑顔で答えた。

「時空が入り組んじゃって、それで、魔力が遮断されてたらしい
んだ」

ケインが付け加える。

「そうでしたが……。なるほど、そういうこともあるんですね。

……ああ、なるほ

ど、そういうことでしたか」

彼は、同じことを繰り返したのち、納得したのか、両手をポンと
打った。

「それで、あのー、……私のハトは、そちらに届いたでしょうか？」

「

木の魔道士は、遠慮がちに切り出した。

その言葉で、一行は、オアシスを出る時、食料も何もかもが全部
揃った後に、彼の

ハトが栄養の飴を運んできてくれたことを思い出す。

「そういう事情では、皆さんが、いくら私にお礼の連絡を取りたく
とも出来なかった

わけですね。いやあ、飴が届いたのかどうか、ずっと心配だったのですが、そういうことならわかりました。とんだ災難でしたね」

「あ、ああ」

彼らは、曖昧に笑っていた。誰も、彼に礼を言おうなどとは思いつかなかったのだ

った。飴をもらったことすら、その場から忘れ去っていたのだから。「あの、お礼が遅くなって、申し訳ありませんが、本当に、ありがとうございました。」

あの飴があつて、私たち、非常に助かりました」

クレアが、バヤジッドの顔を伺うように、笑いかけながら、言った。

「そうですか、そうですか！ 今はもう在庫がないんですけど、お気に召したのなら
ば、作り次第、またそちらにお届け致しますでしょうか？」

バヤジッドは、嬉しそうな声を上げるが、一行は、顔を見合わせた。

「まだ余ってるし、幸い、近くに村もあつて、食料には当分困らないと思うから、
しばらくは大丈夫だわ」

マリスが作り笑いで答えた。

満腹感が得られず、彼女に限らず、皆にも、あの飴は物足りなかつたのだつた。

「そうですか。それでは、また何かあつた時にでも。」

……ああ、そうそう。皆さんが紅通りを整理して下さってからというもの、治安が

良くなったおかげで、観光客が増えてきましたね、国内はおるか、
なんだか近隣の国

からも注目されてるみたいでして。もしかしたら、これからフェル
ディナンドは景気

が良くなるかも知れませんよ」

彼は、嬉々として喋っていた。

（だけど、あそこって、ニセ物ばかり売ってなかったっけ？ 大丈夫なのか？）

ケインを始め、皆、少々心配にはなった。

「それから、フェルディナンドの宮廷魔道士の代表が、魔道士参謀のダミアス様に、

お礼のために、改めてアストーレを訪問するそうです。皇后陛下もご一緒に、しばらく

くはアストーレにご滞在なさるようです。多分、こちらは、アストーレの第三王女

アイリス様の花嫁修業もあるのではないかと思われます。もちろん、これは、私の

密かな見解ですが、もしかしたら、姉君である皇后陛下が、王女殿下の花婿を、ぱっ

ぱとお決めになってしまいかも知れませんか。私と致しましては……」

そこで、マリスの手が、ケインの手の中にあるペンダントの蓋を伏せた。

（俺を気遣ってる？ そんな必要ないのに……）

ケインは無言でマリスを見つめた。

「しかし、モンスコールは野蛮だし、デロスは第一王子なので婿には向かないし、

そもそも決闘の結果、結婚しないと約束されてるし……」

バヤジッドは、閉じられたことに気付きもせず、喋り続けているが、声はフェイド

アウトしていき、やがて消えていった。

「中原は、相変わらず、のんびりやってるみたいね。ま、あたしたちとは住む世界が

違うのよ。勝手にやらせておきましょう」

(『住む世界が違う』って、もともとは、お前だって『そっちの間』だったんじゃないか)

何気なくそう言ったマリスに、ケインは思わず、くすつと笑いを漏らした。

(たいしたもんだよ、王女のくせに)

「なに笑ってるのよ？」

マリスが眉をひそめて、ケインを見る。

「いや、マリスって、やっぱり変わってるなあって、思って」

「失礼ね。そんなこと言うの、ケインだけだわ」

マリスは少しだけ頬を膨らませた。だが、それほど嫌そうではなかった。

魔力を妨害するものはなくなったことで、ヴァルドリューズの間移動術が使えるようになった。

一行が一カ所に集まると、周りには、見慣れた薄い緑色の結界が張られていく。

カイルとミュミュが一足先に訪れた村を目指し、彼らは、新たな気持ちで繰り出したのだった。

あとがき

読んで下さった方、ありがとうございました。m(´`´)m
この三巻打ち込み最中に、仕事は忙しくなるわ、家族が二週間寝
込むわ、
やっと最終話に差し掛かるうという時、自分が副鼻腔炎で熱出て、
頭は痛い。
重いわで、思ったより、はかどりませんでした。(´`´)
副鼻腔炎……毎年、忘れた頃かかるなあ……。

それと、自サイト！
新システムに移行するとかで、一時期映らなかったり、ヘンな表
示に
なったり、ヘンなところ広告出るし、UPしたのに反映されてなかつ
たりで、
不具合が続き。
それにも手こずりました。(´`´)

それはそうと、夏にちょっこし行った鳥取砂丘は、大変参考にな
りました！
文章は、多少、表現加えた程度ですが。
当然、取材のためだけに行つたわけではなく、なんだか日本ぽく
ない
ところに行きたくなって。GWは予約が取れなかったもので。
あと、鬼太郎ロードも面白かった！砂丘とは反対方向で、空港
一つ分

距離ありますが。(´`´)

十 十 十 十 十

ところで、当時のあとがきによると、この砂漠編は、随分と書き直し
たようです。

読んでもらっていた友人からのNGが多く、三話分ほど（そのうちの

一話は、全消し？）書き直しだったそう。

登場人物クリスも、少年から、金髪傭兵へとキャラクターごと変わった

たのは、うつすら覚えていますが。出会う場面まで変わった。

「予定していた内容と、イメージや設定が大分変わった」とも書いて

ありましたが、どういう内容だったのかは、全く覚えておりません。

最後に、もう一度、スーちゃんたちを出そうと、ギリギリまで思

っていたようですが。

彼女たちは今後も、ちょこちょここと、ちょっかいを出してきますので。

十 十 十 十 十

この巻では、ケインがヴァルドリューズに不信感を抱き、それは、
長期間

かけてなんとかなっていく予定だったのが、ヴァルドリューズが、
最後に、

さりげなく魅力を振りまいていった……とあり、当時、書いてい
た自分も、

想定外だったそう。

わかりにくい人物だと思っていた彼は、意外と、ウラはないのか
も知れ

ません。

一つ、解説させて頂くと、蒼い大魔道士の一派、仮称プーですが、彼は、ケインの外伝にも出てきます。

「ああ、当時は、二巻の後に外伝を完成させていたので、登場した時は、

「あいつね」とタイムリー？ でしたが、現在、外伝はまだ完成していないので、彼の出番もまだ先となります。

本編で、彼の作ったゴーレムは、埴輪とか土偶などを想像して頂ければよろしいかと。

彼は、蒼い大魔道士には使えなくとも、自分にとっては、なかなか使えるキャラのようですね。

当時、読んでもらっていた男性友人のお気に入りキャラは、魔道士のチヨウさん、プー、トカゲの肉（キャラか、これ？）だそうです。女性友人さんは、ヴァルドリューズがお気に入りでしたね。

ベアトリクスのお宮廷魔道士ギルシュ、当時は名前は出しませんでした。

その時点では決まっていなかったんだっけな？

彼は、マリス編外伝後半で活躍します。

本編でも、いずれ直に会えるかと。まだそこまで、メモさえ辿り着いておりません。

十 十 十 十 十

ケインの外伝一巻は、現在、まだ途中までしかUP出来てませんで。砂漠編より先に取りかかっておきながら、追い抜かされてしまった。

四巻入ってからも、外伝は、ゆっくり更新していくことになりそうです……。

本当は、外伝仕上げてから四巻スタートの方がスッキリなんです。

次回、四巻からは、原文通りケインの一人称にしようか、三人称のままで行くか、悩み中です。もちろん、原文通りとなっても、手直しはしますが。

読み返すと、一人称のままでもいつか、と思ったもので。

三人称に変換が疲れたのかと思って頂いても構いません。(^ o

^ : :

今後とも、読んで頂けると、大変嬉しいです。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151y/>

『Dragon Sword Saga 3』砂漠の謎

2011年12月28日23時49分発行